

イナズマイレブン～クロスライジング～

shoogel(復活)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イナズマイレブンオリジナルエピソードです。円堂守とW主人公みたいな感じになつてます。

目次

FF編

雷門の試練

いざ！帝国学園！前編

いざ！帝国学園！後編

決意

噂の話

染岡の心

行くぜ尾刈斗！

尾刈斗の奇術！前編

尾刈斗の奇術！後編

新しい仲間と新必殺技？

秘伝書？

課題

野生中の実力

これがイナズマ落としだ！

河川敷の決闘！明かされる雷藤の過去

イナビカリ修練場

激突！御影専農！前編

激突！御影専農！後編

準決勝の相手

メイド喫茶で生まれた絆

目金立つ！

裏切り

101 95 86 80 76 67 61 58 52 47 43 40 36 33 28 25 22 18 16 13 8 4 1

裏切りの先に

雷門紅白戦！

影山の罠!!

最強帝国学園！前編！

激戦の末！ 帝国学園後編！

打ち上げ！

イナズマイレブン

気持ち

風丸の葛藤

全国大会開始！

戦国伊賀島中の忍術！

閃光の雷藤！疾風の風丸！

帝国学園の敗北

鬼道の過去

気持ちのぶつけ合い

鬼道の実力！千羽山戦前編！

雷門の試練

「せりやあああ！」

日の暮れた鉄塔広場に少年の声が響く。

少年は頭にオレンジのバンダナをはめて、木にぶら下げた、タイヤで一人特訓をしていた。

「やつぱりここにいたのか、円堂」

俺は少年に呆れながら喋った。

「雷藤！お前も来たのか！」

そう、俺の親友といつても過言じやない円堂守が言つた。

俺の名前は、雷藤 真紅（らいどう しんく）

雷門サッカー部所属の中学生二年だ。

「明日は大事な試合だぞ、その辺にしどけ」

「ああ！わかってるけど、どんなシユートを打つてくるのか、想像しただけで、ワクワクが止まらないんだ！」

その言葉を聞いて、俺は呟いた。

「やつぱりお前は、根っからのサッカーバカだな」

俺は笑いつつ、円堂のもとに駆け寄つた。

大事な試合というのは、明日うちの雷門中に

中学最強の帝国学園がサッカーの練習試合に来る。

しかも、もし負けてしまつたら廃部というオマケ付きだ。

「円堂出来たか？例のあの技は？」

「うーん、感じはわかるんだけど、何か足りないんだよな…」

その後、俺達は軽く体を動かした後、明日に備え二人とも家に帰るのだつた。

翌日……。

「やばいっス、緊張してきたっス…」

と体を縮こませ、震えているのは
うちのDFの壁山 堀吾郎だ。

名前は人を表すと言うのは、まさにこの事だと
言わんばかりの巨体である。性格に難ありだが…。

すると、背番号10を着たメガネをはめた
特に特徴のない男、目金欠流が言つた。

「まだ帝国の人たちは来ないんですか？ふふつ、さてはこの僕を恐れ
て逃げ出しましたね！」

その言葉を聞き、それはあり得ないなと思つていると
突如、空気が変わつた。

巨大な黒い乗り物が現れ、赤いカーペットが広がり
横にはサッカーボールを踏んだ、軍隊のような人が並ぶ。
すると、先頭に赤いマントを纏い、不気味なゴーグルを
掛けている男が現れ、次々帝国メンバーが出てくる。
黒い乗り物を見ると黒い服を着た男が見下ろして
不気味な笑みを浮かべている。

そして、帝国メンバーはグラウンドに広がると、
ウォーミングアップを始めたようだつた。

雷門中のFWの一人の染岡竜吾が少し苛立つっていた。

「何だよ、あいつらうちに挨拶もなく、俺達のグラウンドを使いやがつ
て…」

怒りが隠せてない染岡が呟やく。

「それは失礼したな、初めてのグラウンドで少し慣れるために、ウォー
ミングアップをさせて貰つたが、挨拶がまだだつた」

そうマントの男が言い残すと

眼帯をはめた男からボールを貰い、高々と蹴り上げた。
すると、マントの男は空中に飛び上がり、ボールを
円堂目掛けて、シユートを放つた。

あまりの速さに俺は、何が起こつたかわからなかつた。
円堂が両手で何とか抑えたが、円堂のグローブからは
微かに焼き焦げた匂いが漂つていた。

「ぐつ……」と円堂は手を押さえ、威力の凄まじさを
物語つてゐる。

「ほう、俺のシュートを防いだか…、この試合せいぜい、三分はもつてくれよ」

と言い残すと、マントの男は選手を集めグラウンドに並んだ。

負けるわけにはいかない、この試合絶対勝つ！
俺は強い意志を抱き、グラウンドに並んだ。

いざー！帝国学園！前編

ザツザツザツ…。

グラウンドの中心に

円堂を先頭にした雷門イレブンと

マントの男を先頭にした、帝国イレブンが並んだ。

「鬼道さん、こんな無名チームと試合して何の得があるつていうんですか？」

と質問を男が鬼道という男に話しかけた。

「いまはまだ奴はいないようだが、いずれ奴は現れる……必ずな」と、マントの男——鬼道という男が笑いながら答える。

「さあ、試合を始めようか。審判始めてくれ」

と鬼道が言うと、審判は慌てたように声を出す。

「でっ、では今から帝国学園と雷門中の練習試合を始めます！」

というと、俺達は持ち場に着いた。

まずはFWに背番号18の俺と背番号11の染岡がつく。

M Fは6半田、7少林寺、8宍戸、9松野（マックス）

D Fに2風丸、3壁山、4影野、5栗松がつく。

そしてG Kに背番号1の円堂守がつく。

ベンチでは背番号10を着た目金と

マネージャーの木野と音無がグラウンドを見つめる。

そして運命のホイッスルがグラウンドに響いた。

最初のボールはこちらだ。

「いくぞ！ 染岡！」

「おう！ 雷門のサッカー見せつけてやろうぜ！」

と声を掛け合い、二人で帝国へ攻め込む。

帝国の一人がスライディングをし染岡に攻め込む。

そのスライディングを染岡は、綺麗に避け俺にパスを出す。

「そのままゴールまで行っちゃえ！ 雷藤！」

俺は頷くとそのままゴールまで敵を交わし、

帝国のG Kと1対1になつた。

俺は瞬時にゴールを見渡し、最善のコースへ思いつきりシュートを放つた。

「いつけええ！」

帝国のGKの反応が遅れるのが手に取るようにわかる。よし、一点と思ったときだつた。

バシン！と音が響いた。「なつ……」俺は言葉が出ない絶対入つたと思つたシュートをGKは軽々と止めていた。帝国のキーパーはボールを手の指で回す余裕を見せながらキーパーは叫んだ。

「そろそろお遊びは終わらせて、帝国のサッカーを見せてやれ！」

その言葉が響いたとたん、帝国の動きが変わつた。

キーパーが投げたボールが眼帯の男に渡る。

「いけつ、寺門！」と叫ぶと

目にも見えない速さでパスが繋がる。

するとドレッドヘアー風のオールバックの男——寺門がダイレクトでシュートを放つた。

円堂が構えた……時には遅かつた。

ボールはゴールのネットを触れ、円堂の前に

ボールが戻つていたところだつた。

「えつ……？」雷門の全員の口からこぼれた。

帝国の攻撃は止まらなかつた。

2点、3点、5点、7点どんどん取られていく。

「百列ショット!!

寺門の必殺シユートが円堂を襲う。

円堂は両手を前に出し、歯を食いしばり止めようとするが

「ぐわあああ！」円堂が吹き飛ぶ。

「円堂！」「キヤプテン！」と声を出しながら

皆が円堂に駆け寄る。

「もう無理でやんすよ、大体帝国に勝てるわけがなかつたでやんす」

「俺もう怖くて嫌つス……」

「俺は諦めたくない。今ままじや円堂に負担がかかっている、俺達

もゴールを守つて帝国に勝つんだ」

俺はそういうと円堂に「必ず点、決めてやるからな」と言うと
円堂はニカツと笑い、頼むぞと言つた。

すると鬼道は周りを見渡し笑う。

「まだ奴は出て来ないか、ならば引きずり出してやるだけだ！貴様ら
！奴らを潰せ！」

その言葉のあと、帝国はゴールではなく

俺達を狙い始めた：

鬼道が眼帯の男にボールを回した。

「佐久間まずはD Fからだ。その後M F、F W、G Kの順に潰せ」

眼帯の男—佐久間は頷くと

風丸、壁山、影野、栗松はシユートの嵐を食らい
グラウンドに倒れた。

「風丸！壁山！影野！栗松！」

と円堂の悲痛の声が響きわたる。

佐久間は寺門にバスを渡すと

半田、少林寺、宍戸、マックスも風丸達と同じように
シユートの嵐を受け倒れた。

俺と染岡は我慢が出来なくなり、寺門にスライディングを仕掛けた
寺門は嘲笑うように鬼道にボールを渡した。

「くそつ……！」俺はそう言葉をこぼすと、

染岡と一緒にもう一度スライディングを仕掛けようとしたが
その前に染岡がシユートを食らい地面に倒れた。

「このやろう……！」と怒りの声をこぼし、鬼道を睨むと
鬼道は再び寺門にボールを渡した。

寺門は俺の前に来ると、

ニヤッと笑いボールをふわっと上げ俺目掛けて蹴った。
「ジャッジスルー！」

俺は気付くと空中に浮かび、腹に痛みが走つていた。

俺はそのまま地面に叩き付けられ

意識がもうろうとする中、

木の陰にフードの人が見えた気がした。

いざー！帝国学園！後編

「う、うう……」俺は少しの間、気を失っていたようだつた。

ピッ、ピーと前半終了のホイッスルが鳴り響く。

俺達はボロボロになり、肩を借りながらベンチに戻つた。

「大丈夫!? みんな！」とマネージャーの木野が駆け寄る。

俺達はマネージャー達から治療を受け、

俺と円堂は後半に向かう準備をし始めた

他のメンバーは地面に顔を向け、諦めの顔が伺える。

「何、落ち込んでんだよ！ まだ前半が終わつたばかりだぜ、これから逆転だ！」

と円堂は呼び掛けるが

返事をするのは俺と染岡、風丸だけだつた。

「駄目ですよ、染岡さん、この足じや試合には出れませんよ！」

とマネージャーの音無が声をかける。

「くそ！ 俺はお荷物かよ！」

と染岡がベンチを叩く。

「目金、染岡の代わりにFWに入つてくれ」

俺はそう言つたが目金は泣きながら

「ぼ、僕はこんなのがいやだあー！」

といい残し、ユニフォームを脱ぎ捨てて走り去つた。

「お、おい！ 目金！」

と円堂は叫ぶが足を止めることはなかつた。

「後半は10人でやるしかなさそうだな…」

風丸が呟く。

ここで俺は木の陰にいるフードの人気が

雷門のユニフォーム……、目金が脱ぎ捨てた、

背番号10のエースナンバーを見ている気がした。

「気のせいが……」と呟き、円陣を組み後半へ向かつた。

後半開始そうそう、帝国は前半以上の攻めを見せた。

円堂が膝を突く…。「ぐつ、くそ！」円堂は地面を叩いた。

これで帝國は22点目だ。

いまだ此方は22対0で負けている。

「まだ出ないか、それならこれはどうだ！」

鬼道叫ぶと、全員でFW、MF、DFをシュートの嵐で潰した。
俺はもう一度、最後に寺門の必殺技ジヤツジスルーを受けると
地面にうずくまつた。

「くそつ……円堂……」

と声にならない言葉で呟くと

いつそう、鬼道はニヤッと笑うと叫んだ。

「いくぞ、デスゾーン開始！」

その言葉が危険な事が起ころる前触れと予想が出来た…。

その言葉の瞬間、帝國の佐久間と寺門、洞面と呼ばれる
三人が空中に飛び上がり回転を始めた。

すると、黒いものが出来始めてボールを軸に黒い渦が出来る。

佐久間、寺門、洞面が同時にボールを蹴り落とした。

「「「デスゾーン!!」」

その途轍もないシユートが円堂に襲いかかる。

円堂は反応する事も出来ずに顔に直接食らいゴールに吹き飛んだ。

「円堂おおお！」と俺が叫ぶが、

円堂からの返事は来なかつた……。

23対0……。

「俺たちのサッカーへの思いは、この程度だつたのか……
と、俺が諦めかけたその時だつた。

「ま、まだ終わつてねえぞ！」

円堂がふらふらしながら立ち上がつた。

これにはさすがの帝國学園も後退りをした。

「デスゾーンをまともに受けて立つてゐる奴は、お前が初めてだ
鬼道はそう笑いながら、グラウンドの中心から歩き始めた。

「ごめんな、夕香。お兄ちゃんを今日だけ許してくれ」

フードの男がグラウンドに向けて歩き出した。

鬼道が「来たな……」と笑うと

ボールを寺門に渡し、やれ！と呼び掛ける。

寺門が必殺シユートを放つた。

「百列ショットおおお！」

円堂は「おおおつ！」と叫ぶと

ボールに思い切りパンチを放つた。

パアアン！と音が響き

円堂は軽く吹き飛んだが何とかシユートをクリアした。

寺門は円堂を睨むと「次は決める」と言い戻つていつた。

ザツザツザツ……。

マネージャーの二人がフードの男を確認した。

男は「ユニフォームを貸してくれ」と言うと

背番号10のエースナンバーを身にまとつた。

周りがざわめく。

「あれ、雷門助つ人か？」

「誰だあいつ？」

「どつかで見たことがあるような……」

背番号10を纏つた男は

ツンツンした感じの白い髪に襟元を立てている。

彼は最近来た、転校生だつた。

円堂が「来てくれたのか！豪炎寺！」と笑う。

豪炎寺は頷くとキツと前を見据える。

鬼道は豪炎寺を見て笑う。

「やつと出て來たか、見せてもらおうか、元木戸川中学の炎の天才ストライカー、豪炎寺 修也の実力を」

と言い残すと、スローライブからのボールを受け取り

「デスマゾーン開始！」と叫ぶと

佐久間にパスを回した。

佐久間、寺門、洞面は飛び、それぞれ回転を始め

出来上がつた黒い渦のボールを三人で蹴り落とした。

「「デスマゾーン!!」」

だが、今度は何故か俺は円堂なら大丈夫と思えた。

俺は前に走り出した、その前には豪炎寺も走っている。

デスゾーンが円堂を襲う。

「雷藤と豪炎寺は俺からバスが来るつて信じて走っている、俺はその気持ちに答えてみせる！」

すると、円堂の手のひらが光った。

円堂はそのまま手を上に上げると巨大な手が出現した。

「ゴッドハンド！」

ゴッドハンドと言う名の巨大な手の手のひらでデスゾーンを受ける。

デスゾーンは威力が収まり、円堂の手に収まつた。

「な、なにつ！」と帝国メンバーは驚きが隠せない。

「いつけえええ、雷藤おおお！」

と円堂が叫びボールを蹴る。

「ナイス、円堂！」と俺は叫びボールを受けると

ボールを蹴りながら、俺は帝国のDFに向かつた。

「DFは三人……。行ける！」と呟き

俺はものすごい速さで必殺技を放つた。

「電光石火!!」

帝国のメンバーは何が起こつたか解つていないようだつた。

「決めてくれえ！豪炎寺！」と俺が叫ぶと

俺はボールを高々と蹴り上げた。

豪炎寺は頷くと、炎の渦を巻きながら回転しシュートを放つた。

「ファイアトルネード!!」

ものすごい速さと威力のシュートがゴールのネットを揺らした。

あのGK—キングオブゴールキーパー源田が触れられないほどのものすごいシュートだった。

ピー！と笛がなる。

23対1。ついにあの帝国から点を決めた！

その瞬間みんなが集まり

みんなは満面の笑みを浮かべた。

その時、審判が走ってきて予想外の言葉を語つた。

「えー、たつた今、帝国学園から棄権するとの事でした。よつてこの試合、帝国学園の試合放棄で雷門中学の勝ちです」

俺たちは戸惑つたが、すぐに笑みがこぼれた。

「円堂、良かつたな廃部にならなくて」

「これもみんなのお陰さ！勝利の女神は俺たちに微笑んだんだ！」

「豪炎寺もありがとな！」

円堂がそう言つた時には、ユニフォームだけが残つていた。

決意

「あれ？ 豪炎寺どこいったんだろうな」

俺がそう呟くと円堂が周りを見渡しながら話す。

「この試合勝てたのは豪炎寺のお陰だ、せめてお礼をしたいな」

「よし、とにかく探して見るか！」

学校内はくまなく探したが見当たらなかつた。

「豪炎寺のやつ、外に出たのかな？」

俺は「そうかもな」と返事を返し、着替えてから外の搜索を開始した。

その間、円堂から豪炎寺の事を聞いた。

俺は豪炎寺とは全く喋つてなかつたからな……。

豪炎寺は元の学校でサッカーをしていた事。

不良に絡まれたとき助けてくれたこと。

サッカーを何故か遠ざけていること。

円堂はいろいろ説明してくれた。

「そりだつたのか」俺は知らず知らず呟く。

そういえば帝国の鬼道が言つてたな……。

元木戸川中の炎の天才ストライカー、豪炎寺 修也つて。

だけど、何故そんな有名な選手が雷門中に来て、

サッカーをやらないんだろう。

俺の脳裏でそんな事がクルクル回つていた時だつた。

俺達が信号で止まつていると、反対の歩道に豪炎寺の姿があつた。

豪炎寺はそのまま門を曲がつたようだ。

俺達は信号が青になるのを確認して

豪炎寺を追いかけ走つた。

しかし、豪炎寺を追いかけて来た場所は病院だつた。

もしかしたら、今日の試合で怪我でもしたのだろうか

それとも豪炎寺は持病を抱えていた？

と頭で考えていると、円堂が「入ろうぜ」と歩き出す。

俺達はそのまま病院の中へ向かつた。

「「ど、こいつた?」」俺と円堂が呟く。

見事にハモつてしまつた。俺達は豪炎寺を見失つたようだ。

俺達が諦めて帰ろうとした時、円堂の目の前で

病室の扉が開いた。そこから出てきたのは豪炎寺だつた。

「あつ、ゞ、豪炎寺奇遇だなあ…」

円堂がいかにも付いて来ましたみたいな下手な言い訳をしてる。

「お前ら付いてきてたのか?」

「豪炎寺怪我でもしたのか? 病院なんかに寄つて」

俺は单刀直入に聞いた。

豪炎寺はしばらく考えて話した。

「いつかは教えなきやなと思つていた」

と一度言葉を切つた後「入つてくれ」と言葉を続けた。

「失礼します」

と言つた俺達は眠つてゐる少女の姿を見た。

「気持ちよさそうに寝てるな」

と俺が豪炎寺に話しかけると少し悲しそうな顔になる。
「もう一年間も日を覚ましていない」

俺達は言葉が出なかつた。豪炎寺は言葉を続ける。

「夕香はサツカーが大好きだつた、その日も俺にシユートを決めな
きや駄目だよ、つて言つていた、だけどその日夕香は俺の試合を見に
くる最中に車との事故に合つてしまつた、俺がサツカーをやつてなけ
れば夕香がこんな事になることはなかつたんだ」

更に豪炎寺は言葉を続ける。

「だから俺はサツカーは出来ない」

「豪炎寺…お前の事情は解つた。だけどサツカーをやつてなればと
か言うなよ!」

豪炎寺は俺の方を向くと言いたげな顔で見つめる。

「妹さん、夕香ちゃんはサツカーをしている豪炎寺が好きだつたんだ
ろ? それなのにサツカーをやらないなんて夕香ちゃんは悲しんでる
と思うぞ」

「……夕香の為に…サツカーを続ける…」

豪炎寺は呟く。すると何処から細い声が聞こえた。

「そうだよ…お兄ちゃん…」豪炎寺がビクツとした。

豪炎寺は夕香ちゃんに駆け寄る。

夕香ちゃんは相変わらず眠っているままだ。

「夕香……そうだな、俺やるよ」

と言つて豪炎寺は立ち上がる。

「俺は勘違いしていた、サッカーをやらないでおくのが夕香へのせめての罪滅ぼしと思っていたが、サッカーを続けるのが夕香の為なんだな、俺はやるからにはフットボールフロンティアで優勝する。この雷門中でな」

俺と円堂は顔を合わせて俺は「ああ、宜しく！」と言ひ

円堂は「ああ、頼りにしてるぜ！」と笑つた。

こうして豪炎寺は背番号10

雷門の炎の天才ストライカーハイオ炎寺 修也として誕生した。

噂の話

「一というわけで今日からサッカーに入部した、豪炎寺だ。実力はこの間の帝国戦で見たとおりすげえ奴だ」

と円堂が雷門のサッカー部員に豪炎寺について話した。

「豪炎寺だ。基本FWをやつている。宜しく頼む」

と短い挨拶すると、周りから喜びの声が聞こえる。

「豪炎寺さんが入つたから、もう帝国なんて相手じやないつス！」
と壁山が話すと、続けて栗松、宍戸、風丸が話す。

「豪炎寺さんのシユートすぐかつたでやんす！」

「豪炎寺さんのファイアトルネード痺れました！」

「豪炎寺が入つてくれたら百人力だな」

と皆が歓迎の声を上げていると、部室の隅から声が聞こえた。

「俺は認めねえ、いきなり雷門のストライカーと名乗られても、雷門には雷門のサッカーがあるんだよ！それをこんな奴が出来るかよ！」

と染岡が叫ぶのを豪炎寺は黙つて見ている。

「だから俺は認めねえ、雷門のストライカーは俺と雷藤がいればいい」と言い残し、染岡は部室をあとにした。

部室に少しの間静寂が訪れた。

この静寂を断ち切つたのは俺だつた。

「まあ染岡の気持ちもわからないことはない。だつていきなり豪炎寺のファイアトルネードのようなものすんげえシユートを見せられたら、普通皆羨ましがるさ、俺も豪炎寺が羨ましい。だけど俺のは豪炎寺に対する憧れだけだな」

俺が言うと、円堂が続いた。

「染岡も最初の入部部員だつたからな。染岡に認めてもらうには試合を通して認めて貰うしかなさそうだな」と呟いた。
すると、マネージャーの音無が突然走ってきて
息を整えるとこう話した。

「次の練習試合が組まれましたよ！」
と話すと、俺達は湧き上がつた。

「相手は尾刈斗中です！」と話すが

俺は尾刈斗中なんて知らなかつた。

俺が「尾刈斗中つてどこ？」

と聞くがまともな答えが返つてこない。

すると音無が奇妙な事を話し始めた。

「この尾刈斗中は奇妙な噂があるんです。試合中突如呪文のようなものが聞こえたり、足が動かなくなつたり、時空が歪んだりするつて話です」

俺達は何も言葉を出せなかつた。

「そ、そんな事あるわけないっスよね！ ゆ、幽靈なんて居ないっスよね！」

と幽靈の存在を頑なに否定している壁山を見ると

俺は不意にイタズラをしたくなつた。

「そんなことはないぞ、壁山。幽靈は存在する。ほら、お前の後にも髪の長い幽靈が立つて いるじゃないか」

と話すと壁山の後で「そう、 いるよ……」と声が響いた。

壁山は恐る恐る振り向くと「ギヤアアアアアアアア！」

と叫び気絶した。後にいたのはまさに幽靈並みの雰囲気を持つ影野だつた。まあ壁山と俺が逆の立場でも俺も気絶してゐるだらうな

と考えていると、音無が「えーと、尾刈斗中との練習試合は三日後です。皆さん体調管理には気をつけてくださいね！」と話すと外へまた走つていつた。

「よーしつ、尾刈斗中との練習試合に向けて練習だ！」

と円堂が拳を高くあげると俺達も

「「おおおー！」」と声を合わせ拳を高く上げるのだつた。

染岡の心

「せりややややや!!」

染岡が思い切り、ゴールにシユートを放つた。
円堂がそれを新技で止める。

「熱血パンチ！」

パアアアアンと音が響き

染岡のシユートを跳ね返した。

「いいシユートだ！ 染岡！」

と円堂が染岡に対して声をかける。

「こなんなんじや、ダメだ。もつと強くならねえと…」

染岡はそういうと豪炎寺を見つめた。

今は尾刈斗中との練習試合に向けて練習中だ。

俺は今は風丸と一緒にグラウンドを走っている。

「染岡の奴、豪炎寺に対してもんまりいいイメージ持つてないみたいだな…」

と風丸が俺に話しかけた。

「そうだな…だけどやつぱりこの先の雷門には、豪炎寺の力がいるだろうしな、染岡と豪炎寺が力を合わせれば怖いもの無しなのにな…」

と俺も風丸に話し掛ける。

その後少し、黙つて走った後、

俺と風丸がグラウンドを見ると

豪炎寺がシユートを放つ前だった。

「ファイアトルネード！」

炎の渦を巻きながら炎のシユートを放つ。

「熱血パンチ！」

円堂も負けずに技を繰り出す。

「ぐわあ！」

円堂の熱血パンチは豪炎寺の

ファイアトルネードには全く通じなかつた。

「くつそー、やるな豪炎寺！」

と円堂は豪炎寺にニカツと笑いながら悔しがる。

「円堂も流石だな、いいパンチングだ」

と決めた側の豪炎寺も少し微笑みながら円堂に話す。

俺は風丸に話しかける。

「円堂と豪炎寺って何か似てるよな。違うタイプのサッカー好きつて感じ」

と俺は少し笑う。

「雷藤もあんな感じだよ」

と笑いながら風丸も返事を返す。

「そ、そうか？」

俺は少し照れながら走るのを止めて

風丸と軽くグラウンドを歩き始めた。

「よーし、今日はここまでだ！」

円堂が皆に声を掛けて、今日の練習が終わった。

すると染岡が俺のところをやつってきた。

「雷藤、一緒にこれから河川敷で練習してくれないか？」

勿論、答えはOKだ。

「ああ、いいぞ。一緒に練習しようぜ」

と話していると、円堂と風丸もやつてきた。

「なんだ、今から河川敷で練習か？俺達も付き合うぜ」と風丸が俺達に話す。

「よし、決まりだな、染岡4人で練習しようぜ！」

と染岡に話すと「ああ！」と言葉を返して

俺達は河川敷のグラウンドに向かった。

俺と風丸は一緒にドリブルとブロツクの練習をしている。

円堂と染岡はシユートとキーパーの練習みたいだ。

俺がボールを持ったまま、風丸を抜きに掛かる。

「させるか！」

風丸が俺に向かつてボールを取りに行く。

「甘いぜ、電光石火！」

俺は淡い光を纏い風丸を綺麗に交わす。

「やるな！雷藤！」

風丸が俺に呼び掛ける。

「ああ、やつと使いこなせるようになつたよ」

俺は笑いながら答えた。

その瞬間「くそ！」という染岡の声が響いた。

「何でだ、何で俺には技が使えねえんだよ！」

俺は染岡に駆け寄つた。

【染岡】

染岡が俺の方に振り向いた。

「技は心が大事だ。今のお前は豪炎寺しか頭にないだろ？」

俺が話すと、染岡の顔が変わつた。図星のようだ。

「一回豪炎寺の事を忘れる。そしたら染岡のサツカ―が出来るさ」と話すと俺は風丸のもとに戻つた。

「技は心か。確かに俺は豪炎寺のことしか考えてなかつた。そうだ、俺は俺のサツカ―をするんだ！」

と呟き、言葉を続けた。

「ありがとな雷藤、お前のお陰で目が覚めたぜ！」

染岡はゴール―円堂に向かい叫んだ。

「行くぜ！円堂これが俺のサツカ―だ！」

染岡の周りに青い龍が現れた。

「うおおおお！」

と叫びながら龍を纏つたシユートがゴールに向かう。

円堂は右手に力を込めて熱血パンチを放つた。

【熱血パンチ！】

円堂の熱血パンチをシユートにぶつける。

【ぐつ、ぐわあ！】

染岡の放つた、龍のシユートがゴールのネットを揺らした。

円堂は起き上ると染岡に向かい走り出した。

俺も風丸もそれに続いて染岡に駆け寄つた。

【染岡やつたな！】

円堂が嬉しそうに笑う。

「染岡、お前なら絶対出来ると思つていたぜ！」

「凄いシユートだつたな染岡！」

と俺、風丸も続けて染岡に話し掛ける。

「これならやれる、豪炎寺の奴には負けないぜ！雷藤これもお前の陰だ！マジで感謝するぜ！」

と染岡は俺に手を差しだし俺達は握手を交わした。

「絶対勝とうな！尾刈斗中との練習試合！」

円堂がそう話すと俺達の「「「ああ！」」

と叫ぶ声が河川敷に響いた。

行くぜ尾刈斗！

—試合当日

遂に尾刈斗中との練習試合の日だ。

この三日間俺達は結構成長したはずだ
三日間の間に新しい部員が増えた。

いや、帰ってきたと言うべきだろうか…
と俺は心で思いつつベンチを見た。

背番号12のユニフォームを着た

見覚えのある顔にメガネだ。いや、目金だ。

「ふふん、この僕がベンチを暖めておいてあげます！皆さんはグラウンドで尾刈斗相手に頑張って下さいね」

目金がそうベンチで叫んだ。

俺は心で思った：やつてることは雑用だけどなあと…
そんなことを思つていると突然寒気がした。

不気味な雰囲気をした人がグラウンドに集まつてくる。
あれが尾刈斗中のメンバーだろう。

「不気味…」

隣で影野が呟いた。

「お前が言うな」

俺と半田の言葉が綺麗にハモった。

少し笑いが起きたが、笑いはすぐに消える。

「君達が雷門中のサッカー部員だね」

一つ目の描かれたバンダナをした少年が呟いた。

その後ろには監督と見受けられる大人の姿が見える。

その監督と見受けられる大人が豪炎寺を見る。

「おお！君が噂の豪炎寺くんか！雷門中と帝国の試合見せて貰つた
よ、豪炎寺くんのシユートは衰えてなかつたね！」

と明るく豪炎寺に話しかける。

それを見ていた染岡話す。

「なんか気にいらねえな、お前たちが戦うのは豪炎寺じゃねえ！俺達

全員だ！」

と少し切れ気味で叫ぶと尾刈斗の監督が言い返す。

「私達は豪炎寺くんと試合がしたくて雷門中との試合を組んだんです。せいぜい豪炎寺くんの足を引っ張らない試合をしてくださいね」と言葉を残し尾刈斗のベンチに戻った。

染岡が「てめえ！」と尾刈斗の監督に掛かろうとするが

円堂が染岡を抑える。

「染岡我慢だ！俺達は確かに弱いかもしない。だけど気持ちでは遙かに勝ってる！雷門のサッカーをあいつらに見せてやろうぜ！」

と染岡に声を掛けている。

時間はどんどん迫つてくる、俺はスパイクの紐を結び直した。

審判団が駆け寄る。

「雷門中の皆さん開始時刻です。グラウンドに集合して下さい」

俺達は円陣を組んだあとグラウンドに整列した。

挨拶の時に俺の前には目に黒いアイラインをした男が並んでいる。

「君、スパイクの紐ほどけてる」

男が俺に話しかけた。

「本当だ、ありがとな。…いつほどけたんだろう…」

俺が呟くとアイラインの男。

「知らないうちにスパイクの紐がほどけた？まさか…」

男は少し顔を上げると歌い始めた。

「妖怪のせいなのね♪ そうなのね♪」

俺はその歌を聞くと鋭いツッコミを入れる。

「確かに同じところだけどそれは駄目だろ！」
と鋭いツッコミをいれた。

俺達は自分達の持ち場に着いた。

F W 豪炎寺 染岡

M F 雷藤 半田 宍戸 少林寺

D F 風丸 壁山 影野

栗松

G K 円堂

俺は今日はMFだ。

俺は染岡と豪炎寺の背中を見たあと
ホイツスルの音を待つた。

ピ——！

雷門対尾刈斗中の練習試合が今、始まつた。

尾刈斗の奇術！前編

「よし、行くぜ」

染岡がボールを豪炎寺に渡し、試合がスタートした。
豪炎寺は後ろの俺にボールを預けた。

「半田！一緒に前線に上がるぞ！」

「ああ！わかつた！」

俺がボールを受け取り

半田の気持ちのいい返事とともに前線へ上がる。

俺と半田は相手のMFを交わしながらDFを前にして
俺はパスを出そうとした。

しかし豪炎寺は相手のDFにがつちりマークされている。
対する染岡はマークが一人…。

俺はニヤツと笑った。

「残念だつたな！うちのストライカーは一人じゃないんだよ！」

俺は染岡にアイコンタクトを送った。

染岡はアイコンタクトに気付いてニヤツと笑った。

「行けえ！染岡！」

俺は少し強めのパスを出す。

染岡はそのパスを見事に受けてシュート体制に入った。

「ナイスだ、雷藤！これが俺の力だ！」

染岡の周りに青い龍が具現する。

「うおおお！ドラゴンクラッショ！」

染岡の必殺シュートが尾刈斗のゴールに襲いかかる。

「なつ…」尾刈斗のジェイソンのような仮面をしたGKは
反応することなく、ドラゴンクラッショが
ゴールのネットを大きく揺らした。

ポンポンとボールが帰ってくる。

俺達はそれを見て、染岡のもとに駆け寄った。

「染岡！やつたな！俺達が先取点取つたんだぜ！」

円堂がガツツポーズしながら染岡に駆け寄った。

「ドラゴンクラッショ対したシュートだな、俺は大人しくMFのまま
がいいかもな」

と俺は笑いながら染岡に話す。

「流石はドラゴンクラッショ、僕が名付けただけのことはあります
目金が会話に混ざってきた。

「えつ？ 目金が名前付けたの？」

俺はついつい質問してしまった。

「僕はあらゆるゲームをやりこんでこの境地に達したのです！」
と意味の解らないことを自慢気に話している。

俺は心で（はい、飛ばします）と呟いた。

「染岡！」

半田が染岡にパスを出した。

染岡はそのパスをダイレクトでゴールにシュートを放つた。

「ドラゴンクラッショ！」

ズババアアンドゴールのネットを揺らした。

「「よっしゃああ！」」

皆が歓喜の声を上げた。

2-0 俺達が二点差で勝っている。

尾刈斗の方は少し焦っているようだ。

「雷門にあんなシュートを放つ、選手がいるとはデータにありません
でした」

尾刈斗の監督がぶつぶつ呴いている。

急に尾刈斗の監督の雰囲気が変わった。

「てめえら、何をグズグズやつてる！ さっさと潰しちまえ！」

と大きな声で叫ぶと、一つ目のバンダナをした少年が話す。

「あーあ、監督があのモードに入っちゃつた。君達は終わつたね」

とニヤッと笑いながら、ボールを蹴つた。

突如呪文のようなものが聞こえた。

「マレ、マレ、マレトマレ、マレ、マレ、マレトマレ」

「これが例の呪文つスか!? 俺怖いつス！」

壁山が叫びながら怯えてる。

「呪文なんて関係ない！皆止めるぞ！」

俺は叫んでボールを取りに行つた。

そう、尾刈斗の選手を止めに行つたはずだった。

「何やつてるんだ！お前たち！」

風丸の一聲で我に返つた。

同時に驚いた。俺は何故か半田をマークしていたのだ。

「な、なんで……」

俺が呴くと、後ろから

「そんなのは後回しだ！戻れ！」

という、風丸の声が聞こえた。

俺達は急いで戻る。

その時また呪文が聞こえた。

「マレ、マレ、マレトマレ、マレ、マレ、マレトマレ」

頭がグワングワンしてくる。

尾刈斗の一つ目のバンダナをした少年が呴く。

「そろそろだね」

「ゴーストロック！」

と叫んだ。

グツと足が重くなり足が動かなくなつた。

「足が動かない？」俺達が動けないうちにも

尾刈斗はゴールに向かつてくる。

「ファンタムシユート！」

そしてついに一つ目のバンダナの少年が放つたシユートが動けない円堂の横に突き刺さつた。

その後俺達はゴーストロックを連発されて

何も出来ないまま2ー3と尾刈斗に逆転され

前半を終了した。

尾刈斗の奇術！後編

俺達はベンチに戻った後、後半の作戦会議を開いた。

「足が動かなくなるなんて…どういう仕組みなんだ」

と俺が呟くと、おどおどしながら壁山が呟いた。

「やつぱり呪いなんスよ！俺幽霊とか嫌つス～！」

それを聞いて円堂は言い返す。

「呪いなんてあるはずない！俺達は何かを見落としてるんだ！」

その後も皆いろいろ意見や仮説を出したりしたが

結局何も解決出来ないまま、後半の開始時刻になつた。

後半は尾刈斗のボールからだ。

一つ目のバンダナをした少年——幽谷がボールを後ろに回し後半がスタートした。

尾刈斗のMFの背番号10を着た狼男のような姿の少年がどんどん迫つてくる。

そして遂に円堂と1対1になつた。

「くらえっ！ フアントムシュート！」

狼男のような少年——月村がファントムシュートを放つた。

「これ以上点はやれない！」

円堂がそう叫ぶと円堂の手のひらが光つた。
あれはゴッドハンドの構えだ。

「頼むぞ！ 円堂お！」

俺は叫けぶ。

「ゴッドハンド！」

円堂のゴッドハンドが出現した。

バシュー！ と音を立てファントムシュートがゴッドハンドに直撃する。

ギュイイイイインと音が響き円堂の手に見事に収まつた。

「よしー行くぞ、カウンターだ！」

円堂はそう叫ぶと前線に大きく蹴り上げた。

そのボールは宍戸と代わったマツクスに渡る。

「いけつ！ 染岡！」

そのままボールを染岡にパスを出した。

染岡がパスを受け取りシユート体制に入ろうとすると相手のGKジエイソンの仮面のようなものをした男——鉈がぐるぐる手を回し始めた。

気のせいか空間が歪んで見える。

「ドラゴンクラッシュ！」

染岡の渾身のドラゴンクラッシュが鉈を襲う。

が、しかし途中でドラゴンクラッシュの威力が急激に落ちてGK鉈の手に完璧に収まつた。

「なつ…俺のドラゴンクラッシュが…」

染岡は呆然としている。

「この程度のシユート、いくら打つてもこの歪む空間には無意味」と鉈が仮面で解らないが、多分笑いながら言つただろう。「俺のドラゴンクラッシュがこの程度だと…」

染岡は地面に崩れ落ちた。

その時俺は違和感を覚えた。

そう、このトリックが解つたかもしれない。

そうこう考えていると鉈がボールを前線に蹴つた。

「マレ、マレ、マレトマレ、マレ、マレ、マレトマレ」

その時また呪文が聞こえ始めた。

ボールが幽谷に渡つた。

「そろそろ終わらせるよ、ゴーストロック！」

と叫ぶと俺達はまた動けなくなつた。

「くそつ！ またか！」

半田や風丸が叫んでいる。

そのまま幽谷は悠々とゴールに近付いてくる。

「マレ、マレ、マレトマレ、マレ、マレ、マレトマレ」

また例の呪文が聞こえてくる。

俺は円堂を見ると、円堂は何かを呟いている。

「マレ、マレ、マレトマレ、マレ、マレ、マレトマレ…」

円堂が呪文と同じ言葉を呴いている。

「マレ、マレ、マレトマレ、まれ、まれ、まれ止まれ」
言葉がはつきりしてくる。

「止まれ!? そうかあの呪文は止まれと俺達に暗示を掛けてたんだ! これならどうだ!」

円堂は叫ぶと手を前で大きく叩き

「ゴロゴロドカ——ン!!」と叫んだ。

途端に俺達は動けるようになつた。

「ファントムシユート!」

動けるようになつた途端にシユートが円堂を襲つた。

「ゴッドハンドじゃ間に合わない! それなら…」

と円堂は呴くと右手をグーにしてパンチを放つた。

「熱血パンチ!!」

渾身のパンチングでファントムシユートを大きく吹き飛ばした。

その吹き飛ばしたボールが俺に飛んでくる。

「頼むぞ! 雷藤!」

円堂は親指を立てて俺に叫んだ。

「任せとけ!」

俺はそう言い残し前線に駆け上がつた。

「電光石火!」

俺はことごとく相手を抜きまくつた。

俺が相手のG K 銖と1対1になると

鉻はまた手をぐるぐる回し始めた。

だが俺はこのトリックをとつこに気付いている。

(あの手のぐるぐるも一種の催眠術なんだ、だからあれを見ないで打
てばいい!)

俺は心中で呴くと、俺はボールをフワツと空中に上げると
クルツと回転し落ちてきたボールに回し蹴りを当てた。

「うおおお! サンダーイヤノン!」

雷をまとつた俺の新必殺シユートが鉻を襲う。

「歪む空間は無意味だぜ」

と俺が呴くとシユートはバリバリと音を立てて
鉈ごとゴールに突き刺した。

ピ――――！ 3対3

遂に同点に追い付いた。

俺の周りに皆が集まつてくる。

「雷藤！お前ならやると思つてたぜ！」

と円堂が叫びながら駆け寄つてくる。

すると豪炎寺が俺に話しかける。

「流石だな、お前も気付いていたか」

と微笑む。

「やつぱり豪炎寺も気付いていたか」

俺と豪炎寺は同じ事を考えていたらしい。

それを見た染岡が呴く。

「雷藤に豪炎寺はあるの歪む空間のトリックを気付いていたのか……す
げえよお前たちはそれに比べて俺は……」

俺には何と言つているのか聞こえなかつたが

染岡は何か決心したように上を向いた。

「皆！あと一点だ！絶対勝つぞ！」

と円堂が笑いながら話すと俺達は自分達の場所に戻つた。

「はあああ！」

俺はスライディングで月村からボールを奪つた。

「染岡！」

俺は染岡にロングパスを出した。

するとここで鉈が歪む空間の構えを起こした。

(そうか！染岡のドラゴンクラッシュはゴールを見なきや打てない！
ヤバいな染岡が不利だ)

俺がそう思つていると染岡はシユート体制に入つた。

「豪炎寺！」

染岡が叫んだ。

豪炎寺は一瞬解らなかつたみたいだがすぐ理解したらしい。

「ドラゴンクラッシュ！」

染岡が放ったドラゴンクラッシュユはゴールではなく空に向かっている。

そこに豪炎寺が炎の渦を巻きながら上昇してきた。

「ファイアトルネード！」

豪炎寺のファイアトルネードが染岡のドラゴンクラッシュユと合体して青い龍が赤い龍に変化した。

「あれは染岡くんのドラゴンクラッシュユと豪炎寺くんのファイアトルネードが合体して、まさにドラゴントルネードです！」

と目金が叫んだのが聞こえた。

その赤い龍が鉈を襲い鉈ごとゴールにまた突き刺した。

ピ――！ 4対3

俺達は遂に逆転に成功した。

そして次の尾刈斗のボールを隣に渡した瞬間

ピッ ピッ ピ――

と試合終了のホイツスルが鳴り響いた。

俺達は一瞬走るのを止められなかつたが状況を理解し一斉に走るのを止め

「「よつしゃああ！」」と叫んだ。

新しい仲間と新必殺技？

——尾刈斗戦から数日後

俺達は部室にいた。

俺達が部室で雑談を交え話をしていると
ガラガラと扉が開いた。

俺達が一斉に扉を顔を向ける。

そこには長身痩せ型の男がいた。

「ちーすつ！俺、土門飛鳥！中2のピカピカの転校生でーす」
といきなり話始めた。

「サッカー部に何のようだ」

と染岡が少し警戒した感じで話し掛ける。

「俺サッカー部入部希望ね！因みに前の学校じゃD.F.だつたぜ！」
と自分に親指を向けて自慢そうに話した。

「おお！入部希望か！歓迎するぜ！えーと、土門だつたな、これから宜しくな！」

と円堂が本当に嬉しそうに土門に話し掛けた。

「ああ！宜しく！」

と土門も笑いながら答える。

それから俺達は土門を交え、すぐそこまで迫った
フットボールフロンティアについて話し始めた。

——フットボールフロンティア

年に一回行われる、中学最高峰の大会

全国の勝ち残ったチームで競い中学最強を決める大会だ。

「フットボールフロンティア予選の一回戦どこと当たるんだ？」

俺がそう聞く。

「俺達の初戦の相手は……！」

円堂が話し始め、俺達は息を呑んで円堂を見た。

「初戦の相手は……」

ゴクリと俺の喉が鳴つた。

「わからない！」

円堂がはつきりと言い切り俺達は思いつきりずつこけた。

俺達がずつこけた体制から戻っていると

またガラガラと扉が開き、同時に声が聞こえた。

「一回戦の相手は野生中ですよ」

と声が聞こえた。

「冬海監督！」

円堂がびつくりしたような

ワクワクしたような目で見る。

「野生中だつて？」

豪炎寺が呟いた。

「野生中を知つてるのか？豪炎寺」

すると豪炎寺は話し始めた。

「ああ、一度木戸川の時に戦つた。あいつらはフットボールフロンティアでもかなりの強豪チームだ。野生中は空中の支配者と呼ばれている。空中戦ではあの帝国学園をも凌ぐだろうな」

円堂が話の間が出来た時に言葉を発した。

「でも俺達にはファイアトルネード、ドラゴンクラッシュ、サンダー・キヤノン、ドラゴントルネードこの強力なシユートが4つもあるんだぜ！」

と自慢気に話した。

しかし豪炎寺が円堂の話を聞いて話す。

「いや俺のファイアトルネードでも空中では抑えられてしまうだろう、ドラゴンクラッシュとサンダーキヤノンは陸だが野生中のDFには強力なディフェンス技を持つ選手が居たはずだ、多分止められるだろう。ドラゴントルネードも通用するかわからない」

それに続き土門が話し始めた。

「今の雷門のシユートじや厳しいかな」

それを聞いた染岡が叫ぶ。

「お前に何が解るんだ！」

土門はそれを聞いて話す。

「俺も前の学校で戦つたけど、あいつらのジャンプは並みじやないぜ」

部室に沈黙が訪れた。

円堂がいきなり叫ぶ。

「新しい必殺技だ！」

「新しい必殺技？」

俺はそのまま質問として返した。

「簡単に言うがなかなか必殺技は出来ないぞ」

豪炎寺はそう円堂に呼び掛ける。

「とにかく練習だ！」

と円堂が皆に呼び掛け、俺達はグラウンドに出た。

「「…………」「」

俺、円堂、豪炎寺は絶句していた。

「シャドーへアー！」

「ジャンピングサンダー！」

「壁山スピン！」

上から宍戸、少林寺&栗松、壁山だ。

勿論全部試合じや使えないだろう。

「今日は練習切り上げないか？」

俺は円堂達に話し掛けた。

円堂も「そうだな」と短く返事をして

俺達は今日の練習を終え

俺、円堂、豪炎寺、風丸と雷雷軒へ向かつた。

秘伝書！？

「おい、静かにしろよ」

染岡が俺達に呼び掛け、俺達は皆で頷く。

俺達は今、聞こえは悪いが雷門の理事長室に侵入している。

俺達が何故、理事長室に居るかというと

時間は遡ること、昨日の雷雷軒での出来事が原因だ。

——昨日の雷雷軒

「んー、それにしても必殺技どうするかな」

円堂が呟く。

すると風丸が反応する。

「円堂のおじいさんの特訓ノートには何か書いてないのか？」

その時、雷雷軒のおじさんがちよつとピクツとなつたのは
気のせいだろうか。

「んー、じいちゃんの特訓ノートにはゴツドハンドとかは書いてある
けど他の事はあんまり書いてないんだよな」

と話していると、雷雷軒のおじさんが円堂に話し掛けた。

「おい坊主、お前円堂とか言つたな」

円堂がラーメンをすすりながらおじさんを見る。

「そうだよ、それがどうしたの」

「お前さんがさつきから話しているおじいさんの名前はもしかして、
円堂大介と言うんじゃないのか？」

と円堂に向かい話す。

「おじさん、俺のじいちゃん知ってるの？」

と円堂が食つてかかるように耳を傾けると

おじさんが笑いながら話し始めた。

「ハハハッ！ そうか大介さんの孫か!!」

と話すと、おじさんは話を続いた。

「お前たち新しい必殺技を考えているみたいだな」

俺はその言葉を聞いて餃子を頬張りながら話す。

「うん、そうなんですけど考えてつかなくて…」

「秘伝書がある」

おじさんは何かを呟いた。

「えつ？ 今なんて言つた？ おじさん」

円堂がもう一度聞いた。

「秘伝書があると言つたんだ。大介さんが残した秘伝書だ」

俺と円堂、風丸は顔を見合わせ

「「秘伝書だつて!?」」と叫んだ。

円堂が少し戸惑つたように話す。

「えつ、特訓ノートじゃないの？」

おじさんはまた少し笑いながら

「特訓ノートは秘伝書の一部に過ぎない」

円堂はその言葉を聞いて、椅子から思いつきり立ち上がった。

「おじさん！ その秘伝書ってどこにあるの!?」

と真剣そのものの目でおじさんを見つめる。

その瞬間、おじさんは持つていたおたまを

円堂目掛けて思いつきり向けた。

円堂はびっくりして椅子と共にひっくり返つた。

円堂は立ち上がり叫ぶ。

「何すんだよ！ 危ないだろ！」

とムカツとしたのか少し荒い言葉遣いでおじさんに叫ぶとおじさんが話す。

「秘伝書はお前たちに災いをもたらすかも知れないぞ。それでも秘伝書が欲しいか」

円堂はニヤツと少し笑いながら

「ああ！」と返事を返した。

「流石は大介さんの孫だ。いいだろう場所を教えよう、場所は——」

そして今に至る。

何故、秘伝書が理事長室なのかそれは全く持つて謎だし、雷雷軒のおじさんが円堂のおじいさんの事を知つていたのか、後から考えると謎ばかりだ。

「よし開けるぞ」

円堂は金庫のダイヤルを回し始めた。

力チツと音が鳴った。

円堂は引いたり押したりするが開く気配すらしない。

「早くしろってバレたら大変……あつ……」

俺が話している途中で振り向くと

俺はその振り向いた体制から戻れなかつた。

「とつぐにバレてるわよ」

と女性の声が響いた。

彼女は理事長の娘の雷門 夏未だ。

俺達はその場で凍り付いた。

すると円堂が言い訳を思い付いたのか話始めた。

「いやこれも特訓なんだ！ いや大変だなあ」

俺はいくら何でもそれは無いだろと思つていると。

「そ、そう特訓なんだ！ 腕力を鍛えるための！」

風丸……。お前いい奴だな…。

俺が風丸の優しさに感動していると

夏未が「はあ……」とため息をつくと後ろから何か取り出した。

「あなた達が探していたのはコレでしょ」

とノート——秘伝書を取り出した。

「秘伝書！」

と円堂が駆け寄り秘伝書を受け取つた。

「でも意味ないと思うわよ。だつて読めないもの」

と最後に言葉を付け足した。

俺達が秘伝書を見てみると本当に読めない…。

「なんだこれ、外国語か何かか？」

と俺が話すと風丸が話す。

「いや、恐ろしく汚い字なんだ！」

俺は風丸の後ろに雷が見えた気がした。

「いくら汚い秘伝書でも読めないと意味ないな」

俺が咳くと、秘伝書を読んでいた円堂が「すげえ！」と叫んだ。

「ゴッドハンドの極意とか必殺技も書いてあるんだぜ！」

「えっ、読めるの？」

「だつてじいちゃんの特訓ノート見てたんだぜ、最初は俺も解らなかつたけど、どんどん解るようになつたんだ」と話すと、俺達に秘伝書を向けて話した。

「これだ！イナズマ落とし！二人で協力して打つシユートらしい」

「イナズマ落とし？どんな感じの技なんだ？」

と聞くと説明し始めたが正直訳が分からなかつた。

バーンやらドカーン、ビヨーンやら訳が分からない。

円堂はどうやら特訓したくてウズウズしているみたいだ。

俺も解らなかつたがイナズマ落としに興味あるしな。

「よし円堂もウズウズしてることだしグラウンドで練習しようぜ」

と皆に呼び掛けた。

「よーし！特訓だー！」と円堂が叫ぶと

「「おおおお——ツ！」」と皆で声を上げ

グラウンドに向かつた。

課題

「——よーし、今日は練習終わりだ！」

円堂の声が疲れた俺達の頭に響く。

日が暮れてきて夕日も隠れようとしている時間帯だ。

今日の練習でイナズマ落としの実行メンバーが選ばれた。

豪炎寺と壁山の二人だ。

豪炎寺の予想だと、イナズマ落としは

二人で同時に飛び一人が土台になつてもう一人が
土台を踏み台にして更に飛び上がり

ジャンプの最高到達点でオーバーへッドキックらしい。

それを聞いた俺と円堂は納得して

豪炎寺の発想の完璧さに感動した。

俺は学校での点数は良くない。

学年の成績順位は二位だ。

……勿論下からだが。

一番下は誰だつて？そこのサツカーバカに聞いてくれ。

「ちよつといいか雷藤」

豪炎寺が不意に俺に話し掛けた。

「どうした？豪炎寺」

俺が言葉を返す。

「ちよつといなスマ落としの練習に付き合つてくれないか？」
と少し遠慮がちに聞いてくる。

「俺が断ると思うか？練習付き合つてやるよ」

と俺がOKを出す。

「すまない、助かる」

と俺に少し微笑み俺達は鉄塔広場に向かつた。

「鉄塔広場に来たのは良いけど、どうするんだ？」

と俺が豪炎寺に話す。

「こういうことだ」

と話し鉄塔の横にぶら下がっている木の棒に指を指した。

「ああ、なるほどな」

この木の棒を見ただけで解ったのには理由がある。

それは今日の練習での事だ。

——今日の練習

「よーし、それじゃ一回やってみてくれ!」

円堂が豪炎寺と壁山に呼び掛ける。

今からイナズマ落としの練習をやつてみるようだ。

「行くぞ壁山!」

と豪炎寺が壁山に言う。

「は、はいっス!」と返事を返し

同時にジャンプをする、豪炎寺が壁山を踏み台にしようとした瞬間

壁山が下を向き、急に真っ青になつて

「こ、怖いっス!!」と叫んでうずくまつた。

豪炎寺は踏み台を失い、変な体制で着地したが怪我はないようだ。

「壁山どうしたんだ?」

と俺が壁山に聞く。

「俺高いとこ苦手なんっス!」

壁山はガタガタ震えながら話した。

「下を見ずに豪炎寺だけを見てたら怖くはないさ!」

円堂がそう話し掛けて壁山と豪炎寺は再チャレンジを行つた。

がやはり失敗に終わつた。

「豪炎寺さんだけを見ようと思つても、つい下を向いてしまつて…」

と壁山が話す。

「うーん、壁山以外の奴で土台になれる奴が居ないからな…壁山にはどうにか高いとこを克服して貰わないと…」

と課題を残したまま練習を終えたのだつた。

「つまりは足場の悪いところでもジャンプが出来るようにする練習つて訳だな」

と俺が話すと豪炎寺は頷いた。

「ああ俺が上手く飛べればイナズマ落としは成功出来るかもしけない」

豪炎寺が呟くと、豪炎寺は木の棒のところに行き
俺も豪炎寺に続いて木の棒のところに行つた。

——一時間半後

「はあはあ……」

俺達は一時間半もこの木の棒で練習している。
「意外と難しいな……」

俺が息を整え話すと豪炎寺。

「ああだが最初に比べたらだいぶ進歩している」

俺達はあと一時間練習して

この日は解散した。

そして日にちが立つのは早く
遂に試合の一日前になつた。

野生中の実力

「ついに明日か……」

俺は思わず呟いた。

明日野生中と練習試合ではない

本物のFF予選一回戦が行われる。

今日まで俺達は練習を一時間半増やす練習をしたが
結局イナズマ落とし完成までとはいかななかつた。

「やっぱり鍵は壁山だもんな…」

俺は自分のベッドでゴロゴロして いたが

俺は寝転がるのを辞め、着替えて靴を履き外へ出掛けた。
俺がやつてきたのは鉄塔広場だ。

何故か解らないが鉄塔広場に行こうという衝動に駆られたからだ。
「やつぱり静かだなあ」

と俺が呟くが当然だ。

今は夜の11時手前なのだ。

俺は鉄塔を登り夜風に当たりながら

明日に向けて気合いを入れたのだつた。

——試合当日。

俺達はバスで野生中の学校までやつてきた。

野生中の学校はまさに自然そのものだ。

この試合には雷門夏未もやつてきている。

その夏未が高そうな車から降りてきた時だつた。

動物を思わせる声があたりに響いた。

「これが車か初めて見たコケ」

と動物の真似をしているような人がいっぱい現れた。

「あ、あの人達が私達が今から試合をする野生中サッカー部です！」
と音無が俺達に説明しているが

俺は（こんな動物人間と相手するのか）とため息をついた。

そして時間は立ち、試合開始時刻になつた。

M F 宍戸 マツクス 半田

D F 風丸 壁山 影野 栗松

G K 円堂

が今回のスタメンということになつた。

ピ――――――!

音が鳴り響きついに試合が始まつた。

最初のボールを染岡が俺にボールを渡し

俺がそのまま上がつていく。

D F の手前になつたところで俺は高々とボールを蹴り上げる。

「お手並み拝見といこうか！ 豪炎寺！」

豪炎寺もそれに領き、炎の渦を巻きながら上昇し

ファイアトルネードを放とうとした時だつた。

「やらせないコケ！」

と鶏を想像させる野生中の一年にしてキャプテンの

鶏井 亮太が豪炎寺よりも高く飛んでいた。

豪炎寺は驚きの顔をして「なにつ……」と呟いたときには

ボールが鶏井に渡つていた。

そのまま鶏井は上がつていきチーターを思わせる水前寺にバスを出した。

そしてその水前寺がとんでもなかつた。

「速すぎる…………！」

目にも止まらぬ高速ドリブルでゴールに向かつてくる。

元陸上部の風丸でさえ水前寺に追いつけないので。

「おいおいあれじやチーターというかチートの間違えだろ！」

と俺は虚しく叫んでいると水前寺が驚ののような男をバスを出した。

「コンドルダイブ！」

パスをダイレクトに必殺のヘッドシュートで押し込んできた。

円堂は「決めさせるか！」とゴッドハンドを出そうとしたが
ボールが飛んでいる先にゴリラのような男が蹴りを放つ。

「ターザンキック！」

とシユートにシユートを合わせてきた。

「シユートチエインだ！」

と俺が円堂に叫ぶ。

「ぐつ！届けええ！」

円堂はは熱血パンチを繰り出し
何とかボールを弾き返した。

相手チームが笑っている気がした。

「こんなに差があるものなのか…」

と俺が呟く。

ボールが染岡へと繋がる。

「空中がダメなら、これはどうだ！」

とドラゴンクラッシュの体制を取った。

その時だった。豪炎寺が叫ぶ。

「止めろ！ 染岡！」

と叫んだが遅かった。

相手のDFのライオンに似た男が染岡にタックルをぶつけた。

「ぐわっ！」

と染岡は吹き飛ぶ。

「染岡！」と俺と豪炎寺が近付くと

「ぐうう……！」と少し呻きながら足を押さえている。

「救急箱！」と木野が音無に呼び掛け治療を行う。

しかし怪我がひどかつたらしく木野は染岡達に話し掛ける。

「この怪我じゃ無理だよ。誰かと変わらないと…」

「土門くん特別に今回は君に譲るよ。べ、べつに怖いとかいう訳じや
ないからね」

と土門に目金が話す。

「んじゃりますか！」

と立つて土門はグラウンドに向かつた。

out 染岡 in 土門

out 穴戸 in 少林寺

そしてフォーメーションも変えた。

F W 豪炎寺 壁山

M F 雷藤 半田 マツクス 少林寺

D F 土門 風丸 影野 栗松

G K 円堂

染岡が怪我した事により壁山をFWに上げ
俺はMFに入った。

土門もDFに入っている。

FWに豪炎寺 壁山ということはアレ狙いだろう。

「な、なんで俺がFWなんスか―――！」

という壁山の叫びが自然豊かなグラウンドを揺らした。

これがイナズマ落としだ！

俺は壁山が叫んでいるのを半無視して相手の隙を伺っていた。さつきまでこんな動物人間と……とか思っていた俺は馬鹿だつた。まあ実際に馬鹿だけども。

良く思い出したら豪炎寺は強豪と言っていたではないか。全く隙がない。

「これがフットボールフロンティアの壁なのか…」

俺がそんな事を考えていると、またボールが水前寺に渡っていた。あの高速ドリブルが披露されている。

俺もブロツクしに行つたが余りの速さにボールに触れられなかつた。

「くそっ！」

俺は言葉をこぼしながら水前寺の後を追うがやはり距離は遠くなる一方だ。

そして水前寺はまたボールを鷺のような男

——大鷺にボールを回した。

「コンドルダイブ！」

また強力なヘッドシュートをゴール目掛けて放つ。

「熱血パンチ！」

円堂の熱血パンチが炸裂してボールを弾き返した。

がそこに先程のゴリラのような男——五利が現れる。

「ターザンキック！」

今度は円堂の死角となる場所からシュートを放つた。

円堂が気付いた時にはゴールの目の前だつた。

だが俺はそのゴリラ野郎にいち早く気付いていた。

「はあああ！」

俺は電光石火を発動させながら

高速でゴール前に戻つていた。

「やらせるか！」

と俺はクルツと回転して

ゴリラ野郎のターザンキックを俺のサンダー・キヤノンで弾き返し、ボールをクリアする事に成功した。

「ナイス雷藤！助かつたぜ！」

と円堂が俺に呼び掛ける。

「なかなか手強いな……、ゴールは円堂頼んだぜ！」

と俺は言い残し入口にインでホーリーを持ったが前寺に向かって

そこに土門がブロツクに入つた。

「俺の実力見せてやるぜ！キラースライド！」

土門はそう言ひを放つ

そのまま見事はアテイングで水前寺からボーリを奪つた

と豪炎寺が呴いた気がしたが今はそれどころじゃない。

多分これが前半最後のチャンスになるだろう。

卷之三

と豪炎寺はイナズマ落としを促す。

一方の壁山は気が進む訳では無さそうだが

蒙矣」と一緒に手に入

豪談寺は体制を崩したが地面上に何とか立つた。

そして
ピッ
ピ

前半が終了した

俺達はベンチに戻ると皆疲れているようだった。一
みさせのアヤプニの俺のつぱり無理のス

とベンチ戻つて来た途端に壁山が俯きながら話した。

「何を言つてんんだ壁山！あんなに特訓しただろ？絶対やれるさ！」

顔を上げることはなかつた。

後半が開始して俺達は一層苦しい展開に陥っていた。

コンドルダイブそしてターザンキック。

このシユートチエインが立て続けに円堂を襲っている。

円堂はそれを全て何とか防いでいるが

点を取られてしまうのも時間の問題だろう。

こちらがボールを手に入れては

壁山と豪炎寺のイナズマ落としが失敗し繰り返すつと野生中の攻撃となつていてる。

「ひいいい！」

まだだ。

壁山が怯えながらうずくまる。

そしてボールは大鷲に渡り前線に上がつてくる。

「俺達は絶対に負けるわけにはいかない！」

俺が叫ぶと、皆も「負けるかあ！」と皆でゾーンプレスを始めた。

大鷲は思わずバツクバス。

だがゾーンプレスには欠点がある。

それは相手の選手よりかなり動いてしまうため体力をかなり消耗することだ。

「「はあはあ……」」

全員体力は限界だが誰一人諦めない。

そう全ては絶対点を取ってくれると信じているから。それを見た壁山が叫ぶ。

「何故？何故つスか！なんで諦めないつスか！」

その言葉を聞いた豪炎寺は少し言葉を強めて言い放つ。

「俺達が点を決めると信じているからだ」

「でも無理つスよ俺には……」

と後ろ抜きな発言をした壁山に豪炎寺は軽く睨む。

「俺達が諦めたらあいつらの思いを裏切る事になる。俺は仲間を裏切るサッカーはしない」

それを聞いた壁山は咳く。

「皆の思いを裏切る……、俺、皆の思いを裏切りたくないつス！」キッと前を向き叫んだ。

「コンドルダイブ！」

「ターザンキック！」

シユートチエインをしたボールがゴールを襲う。

「おおおつ！」

と限界を越えている手で円堂は迎え撃つ。

「ゴッドハンド！」

円堂はゴッドハンドを発動させ何とかボールを止めた。

俺の予想だと後半も残り僅か…。

これがラストチャンスだ。

「円堂！」

と俺は叫びボールを受け取った。

俺は前を見た。

最悪の場合、俺がシユートを打とうと思つたが

その心配はなさそうだ。

何故なら壁山がさつきまでとは違う目をしていたからだ。

俺は残りの体力を使つて電光石火を放ち前線に上がつた。

「頼むぞ！豪炎寺、壁山！」

俺の声が響きわたる。

俺は豪炎寺にパスを出した。

「壁山いくぞ！」

「はいっス！」

とさつきまでは有り得なかつた壁山の気持ちよい返事が響く。

豪炎寺と壁山は一緒に飛び上がつた。

そこに鶏井が豪炎寺達より高く飛んでいた。

「これが俺の答えっス————ツ!!」

そう壁山が叫ぶと壁山は空に腹を向けた。

豪炎寺がその腹に乗り二段ジャンプをした。

流石の鶏井も二段ジャンプには届かない。

「はああ！」

とボールにオーバーヘッドシユートを放つた。

「「イナズマ落とし！」

青い電気を纏つたボールが野生中のゴールに突き刺さつた。

ピ―――！ 笛が鳴り響いた。

「やつた！やつたスう～！」

と泣き目の壁山が叫ぶと豪炎寺が微笑む。

「まさか腹とは思わなかつたぜ。壁山にしか出来ない技だとゴールを喜んだ。

ピッ ピッ ピ―――！

試合終了の笛が鳴り響いた。

その瞬間俺は地面に尻餅を突いてしまつた。

その俺に手が伸ばされた。

「お疲れ雷藤、皆で掴み取つた勝利だな！」

その相手はニカツと笑う姿がよく似合う円堂だつた。

「ああ、円堂、そお疲れ様。お前がゴールを守つてくれたお陰さ」と俺達は勝利の喜びを分かち合つた。

フットボールフロンティア予選一回戦

雷門中対野生中 1対0 雷門中の勝利。

河川敷の決闘！明かされる雷藤の過去

——野生中との試合から二日後
俺達は河川敷で練習をしていた。

「うおおー・ドラゴンクラッシュ！」

染岡が叫びゴール目掛けて蹴る。

スバアーン！と気持ちのよい音と共にゴールネットを揺らした。

「絶好調だな染岡！」

と俺が染岡の肩を叩いた。

「まあなこんなに見られてちや恥ずかしいシュートは打てないからな
！」

と河川敷を跨ぐ橋を見た。

パシヤ パシヤ カシヤ カシヤ

カタカタ カタカタ カタカタ

凄い人が沢山見ている。

野生中に勝つてから俺達の応援が増えたのだろうか？
そう俺が思っているとヴォーンと音が響き

河川敷の坂から黒色の高級そうな車が飛んできた。

「「うわあああ！！」」

俺達は一斉にその場から逃げ出す。

そしてその車はグラウンドの中心で止まり
中から見覚えのある顔の人物が出てきた。

「あなた達今すぐ練習を止めなさい」

出て来た人物——雷門夏未の一言目がそれだった。

俺は意味が解らず「なんで？」と聞く。

「あなた達は応援と思っているんでしようけど、あれは他校の偵察隊
よ」

とため息混じりで衝撃の事実を告げた。

嘘だろ：俺結構技使っちゃつたよ…。

と心の中で呟いていると

突如、河川敷の坂の所にテレビ局のような車が止まった。

そしてその車から男が二人現れ
グラウンドに降りてきた。

「あの人達は…！」

と音無が持っていたノートパソコンを俺達に見せた。
そのノートパソコンを俺達に見せた。

「あの一人は今度対戦する御影専農中学のキャプテンでGKの杉森威
とエースストライカーの下鶴改選手です！」
と毎度毎度説明してくれる音無が話した。

その杉森が俺達に向かって話す。

「何故練習を止めた？お前たちが幾ら練習を止めて技を隠しても我々
には勝てないというのに」

といきなり失礼極まりない言葉を放った。
その言葉にムカツと来た俺は叫んだ。

「そんなのわかんないだろ！俺達は絶対お前たちに勝つ！」

俺が叫んだの見た下鶴改は嘲笑うかの様に話す。

「これはただの害虫駆除作業に過ぎない、負けることなんてありえない」

害虫駆除作業……？

俺達が害虫とでもいうのか？ふざけるな！

「てめえら決闘だ！白黒つけてやる！」

俺と円堂が同時に叫んだ。

円堂も顔がキレてる。

「ふん無駄な事だがいいだろう」

と下鶴改がどうでも良さそうに話した。

「勝負は一人がシユートを打ち、一人が止める。これで得点が多い方
が勝ちだ！」

と円堂が話す。

そして決闘が始まった。

勿論偵察隊も見ているがそんなこと知つたことか。

仲間を害虫扱いされたんだ。許してたまるか！

「それじゃいくぞ」

と下鶴改がボールを蹴りながら

円堂が守るゴールに向かっていく。

その時、下鶴改がシユート体制を作った。

そのシユートフォームは俺達のエースのシユートフォームだつた。

「ファイアトルネード！」

「「なにつ！」」

皆の口からこぼれた。

「熱血パンチ！」

円堂はファイアトルネードに戸惑いつつ渾身の熱血パンチを放つた。

「ぐつ、ぐわあ！」

だが円堂の熱血パンチがファイアトルネードに押し負けファイアトルネードがゴールネットを揺らした。

「そんな馬鹿な…」

円堂が決まつたゴールを見つめる。

次は俺達の攻撃の番だ。

豪炎寺が行こうとしたが

俺は豪炎寺を右手で止めた。

「豪炎寺が行きたいのは解る。だけど俺に行かせてくれ」と俺が話すと豪炎寺はこくりと頷き戻つた。

「いくぞスキンヘッド野郎！」

俺は叫んだのと同時にシユートの体制に入つた。

「サンダーイヤノン！」

俺の渾身のシユートが杉森を襲う。

「シユートポケット！」

その瞬間、杉森がバリアのようなものを出現させ

俺のサンダーイヤノンの威力を吸収して

杉森の手に收まつた。

「な、なんだと……」

俺のサンダーイヤノンが全く通用しなかつた。

杉森はボールを投げ捨てる。

「これでわかつただろう」

と咳くと下鶴改と共に車に乗り帰つて行つた。

「なんて奴らだ……」

豪炎寺が咳いた。

「誰にも気付かれない練習場所があれば……！」

俺は咳いた。

俺達が落ち込んでいる時

俺には聞き覚えのある声が聞こえた。

「いたいた！お兄ちゃん！」

皆がその方向を向く。

「誰だあの可愛い子は……」

染岡が咳いた。

「確かお兄ちゃんとか言つてたでやんすよ」

栗松もその子を見ている。

そしてその子が降りてきた。

「お兄ちゃん！」

と俺に抱きつく。

「「お兄ちゃんつて雷藤の妹!?」」

皆が俺を見て叫んだ。

「あれ言つてなかつたけ？」

俺が咳くと染岡が「聞いてねえよ！」と叫ぶ。

「でも本当の妹じやないよ、名字も違うからね」

俺は妹を見ると「自己紹介しなよ」と話した。

妹は軽く咳払いをして自己紹介をした。

「お兄ちゃんの妹の天空橋 心美つていいます！一応雷門中二年だけ
ど皆私を知らないよね」

そして言葉を続ける。

「お兄ちゃんと二人暮らしてゐるから毎日大変なの。お兄ちゃんに毎
日襲われるからね」

「あり得ない」と木野 グサツ
ん？最後おかしいよな？俺がそう思い周りを見ると

「雷藤さんがそんな人だつたなんて」と音無 グサツ

「不潔で最低ね」と夏未 グサツ グサツ

俺は女性陣からボロクソに言われ地面に膝を突いた。

「なんてね！お兄ちゃんにそんな勇氣ないよ笑」と心美。

最後完璧に笑が付いていただろ。

と俺が心で思つていると

女性陣が「「信じてたよ」」と

さつきとは逆の事を言つてゐるが

これはこれで傷付く。

「なんで他人の二人が一緒に住んでるんだ？」

と円堂が聞いてきた。

俺は少し言うのに躊躇つたが話した。

「俺と心美は小さい頃に両親を無くしてお日さま園つて言う孤児施設で育つたんだ。そして11歳になつて心美と一緒に今のアパートに移されたんだ。20歳になるまではお日さま園がアパート代を払つてくれるんだ」

と話すと円堂は少し顔を下に向けた。

「そうだ！心美はサッカーが得意なんだ、円堂、心美のシュート受けてみないか？」

と俺が話すと円堂は上を向き

「受けて立つぜ！」と返事を返した。

心美と円堂の1対1の勝負が始まつた。

「いくよ！」

心美は叫びシユート体制に入つた。

心美がボールに投げキツスを放つと

ボールが浮き上がりボールがハートに変化した。

「エンジエルキツス！」

心美は右足で思いつきリシユートを放つた。

心美の必殺シユートが円堂を襲う。

「熱血パンチ！」

円堂も必殺技で対抗する。

「くつ…ぐわあ！」

円堂の熱血パンチを心美のシユートが破り
ボールがゴールに突き刺さつた。

「やるなあ、おまえ！」

円堂が呟く。

心美はガツツポーズをして俺を見た。

「やつたあ！決めたから今日の夜ご飯オムライス宜しくね！」

と俺に叫ぶ。

「はいはいオムライスね、りよーかい、で今回はケチャップで何を書けばいいんだ？」

と俺が話すと心美は「猫さんがいい！」と話した。

周りが俺達を見ている。

皆は一斉に心で

「「こ」れはかなりのブラコン&시스コンだな」」と呟いた。

イナビカリ修練場

「呼んどいてまだ来ないのか」

染岡が呟いた。

俺達は夏末にここで待つようにと言われ
ここで待っているが一向に来る気配がない。

『ここ』というのは雷門中の七不思議の一つ

【開かずの扉】の前に俺達はいた。

前回の御影専農との決闘で惨敗してから
既に二日が立っていた。

しかしこの二日で雷門中サツカーネ部が
更に賑やかになった。
理由は二つ。

一つ目は、俺の妹の心美とそして今俺達を待たせている夏末が雷門
中サツカーネ部のマネージャーとして加わったのだ。心美はサツカーネ
の知識はあるが、あの夏末お嬢様はどうなのか。いろいろ不安もある。

二つ目は【イナズマイレブン】についてだ。

俺達は事務の古株さんというおじさんから、イナズマイレブンについて教えて貰った。今から四十年前に雷門中サツカーネ部に存在したメンバーらしい。古株さん曰わく、世界にも通用したと豪語していた。

俺達はイナズマイレブンにとても興味を持ち
イナズマイレブンを目標にしたのであつた。

ギツ ギギギイイイ

いきなり変な音が響き、俺の脳内解説を止めた。
俺も見ている光景には苦笑いが起きてきた。

雷門中七不思議の開かずの扉が開き始めているではないか。
そしてギイイイイと扉が開き中から人影が見えた。

その瞬間、壁山や栗松、目金などが叫ぶ。

「「ギアヤヤヤ出たあああ!!」」

しかし中から出て来たのはお化けでも幽霊でもない。
出て来たのは夏未だつた。

「揃つて いるわね」

夏未はそう言い俺たちを見渡す。

状況が理解出来ず困惑していると円堂が夏未に問う。
「こんなとこに呼び出してどうしたんだ？」

「あなた達には特訓して貰います」

それを聞いた染岡は呆れたように夏未に言い返す。
「特訓が出来ないから困つてんだろう？」

染岡の言葉を予想していたよう

夏未はふつと笑つて話した。

「ここで特訓して貰います」

と開かずの扉…いや開いてしまった扉を指差す。

「名前はイナビカリ修練所です」

夏未が呟くのを合図に

俺達はイナビカリ修練所に入った。

「こんなとこがあつたなんて」

「このイナビカリ修練所はあのイナズマイレブンが使つていた場所で
す、ここでイナズマイレブンの必殺技が生まれていつたのよ」

俺の独り言にそう返事を返す夏未。

その聞いて円堂は驚いたように反応する。

「イナズマイレブンが!?くうー!イナズマイレブンと同じ特訓が出来
るなんて感激だぜ！」

と叫ぶと円堂は特訓しようぜ!と言わんばかり目でウズウズして
いる。

「頑張つてねお兄ちゃん!」

心美が俺にエールを送る。

「ああ!一回り大きくなつて出て来るぜ!」

と俺は言い返すと修練所の扉が閉まつた。

さあ!特訓始まりだ!

俺は心で呟くと特訓を始めた。

そして数時間後――――――

ウイイ――――ン扉が開いた。

マネージャー四人が開いた扉に近付いて来る。

「大丈夫だつ……キヤア！」

と木野が叫んだ。

当然だ。俺達は超ボロボロなのだ。
特訓が並みじやない。

まだ体に羽が生えたように軽いがあまり動けない。

「救急箱を音無さん！」

と音無に言うと

音無はもう救急箱を持ってきていた。

俺達は治療を受けた。

「すげえ特訓だつたな…」

俺がそう足を伸ばしながら話し掛ける。

「ああ！俺のスピードが上がりそうだ」

「今度はもつとやつてやるぜ！燃えてきたあ！」

と風丸と相変わらずのサツカーバカが叫んだ。

俺達はこの途轍もない特訓を毎日続けた。

そして御影専農との

フットボールフロンティア予選二回戦当日になつた。

激突！御影専農！前編

「なんだここは……」

俺は思わずそう口に出してしまう。

俺達は御影専農の学校に来ていた。

だが学校のグラウンドというには普通じゃない。
アンテナなどの器具でいっぱい埋まっているのだ。

「確かにこの間は俺の負けだつた。でも試合はチーム同士の戦いだ。
力を合わせれば絶対にチャンスはある！ガンガン攻めていこうぜ！」
と円堂が気の引き締まる掛け声を俺達に掛けた。

「「おおつっ!!」」

俺達も掛け声に負けない気の引き締まる返事を返した。

「両校整列！」

審判の声がグラウンドに響いた。

今回のスタメンは

F W 雷藤 染岡 豪炎寺

M F 半田 マックス 少林寺

D F 風丸 土門 壁山 栗松

G K 円堂

の布陣で挑む。

そして試合開始のホイッスルが
ピ――――――――吹かれた。

染岡が豪炎寺にパスを出し始まつた。

豪炎寺がワンツーで染岡にボールを返すと

染岡が早くも切り込んでいく。

そして染岡の前に下鶴が立ちふさがる。

「へつ、抜いてやるぜ！」

染岡が叫び抜きにかかった。

が下鶴は動くこともせず不適な笑みを浮かべた。

その時G Kの杉森が叫ぶ。

「ディフェンスフォーメーション【ガンマスリー】発動！」

その言葉が響いた途端に

俺達に付いていたマークが一気に外れ

マークしていた奴らがゴールに向かつた。

「豪炎寺！」

染岡が豪炎寺にバスを出した。

「よし！」

豪炎寺がボールを受け取り前を見た。

「なつ……」

豪炎寺は動かなかつた。

いや動けなかつた。

豪炎寺の前にはさつきまで俺達をマークしていた選手が六人、豪炎寺の前を塞いでいた。

まさに豪炎寺の動きを予想していたような動きだつた。

「豪炎寺こつちだ！」

染岡が叫ぶのを見た豪炎寺は染岡にバスを出す。

「もうつたぜ！」

と染岡が叫びゴールを見据える。

「ドラゴンクラッシュ！」

染岡のシユートがゴールを襲う。

俺は見たあり得ない光景を。

ゴールの前に四人の選手が現れシユートを受け

ドラゴンクラッシュの威力をどんどん落としていく。

パン。虚しい音が響いた。

杉森の手にドラゴンクラッシュは完璧に收まる。

「なつ何!?」

「なんだ今の守備は!？」

豪炎寺、染岡が驚いている。

「驚くことじやない。君たちの攻撃は完璧にデータ通りだ。簡単に予

測出来る」

杉森が俺達の心を見透かしたように話した。

「ドンマイだ染岡！まだ試合は始まつたばかりだ、早く攻撃に備えろ！」

と円堂の声が響いた。

全く円堂の言葉は説得力あるなあと俺は思った。

「おお！」

染岡も次の攻撃に備え戻していく。

だがあの杉森も凄いが他の選手もハイレベルだ、油断できないな。
俺は自分に言い聞かせ俺も戻る。

杉森が蹴ったボールを下鶴が受け取り
前線に上がってくる。

「行かせない！」

風丸がスライディングを仕掛けボールを奪った。
風丸ってあんなに足早かつたけ？と思つたが
そうだな俺達はあんな鬼畜な特訓をしてたんだ。
と俺も風丸と一緒に上がっていく。

「半田！」

風丸が半田にパスを出す。

しかし半田がスライディングで取り返され
どんどん迫つてくる。

栗松とマックスがいとも簡単な抜かれてしまう。
ついにゴール近くまで上がってきた。

「こいつは俺に任せろ！皆は11番をマークしてくれ！」

円堂が叫んだ。

「おおっ！」

風丸と壁山が返事を返しマークに入つたが
相手がパスを出した相手は下鶴ではなく
背番号9番の山岸だつた。

「逆か！」

円堂が叫ぶ。

その瞬間、山岸がシュートを放つた。
ゴールの右端ギリギリに放つたが

円堂がキヤツチしピンチを凌いだ。

だが円堂は投げれなかつた。

もう相手チームは風丸達のマークに付いていた。
だが少林寺と風丸がマークを抜け出し上がつっていく。

「行くぞ！ 風丸！」

円堂が風丸にパスを出した。

「豪炎寺！」

風丸の綺麗なパスが通る。

豪炎寺は駆け上がり炎の渦を巻き上昇する。

「ファイアトルネード！」

豪炎寺のファイアトルネードが杉森を襲う。

「シユートポケット！」

バリアがファイアトルネードの威力を奪う。
だが完全には防げず弾く。

「まだだあ！」

俺は、ぼれ球に反応しシユートを放つた。

「サンダーキヤノン！」

雷のシユートがゴールに向かう。

「シユートポケット！」

一度は破つたと思ったがまた弾かれた。

「くそつ！」

「まだまだ！ いくぞ豪炎寺」

と弾かれたボールに染岡と豪炎寺が反応する。

「ドラゴントルネード！」

豪炎寺と染岡の合体技が炸裂する。

「シユートポケット！」

赤い龍がバリアを碎くが杉森によつて弾かれる。

「これでもダメなのか！」

染岡が呟く。

「豪炎寺さん！」

今度はDFから上がつてきた壁山が叫ぶ。

「よし!」

と豪炎寺が咳き、壁山と一緒に飛び上がる。

「イナズマ落とし!!」

豪炎寺がオーバーヘッドシュートを放つた。

「おお! 口ケツトコブシ!」

バシン! とイナズマ落としをも弾き返した。

「シュミレーションではシュート。ポケットで対応出来たのに」

杉森が咳く。

杉森が投げたボールがMFを通しFWに渡る。

山岸が受け取りシユートを放つ

よう見えたが下鶴へのパスだ。

そして下鶴がシユートを放つた。

「熱血パンチ!」

円堂の熱血パンチで辛うじて防いだように見えたが
弾いたボールに山岸が頭で合わせた。

ふわっとゴールネットが揺れた。

ピ――――――!

「くつそおお!」

円堂が地面に膝を突き地面を叩く。

1対0 先制点を奪われてしまった。
ピ――――――!

笛が響いた。

染岡――豪炎寺――染岡

とボールを渡し合い攻めようとしたが

山岸が染岡からボールを奪いバックパスをした。

下鶴がボールを受け取り

キーパー杉森にボールが渡つた。

「まさか…あいつら…」

そして俺の嫌な予想が当たつてしまふこととなる。

相手は戦いには来なかつた。

ボールをゆつくり回し時間を稼いでいる。

「くそつ！いいのかよこんな試合で！いいのかよ…！」

俺が怒りを込めた言葉を放つが

なんの解決にもならない。

そして ピツ ピ —————— ！

何も出来ないまま前半が終了してしまった。

激突！御影専農！後編

「ハーフタイムベンチ sides」

「どうしよう先取点取られちゃつたよ…」

心美が呟いた。

「大丈夫よ、彼らはイナビカリ修練所での特訓で一回り大きく成長したのだから」

夏未が腕を組んで話す。

「あの…あそこではサッカーの特訓は出来なかつたんですけど…」

心美が苦笑いの状態で夏未に話した。

「あら、そつなの？無駄な投資だつたかしら…」

夏未が呟いた。

「ハーフタイム雷藤 sides」

「杉森！」

円堂が叫んだ。

杉森は無言でこちらを向いた。

「なんで攻撃しないんだよ！あれじやサッカーにならないだろ！」

円堂が怒りを込めて話す。

「それが監督命令だ」

しかし杉森は監督命令と淡々と話す。

「なんだつて？」

俺が呟いた。

「十点差でも一点差でも同じ勝利だ、リスクを侵さずタイムアップを待つ」

杉森はそれが当たり前と言わんばかりに話した。

「何もかも計算通りに行くと思つてんのかよ！」

俺が叫んだ。

「君達のデータは全て把握していると言つたはずだ。俺からはゴールを奪えない、お前たちの負けだ」

杉森が表情を変えることなく話す。

「そんなの解るもんか！勝利の女神は勝利を強く信じる方に微笑むん

だ
！
」

円堂が真剣な顔で杉森に話す。

「データに無いことはけして起こり得ない」

「データ、データつてそんなサッカーやつて楽しいのか！」

円堂が叫んだ

一樂しい?:

杉森が楽しいの意味も解らないように首をひねる

「そうさサツカーは楽しいもんだろ！仲間とボールを通して通じ合う素晴らしいものだ！」

「素情うしハシキ?、君

「不能……？ それま二つちの台詞だ！ お前ち

カーリーを思い出させてやる!

俺は人差し指を杉森に指し叫んだ。

ビ

そして後半がスタートした

前半と同じ様に戦へこは来なかつた。

しかしちよつとおかしい。

杉森が急に呟き始めた。

「監督しかし私のプログラムにラフプレイはインプラットされていませ

ん。作戦の変更をお願いします。」

杉森かふ一ふ一咲く

実行は不可能です、実行は…

杉森がまだ何か呟いていた。

二月が田舎の四月の一語す。

卷之三

円堂はそう咳くどゴールから離れ前線へ駆け上がっていく

「ええ～！」

土門が驚きのあまり叫ぶ。

「だああああああ！」

円堂がどんどん上がつてくる。

「ああああ～」

土門が急いでゴールの守りに入る。

円堂は駆け上ると山岸と下鶴からボールを奪つた。
そして円堂はそのまま上がつていく。

「なんだと！」

杉森が叫ぶ。

「いくぞ！だああああ！」

円堂が叫びながらシユートを放つた。

「何故だ、データに無い、君のシユートはデータに無いい！」

と杉森が叫びながら円堂のシユートをキヤツチする。

「くつそおお！」

と円堂が叫ぶが

その表情は何故か楽しそうだ。

「何故お前が攻撃に参加する」

「点を取るために決まつてるだろ！それがサツカーダ！」

「円堂おお！早く戻れええ！」

と後ろから染岡の叫び声が聞こえる。

「久し振りのシユート楽しかつたぜ！」

と円堂は話すと笑いながら戻つていく。

「理解…不能だ……」

その時杉森は円堂が話した

『久し振りのシユート楽しかつたぜ！』という言葉が頭の中で響いていた。

「オフェンスフォーメーション【シルバワン】だ！」

と杉森が叫んだ。

杉森は叫び前に大きくボールを蹴つた。

ついに御影専農が動いたのだ。

御影専農の背番号10がボールを受け上がつていくが

壁山のフェイントでボールを奪つた。

そのボールをマックスが貰い上がっていく。

「松野さん頼んだつス！」

と壁山が叫んだ。

マックスがディフェンスに入つた選手をターンで華麗に避ける。

「こつちだ！」

豪炎寺が叫んだ。

がしかし下鶴がマックスにスライディングを仕掛けボールを奪う。

「来るぞ！」

円堂がそう言い構える。

「パトリオットシユート！」

下鶴が空中にボールを蹴り上げた。

そのボールが空中で火を噴きロケットのように

円堂が守るゴールを襲う。

円堂が渾身のパンチで止めに行くが、しかし。

ピ――――！

ボールがゴールネットを揺らした。

2対0 追加点を許してしまつた。

俺は膝を突く。

「くそっ……俺が下鶴のマークに付いていたら…」

「雷藤」

豪炎寺が俺に話す。

「まだ試合は終わつてないチャンスはある。今の反省を次に活かせばいい」

俺はその言葉を聞いて点を決める方法を思い付いた。

「ありがとう豪炎寺。お陰で良いことを思い付いた、壁山も来てくれ」と俺が豪炎寺と壁山に作戦を告げた。

「なるほどな」

「わ、わかつたつス、俺やつてみるつス！」

「今度は俺達の攻撃のターンだ！」

俺はそう相手に向かい言い放ち

グラウンドの中心に戻った。

ピ――！ 笛が響き俺は染岡からボールを貰い上がっていく。
その後ろからは豪炎寺、壁山が上がつてくる。
下鶴、山岸がディフェンスに入る。

「はああ！ 電光石火ああ！」

俺は今出せる最高の電光石火を放ち二人を抜いた。
そして杉森を視界に捉える。

俺はバックパスをし、豪炎寺にボールを渡した。

「いくぞ壁山！」

豪炎寺が叫び一緒に飛び上がる。

「イナズマ落としはデータ通りだ！ 私には通用しない！」

杉森が叫ぶ。

「そうイナズマ落としはデータ通りだろうな、だけどそれはただのイナズマ落としだつたらの話だ！」

俺はニヤッと笑い叫びながら飛んだ。

豪炎寺は壁山には乗らずそのまま着地する。

代わりに俺が壁山の腹に乗り二段ジャンプをする。

そしてオーバーヘッドキック。

「くらえええ！ イナズマ落としR！」

俺と壁山の協力シユートが杉森を襲う。

「こんなのでータに無いぞおお！」

杉森は叫びボールを止めようとするが遅い。

スバアーンと紫の電気を帯びたシユートがゴールネットを揺らした。

ピ――！ 1対2 ついに反撃に成功した。

ピ――！ 今度は御影専農のボールからだ。

山岸、下鶴の二人でどんどん攻めてくる。

「パトリオットシユート！」

下鶴が先程円堂からゴールを奪つたシユートを放つ。

「くそつ！」

円堂がゴールから離れた上がる。

だがこれでは完全にゴールががら空きだ。

「豪炎寺！……つちだ！」

と守りにきていた豪炎寺に叫ぶ。

「円堂なにをするつもりだ！」

豪炎寺が円堂に問う。

そしてパトリオットシユートが火を噴きゴールを襲う。

「止まるな！シユートだ！」

円堂が叫んだ。

「なつ、何！」

流石の豪炎寺も驚いている。

「俺を信じろ！」

円堂が叫び前を向く。

「いくぜ！」「おう！」

と円堂と豪炎寺が声を掛け合い

円堂が右足、豪炎寺が左足でシユートを放った。

「イナズマ1号！」

物凄いロングシユートが杉森が守るゴールに向かう。

「なにつ!?」この数値は我々の知るデータを遙かに越えている！あり得ない！あり得るかあ！！

と叫び両手を前に出し必死に止めようとするが

シユートのパワーが勝り杉森ごとゴールに叩き込んだ。

「ぐわあああ!!」

ピ――――！ 2対2 同点に追い付いた。

「やつたぜえ！守備と攻撃が同時なら奴らも対応出来ないんだ！」

「ああ、あんな技が決められるなんて！」

豪炎寺も驚きつつも得点を喜んでいる。

「本当だ、何だか身体が軽いとは思つたけど」と円堂はそう言いながらみんなを見渡す。

ベンチも抱き合い喜んでいる。

ピ――――！ 御影専農のボールで始まり

山岸、下鶴で前線へ上がろうとしたが

少林寺がボールをカツトした。

「少林寺があんなに飛べるのも、半田、マツクス達があんなに早く動けるのも、イナビカリ修練所での特訓が俺達、皆の身体能力をレベルアップさせていたからなんだ！だからさつきのシユートも！」

「いくぞ豪炎寺！巴堂と豪炎寺が1号なら……！」

「俺と雷藤は…」

二人で同時こ叫

二人で同時に叫び同時に跳る

「シユートポケットおお！」

杉森が渾身のシユートポケットを発動させる。

俺と豪炎寺が放つたイナズマ2号は

ついに逆転に成功した。

そして御影専農からのボールだが

その瞬間、御影専農の選手が一斉に額の近くの

「監督との通信リンクが切断された…？」

御影専農の選手は口をそろえて咳き始める。

「終わりだ…」

一 我々は敗北する…

「敗北：負ける？」

杉森が呟いた。

「うらあああ！・ドラゴンクラッショ！・」

染岡のドラゴンクラッショが杉森を襲う。

「ぬわああ！」

杉森は叫びながら

シユートポケットを発動させた。

染岡のドラゴンクラッショがシユートポケットを破壊し
杉森を襲う。

「負けたくない！俺は負けたくないっ！」

杉森が叫びながらシユートを両手で止めた。

「皆も同じだろう、最後まで戦うんだ！」

と杉森が叫ぶと

御影専農の選手が全員通信機を外した。

「最後の一秒まで諦めるな！」

杉森が叫んだ。

「面白くなつて来たぜ！」

円堂も叫んだ。

このあとも白熱した戦いで両校譲らなかつた。

「ファイアトルネード！」

豪炎寺が決めに行つた時だつた。

下鶴もファイアトルネードを発動させ

二人のファイアトルネードがぶつかり合つた。

二人とも地面に墜落し下鶴が杉森にパスを出し倒れた。
豪炎寺も倒れたまま動かない。

杉森が「うおおおお！」と叫びながら
センターラインを越え上がつてきた。

先程の円堂と同様に上がつてくる杉森。
さては円堂の熱さが移つたな？

「いくぞ円堂おお！」

と叫びシユートを放つた。

「ゴッドハンド！」

キュイーン…バシン…ツ！

円堂のゴッドハンドがシユートを止めた。

ピッ ピッ ピ——！

その瞬間、勝利の笛が鳴り響いた。

「杉森またサッカーやろうな！」

円堂が微笑みかけ手を出す。

「ああ、また」

杉森も微笑みながら握手を交わした。

フットボールフロンティア予選二回戦

雷門中対御影専農中 3対2 雷門中の勝利

雷門中予選準決勝進出。

準決勝の相手

「「ええええええ！」」

俺たちの悲鳴にも似た叫びが部室に響いた。

「えつ？今なんて言つた……？」

俺はさつきの言葉は聞き間違えだろうともう一度聞いてみる。
「この間の御影専農との試合で下鶴とファイアトルネードを打ち合つたせいで、すまん怪我をしてしまつた」

豪炎寺が話す。

「で、でも次の試合までには間に合うよな？」

俺がそう豪炎寺に話す。

「すまないドクターストップなんだ……」

「う、嘘だろ……」

俺は虚しく呟いた。

「すまん」

豪炎寺はタクシーに向かいながら俺たちに呟く。

「気にすんなつて！準決勝は俺たちに任せとけつて」

円堂が豪炎寺に向かい話す。

豪炎寺は領きタクシーに乗り込み病院に向かつた。

「準決勝は豪炎寺抜きか……」

豪炎寺が去つた後、つい俺の本音が出てしまつた。

「せつからく凄いシユート編み出したのになあ」と土門が呟いた。

「イナズマ1号、イナズマ2号だろ？」

円堂が呟くと言葉を続ける。

「秘伝書に載つてたんだ！GKとFWの連携シユートと熱い想いを抱く一人のFWの連携シユート！じいちゃんも考えてたんだよ同じ事！」

と開いていた秘伝書をパタン閉じ話した。

「やつぱりすげえぜ！じいちゃんは！」

円堂が興奮したように話す。

「豪炎寺が居れば準決勝でも使えたのになあ」

半田が呟くと周りが「はあああ…」とため息をついた。

「豪炎寺が居なくたつてお前らなら大丈夫だろ」

「土門？」

円堂が不思議そうに土門を見た。

「いざとなつたら俺が出るしさ！」

と軽く笑い土門が話した。

「そうだな俺たちで頑張らなくちゃ！早速練習だ！」

「「おおおつ！」」「

と叫び練習に向かつた。

——次の日

俺たち全員は部室にいた。

「地区予選準々決勝の尾刈斗中対秋葉名戸学園、この試合に勝つた方と準決勝で戦う事になるわ！」

マネジャーの木野が準決勝で戦うかもしれない二校の話をしている。

「尾刈斗中つて……」

「あいつらか……」

「猛特訓の末に相当戦力を強化したそようよ」

「あいつらがさらに特訓を!?」

「で？相手の秋葉名戸学園つてのはどんなチームなの？」

夏未が木野に質問する。

「学力優秀だけど少々マニアックな生徒が集まつた学校…。フットボールフロンティア出場校中、最弱と呼び声が高いチームで…な、何これ！」

説明をしていた木野がいきなり少し顔の赤らめ叫んだ。

「どうしたー？」

俺が椅子の腰掛けに顔を乗せながら話す。

「尾刈斗中との試合前もメイド喫茶に入り浸つていた、ですつて！」

木野が叫ぶと1人の男が叫んだ。

「めつ、メイド喫茶ですよ!？」

目金だ。

「なに、それ」

心美と夏未が同時に咳き目金に冷たい視線を送った。

「そんな連中がよく勝ち進んで来られたねえ」

とマックスが咳く。

全くもつてその通りだ。俺は心でマックスと同じ事を思っていた。

「これは準決勝の相手は尾刈斗中で決定でやんすね！」

「だけど今回は豪炎寺が居ないんだ……前みたいには……」

俺が咳いた、その時だった。

「大変です！大変です！」

音無が叫びながら部室に入つて來た。

「どうした？」

円堂が音無に声を掛けた。

「今、準々決勝の結果がネットにアップされたんですけど……」

「尾刈斗中が負けたあ!?」

円堂が叫んだ。

「あの尾刈斗中を倒すなんて……」

俺が咳いた。

「一体秋葉名戸学園つてどんなチームなんだよ……」

「これは行つてみるしかないようですね……メイド喫茶に！」

目金が興奮気味に話す。

「秋葉名戸学園とやらがあの強豪尾刈斗中を破つた訳がきっとあるはず、その訳がメイド喫茶にあると僕は見ました……」

まだ目金は言葉を続ける。

「行きましょう！円堂くん！」

目金が叫んだ。

「で、でも」

と円堂は何か言いかけるが

「僕達は秋葉名戸学園の事を何も知りません、これは……これは試合を有利に進める為の情報収集なのですよ！」

と目金が胸を張つて叫んだ。

「なるほど……よし行つてみようぜ！」

と、何故か目金の言葉に納得した円堂が叫んだ。

「まじかよ……」

俺は呟いた。

「単純……」

夏末も呆れたように呟いた。

そして俺たちは何故かメイド喫茶に向かうことになつたのだった。

メイド喫茶で生まれた絆

俺たちはメイド喫茶の自動ドアの前に着いた。

ウイイイーン メイド喫茶の自動ドアが開いた。

「おかえりなさいませご主人様♡」

自動ドアが開いての第一声は予想通りの台詞だつた。

「13名様ですね！こちらにどうぞお～」

俺たちはメイドについて行き奥の席に座つた。

「これが…メイド喫茶…」

円堂が恥ずかしそうに顔を埋め呟く。

「ご注文は何に致しますか？」

メイドが俺たちに注文の品を尋ねる。

「えつ、あ、はい？」

円堂があまりにもいつもの円堂と違うので笑えてくる。
まあ俺も対象外ではないが。

「ご注文は決まりましたか？」

俺にも注文を聞いてくる。

「えつ…あ、まだです…」

俺がそう呟くと俺と同じテーブルの半田が俺に話し掛ける。

「おいおいそんなんじや心美ちゃんに怒られるぞ」

「うつせえー！」

俺は少し心美に嫌われるのではないかと冷や汗をかきつつ商品のラインナップに目を移す。

「な、なんだよこれ……」

思わず言葉が出てしまつた。

言葉に出すのが恥ずかしい名前が沢山ある。

例えはソフトドリンクで

ピンクのときめきミルクティー

麗しの君ジャスミンティー

魅惑のドキドキハーブティー

メイドさんと一緒に萌え萌えココア♡♡

寝起き最悪ご主人様☆お目覚めコーヒー

など、まだまだ沢山あるが流石に心の中での説明でも恥ずかしい。

「ゞ」注文は何に致しますかあ～？」

そういうメイドを待たせてるんだつた。

「ええーと、じゃあこれで…」

俺が適当に指を指し答えた。

その時メイドがすぐ近くまで寄ってきて

「どちらですかあ～？」

さすがに今のは緊張した。

「び、ピンクのと、とき…」

俺がそこまで呟くとメイドが

「ピンクのときめきミルクティーですね！かしこまりましたあ～」

と話しへ戻つて行つた。

どつと疲れた……。

円堂もどうやら俺と同じで疲れが伺える。

「いけませんねえ～、メイド喫茶に来たなら彼女達との交流を楽しまなければ、緊張していれば逆に彼女達に失礼ですよ」

と目金が話しメイドに注文する。

「ああ、僕はときめきピコピコケーキセツトを…！」

目金があまりにもスマーズに言うので

目金の前の席の染岡が唖然している。

「かしこまりましたあ～ご主人様あ～」

とメイドが注文を承る。

「「馴染んでやがる！」」

皆が同時に呟くと

目金が眼鏡に軽く触れた。

その時目金の後ろから声が響いた。

「君見所があるね」

目金がその声に反応して後ろを向いた。

「君たちは…………」

目金が呟く。

そこには変な男が二人立っていた。

「君に見せたい物があるんだ、ついて来たまえ」

俺たちはその変な人物について行き

エレベーターでB3と書いてあるフロアに来た。

「さあ入ってくれ」

太った変な人物の一人が呟く。

「あ、ああ……」

目金が呟いた。

俺たちが目の前にしている光景は
ガンプラやゲーム、おもちゃの電車を
いじくっている人の集まりだった。

「あ、あう……」

目金は興奮したように辺りをキヨロキヨロ見渡す。
そして目金が叫んだ。

「おお、これは仮面ソイヤーの復刻モデル！あつこつちはデア号機ト
ンガリヤンのブラックverでは！」

うん、なに言つてるかわかない。

「知つてるの？こんなマイナーなロボット……」

そのなんとか復刻モデルとなんとかヤンの持ち主らしい少年が話
す。

その後も目金の暴走は止まらなかつた。

「こ、これは…十年前に発売されて全く売れなかつた幻のゲーム機…
P—GXではありませんか!?」

目金がまたまた叫んでいる。

「お前すっげー詳しいんだな…」

円堂が呟いた。

「僕に知らないことはありませんよ！」

目金が眼鏡に触れ話す。

「やはり君ならここにある物の価値が解つてくれると思ったよ！…
さつきの太つた変な男が話す。

「僕達と同じオタク魂を感じたんでね！」

隣のもう一人の男が話すと

二人の眼鏡がキューピーンと光った気がした。

「ふふ、なかなか良い品揃えと言えるでしょう」

と目金が咳くと目金の眼鏡がキューピーンと光った。

「ついて行けねえ……」

俺が咳くと目金が

「あ、あれは……」と咳き走る。

「まさか…マジカルプリンセスシルキーナナの全巻セット……！」

今までより興奮した様子で目金が叫んだ。

「何だそれ……」

「原作ノベルライト先生、絵を漫画萌先生が手掛けられた史上最高の萌え漫画です!!」

目金がさらに興奮して叫ぶ。

「嬉しいねえ、我々の作品をそこまで褒めてもらえると」

さつきの太つた男が話す。

「…我々!?

目金が咳く。

「そう私が原作者のノベルライト」

「僕が漫画萌さ」

つまりは太つた方がノベルライト

ベレー帽を被つた方が漫画萌らしい。

「まさか伝説の二人にお会い出来るなんて……！」

「我々も君のようなファンに出会えて嬉しいよ！」

「今日はじっくり話し合おう」

一人が目金に手を差し出す。

そこに「ちょーとストップ、ストップ！」と円堂が間に入り話す。

「悪いけどそんなことしてる時間は無い、俺たちはもうすぐ大事なサツカーアの試合があるんだ」

そう円堂が話すと二人が反応した。

「君達もサツカーやるのかい？」

ノベルライトが話し掛けた。

「えつ、君達もつて？」

「僕達も今、結構大きな大会に出ていてねえ…、えつと何だつけ？」

「フットボールなんとか…」

後ろでゲームしている男が呟いた。

「ま、まさかフットボールフロンティアか!?」

「そうだつけ？覚えてないなあ…、おい！俺のアイテム取るなよ！」

と話しゲームに叫ぶ。

「メイド喫茶に入り浸っているオタク集団……」

「秋葉名戸学園サツカーネットまさか…」

円堂が呟くと二人は顔を見合わせ

「僕達の事ですが…何か？」

とノベルライトが話した。

「「ええええええ！」」

俺たちの叫びがメイド喫茶中に響いた。

——夕方河川敷

「何やつてる！しつかりトラップしろ！」

染岡の声が河川敷に響く。

「す、すみません！」

少林寺そう言いながらボールを追いかける。

「はあ！ダメだ、皆気が緩んじまつて…」

円堂が呟くと俺と円堂は腕を組んで悩む。

「仕方ないよ、あんな連中が準決勝の相手なんだ」

「でも仮にも準決勝に勝ち進んできたチーム油断は禁物ですよ」と意外とまともな意見を言つたのでツッコミは出来なかつた。

「そうかな～」

「全然強そうには見えなかつたぞ」

とマックスと半田が呟く。

「お前らもつと集中しろ！」

と染岡が叫んでいる。

「すみません～」

とやる気のなさそうな宍戸が呟く。

「はあ、こんなんで準決勝大丈夫かよ」
俺が呟いた。

「ま、相手は参加校の中で弱いって話だしなんとかなるんじゃない?」
とマックスもあんまりやる気を感じない言葉を発する。

「あはは……」

俺と円堂は苦笑いを浮かべて話を聞いた後
この日は解散したのだつた。

そしてフットボールフロンティア地区予選準決勝
雷門中対秋葉名戸学園の試合当日となつた。

目金立つ！

「私にこれを着ると……？」

夏未の苛立つて いるような声が聞こえる。

ちよつと前にこれを着てくれと秋葉名戸学園の選手がメイド服をうちのマネージャーに持つて来たのだ。

「お兄ちゃん：流石にメイド服はねえ……」

と試合が始まるちよつと前に仲直りした心美が呟く。

「俺は心美のメイドなら歓迎だぞ！」

俺がそう話すと皆が俺の方を向き

心美は恥ずかしそうに俯いてしまつた。

「我が校の試合においてはマネージャーは全てメイド服着用という決まりになつております！」

昨日のメイドが説明した。

「誰がそんな決まり作つたのよ！」

夏未がお嬢様らしからぬ大声で叫んだ。

「店長…いえ監督が」

と接客と同じような笑顔で答える。

スイカを食べているおじさんに視線がいく。

「あれ…監督だつたんだ…」

円堂も信じられないようにはいた。

そして着替えが終わつたマネージャー達が出てくる。

夏未、木野、音無がメイド服を着用して出て来た瞬間

「「おおおお!!」」

と秋葉名戸学園の選手の歓声が上がつた。

そして一人の選手が夏未に猫耳を付けた。

「ぐうぐう!!」

と叫んだ瞬間もう一人の選手が

その選手を吹き飛ばし叫ぶ。

「目線こつちにお願いなんだなあ！」

「や、やめてえ！」

と叫んでいる夏未を無視して

木野と音無がノリノリで写真を撮られている。

勿論、夏未はその犠牲になつてている。

「あれ、心美は？」

俺が呟くとベンチの奥で顔だけ出している心美の姿があつた。

「心美出て来いよ～」

俺が心美に呼び掛けると

「わ、笑わないでね……」

と呟き出て來た。

「…………」

俺は言葉が出なかつた。

「な、なんで何にも言わないの？」

心美が俺の問い掛けた。

「あ、え、似合つてるなあと思つてさ」

俺が話すと心美は

「え、うん、あ、ありがとう…」

と少し甘い雰囲気が漂つて來たとき

俺は周りの視線気付いた。

皆何故か微笑んでいるようにも見える。

「雷藤、見てるこつちが恥ずかしくなつてくるぜ」と染岡が話すと俺は

「あ、ああ、すまん」

と呟き試合の準備を始めた。

「豪炎寺の代わりは……」

円堂が今日のスタメンを考えていると

「こ」は切り札の出番でしよう

と目金が立ち上がつた。

「切り札？」

円堂が何の事か解つていないらしく呟く。

「メイド喫茶に行つたお陰で彼らのサッカーが理解出来ました、僕が必ずチームを勝利に導いてあげましょう！」

と目金が豪語した。

「いいんじやないか、目金で」

と試合を見に来た豪炎寺が話す。

「そうねやる気満々みたいだし何とかなるんじやねえの?」

「ああ、
そうだな！」

と円堂も決意して

「よし今日はお前がFWだ！頼んだぞ！」

「ちよつと待つて！」

と夏末が叫んだ。

「そうつゝは、帝国戦の好みを、こまき、つ逃げ出すか……」

壁山が夏末の意見に賛成して話す。

今日のごいのやる気は本物だ！俺には解る！本気でやる気にな

二田堂が用意つづ熱血バカう（汗）。

「俺は目金のやる気に賭けるぜ！」

と最後にもう一度呟んだ

「ふ、大船に乗ったつもりでいて下さい」と目金は眼鏡こぼれ弦へた。

今回のスタメンは

雷藤目金染岡

D F 風丸
影野 栗松
壁山

G K 円堂

この布陣で撃む

ビ

ついに準決勝の幕が上がつた。

「くそつ！あとちょっとで前半終わるな……」

俺が呟いた。

前半の残り時間はあと僅かになつてゐるが未だお互に0対0と点を決めれない状態にあつた。

秋葉名戸学園はボールをキープしてゐるが一向に攻めて来ない。

「発進！ハイパー サッカーボール発射！」

……。叫んだのは勿論相手チームだ。

「来たな！悪の軍団め！お前達にこの地球は渡さん！」

イラツ ちよつーとイラライラして來たな……。

「な、なんなんだこいつらは……」

そして ピッ ピ――

前半終了のホイッスルが響いた。

「まるで攻めて來ないなんて……」の僕にも予想外でしたよ

目金が呟く。

「お前あいつらのサッカーが理解出来たんじや無かつたのかよ」と染岡が的確なツツコミを入れる。

ピ――

後半が始まつた。

今度は全員で秋葉名戸学園が上がつて來た。

「何!?動きが変わつた!?

俺が呟くとノベルライトと漫画萌にボールが渡つた。

なるほど…。あいつらはフルタイム戦う体力が無いんだ、だから前半は……。

「あいつら前半は体力を温存してゐたのか……」

俺は呟きテイフエンスに入る。

「俺はヒーロー止める事は出来ん!」

と自分でヒーローというのでヒーローにしどこう。

そのヒーローにボールが渡つた。

「変身！フェイクボール！」

とヒーローが叫んだ。

「何が変身だよ」

と俺が呟くと

「あ、あれ？」

取つた筈のボール

ヒーローキック!

ヒリロリかセンタリングを上げる

一
おにこ
うどく

その手には漫画萌を握つていふ。

「何をするつもりなんだ？」

と漫画萌をバツトのように振り漫画萌の顔面でシユートを放つた。

その辺には二ノ方側ヨリ三りん放たれ

決まつてしまつた……。

0対1
先取点を取られてしまつた。

「こんなシユートを隠していたのかよ！」

「あんな奴らに先制点取られちまうなんてな」

ビ[°]

今度はこつちの攻撃だ。

目金が染岡にハ刀を出し染岡が上から下へいく
する。二秋葉名古学園の選手が全員後ろこ下が

「くそつ、全員で守るつもりか……」

「アーティスト」

と俺は相手の選手を抜き去る。

一
行
く
ぞ
!!

相手の漫画萌か叫ぶと

D F の三人が集まり「五里霧中！」と叫び

地面で砂煙を上げ始めた。

「そんな目眩まし効くかよ！」

俺は叫びシユートの体制に入る。

「喰らえッサンダーキヤノン！」

俺のシユートがゴールに向かっていく。

「やつたか？……つ！」

入つていなかつた。

確かにゴールの真ん中を狙つたのに……。
その後もマックス、少林寺、染岡など皆がシユートを
撃つが一度もゴールネットが揺れる事は無かつた。

「何をしてるの！ 時間が無いわよ！」

夏未が叫ぶ。

解つてる！ 解つてるさー！ でも何故かゴールに入らないんだ！
俺は心で叫ぶ。

「何故あの土煙に包まれるとシユートがゴールを逸れてしまうのか
……」

目金が呟いている。

「…………つ！まさか！」

目金が叫んだ。

「今度こそ！」

俺がシユートを撃つてはいけません！」

目金が叫んだ。

俺が持つていたボールがスライディングでクリアされた。

「見破りましたよ！ シユートが決まらなかつた訳を……！」

目金が叫んだ場所では目金がヒーローを引っ張つている。

「ゴールをずらしていたのか！」

俺が叫ぶとベンチの豪炎寺が気付く。

「シユートが入らなかつた訳はこれか！」

「貴様何故解つた？」

ヒーローが目金に問う。

「仮面ソイヤー第28話怪人砂ゴリラが使った土煙の煙幕作戦…、あれを思い出したのですよ」

「目金が呟く。なんの事が解んないが……。」

「五里霧中とはあれをヒントにした技と見ました…！」

「よく知っていたな…その通りだ！」

「これが君達の勝ち方ですか！」

「僕達は絶対に勝たなければいけないんでね！」

「だからと言つてこんな卑怯な事を…！」

「勝てば良いのだよ！勝てば！」

「僕にボールを下さい！」

「目金が叫んだ。

「半田！ 目金にボールを渡せ！」

円堂が半田に叫ぶ。

「解つた！ 頼むぞ目金！」

半田のスローライングのボールが目金に渡る。

目金がボールを持つて駆け上がる。

「ここは通さん！」

ヒーローが目金を止めに入る。

「正々堂々悪に挑む……。それがヒーローでしょう！ シカとボールをすり替えて相手を欺くなどヒーローの技ではありません！」

目金の言葉が効いたらしくヒーローを目金が抜き去る。

「漫画萌先生、ノベルライト先生…。僕は悲しい！ 貴方達の描くシリキーナナの勇気と愛に僕は幾度となく元気を貰いました！ のにその作者であるあなた方がこんな卑怯な事をする人達だつたとは…シリキーナナに謝りなさい！」

目金が鬪氣を纏つたような気迫で一人を抜き去る。

「説教中や合体中に攻撃を仕掛けるなど口ボットマニア失格です！」
と目金がもう一人抜き去る。

「シユートを打たせちゃダメなんだな！」

相手のGKが叫ぶ。

そしてDF陣が五里霧中を発動させ始めた。

「まだこんな事を続けるつもりですか！」

「これがオタクの必殺技だ！」

目金の叫びにD.F陣が叫ぶ。

「君達などオタクではありません！ オタクとは一つの世界を紳士に真っ直ぐに極めたもの！ ゲームのルールを破つて勝とうする貴方達にオタクを名乗る資格などありません！」

田金がトドメとなる言葉を発するとDF陣は撃沈した。

四庫全書

【たゞ】

染岡が何か言いかけるが

「僕は君が好きだよ。」

目金に叫ぶ。この間に前回で書いた

染岡は目金を信じドラゴンクラ

」——
「——

万葉集

と染岡のドラゴンクラッシュに目金が顔面で合わせ

ボールの軌道をすらしくリルに押し込んだ。

お金のお隣で同居しないといけない

「これぞ……メガネクラッシユ…………」

と呟きながら倒れた。

そして目金はタンガで運はれることはなシタ

目金が呴く。

「どうしてなんだ？」

として君はそんな婆になつてまで……」

一目を覚まして欲しかつたのですよ…同じオタクとして…、サツカー

も悪くないですよ」

「目金くん君の言葉で目が覚めたよ、僕達もう卑怯な事は辞めるよ…」「我々も全力を尽くしたサッカーで雷門中に挑もうではなーいか!」

田金の言葉に漫画萌とノベルライトが応える。

目金は領くとタンカで運ばれて行つた。

「目金が身体を張つて同点にしてくれたんだ、皆絶対に逆転するぞ！」
円堂が叫ぶと俺たちは元の位置に付いた。

「雷藤くん！サンダーイヤノンです！」

卷之三

奄は弦を回（）就リテ故

「サンダーキヤノン！」

俺のシュートがキーパーごと吹き飛ばしゴールネットを揺らした。

ピ[°]

そして勝利のホイッスルが鳴り響いた。

一 やよならレイガ 永遠に

「スガえ奴だつたんだな金つて

円堂が呟く。

「今日の試合MVPは目金だな！」

俺は笑いながら帰りの支度をするのだつた。

雷門中村秋葉名言学園

雷門中決勝戦進出。

裏での出来事

「少林！」

半田が少林寺にバスを出す。

「アチャー！」

少林寺が声を上げながらバスを受け取る。

「よおし！サイドの風丸に出せ！」

円堂が少林寺に声を掛ける。

少林寺が風丸にバスを出し風丸が前に上がっていく。

「風丸さん速過ぎつす～！」

栗松の情けない声が響く。

ベンチでは完全にばてている目金と水分補給を行う豪炎寺の姿が伺える。

「止めろ土門！」

円堂が叫び土門に呼び掛ける。

「わかってるって！」

土門はその言葉を予想していたかのようにデイフェンスに入る。そして風丸からスライディングでボールを奪つた。

「良いぞ土門！」

俺は見事なディフェンスを見せた土門に声を掛けた。

「やりますね土門さん！」

「ええ！」

とマネージャーの音無と木野も呟いている。

「へへへっ！」

土門は少し照れくさそうに鼻の下を

人差し指で撫でまた走り始めた。

「遅いもつとスピード上げろ！」

俺が叫ぶ。

「これ以上無理つス～～」

「もう足フラフラでやんす～～」

と壁山と栗松の情けない声がまた響いた。

そして俺たちは練習を終えた後、雷雷軒に向かつた。

「腹減つた！」

円堂が腹を押さえながら

雷雷軒の目の前まで歩いて來た。

「皆、今日は何食べる？」

俺が聞くと

「俺は炒飯にしようかなあ」

半田が話す。

「僕チャーシュー麺！」

と少林寺も手を挙げて答える。

「んじゃ俺は角煮食べよー」

と俺も今日の注文の品を決めて入ろうとした時だつた。
土門が何か確認した様な仕草をして

「悪りい、俺先帰るわ」

と円堂と俺に話し掛けた。

「ん？ああ、じやあまた明日な！」

「おうお疲れさん」

と円堂と俺が土門に声を掛けると

「じゃあな」と土門も軽く手を振り去つて行つた。

＼土門 sides

「はい…………えっ?!個人能力のデータですか?あつ、はいイナビカリ
修練所での…はい、必ず」

俺はあの方からの電話を切りスボーツショップの前に來た。

そのスポーツショップに飾つてあるサッカーボールを見ながら
俺は円堂の言葉を思い出していた。

「歓迎するよ!」

何故かこの言葉が脳裏から離れない。

「フットボールフロンティアに向けて一緒に頑張ろう!」

円堂からそう言われた時、何だか嬉しかつたな。

「どう?似合うかなあ?」

「うん、似合つてるよ!」

初めて雷門中のユニフォームを着て秋に似合うつて言われた時も…。

「こんな練習が何の役にたつてんだよ…」

イナビカリ修練所での地獄の様な特訓も…。

「行つたぞ土門！」

「ボールを回せ！」

「やるじやないか土門！」

俺は雷門中での楽しい日々が忘れられない。

俺は申し訳ないように顔を下に向けて気付いたら歩いていた。

「危ない！」

突如聞き覚えのある女の子の声が響いた。

俺は右を向くとトラックがこちらに向かつて来ていた。

何とかトラックは俺の目の前で止まり九死に一生を得た。

「馬鹿野郎！ボーッと歩いてんじゃねえぞ！」

とトラックの運転手が安心した様な怒りの混じつた声で叫んだ。

「……………」

俺は無言のまま去つて行つたトラックを見ることしか出来なかつた。

「土門くん！」

秋が俺のもとに駆け寄る。

やはりさつきの声の正体は秋だつたみたいだ。

「……あ、ああ」

俺は申し訳なさそうな顔で秋に顔の向けた。

「大丈夫？ぼんやりしちやつて……」

秋が心配そうに俺に声を掛ける。

「ああ、うん、ちよつと考え方してたから……」

俺は半分本当に半分嘘の様な答えを秋に返した。

「考え方つて……、元気出して！そんなんじや一之瀬くんに叱られるぞ！」

秋が一之瀬と言う言葉を発した途端俺は苦しくなつた。

秋は俺の肩を叩いて歩いて行つた。

「そうあれは……。

「一之瀬くんっ!!」

秋の悲鳴が聞こえた。

俺の……いや俺と秋の昔の嫌な記憶だ。

／冬海 side ／

「率いるチームを決勝戦まで進めるとは流石だな冬海……」

あのお方の怒りがこもった声が聞こえる。

「申し訳ありません、まさか彼奴らが此処までやるとは……」

私は正直に話した。

「どんな手を使つてもいい雷門中を決勝戦に参加させるな、いいかどん手を使つてでもだ、もしも失敗した時は！」

その先は簡単に予想が出来た。

「わ、わかつております！何としても不参加にして見せます！」

私は何とか期待に答えられる様に返事を返した。

「……フツ……」

……ブツッ。

「…もう駄目だ…、うちのチームを決勝戦に参加させたら……私は破滅だ……」

私は校舎裏でうずくまり呟いた。

／土門 side ／

俺は浮かない顔のまま翌日の学校の門を潜った。

「土門くんどこ行くの？」

秋が俺の背後から声を掛けるが俺は振り向かず
「部室に忘れ物……！」

と言葉を残しその場を去った。

俺は部室の中に入りいろんなファイルを開きアレを探す。

「イナビカリ修練所、個人能力データ……これだ」

俺はそのデータに手を掛け取ろうとしたが

「……」

俺は無言のままデータを元に戻した。

俺が部室から出て校舎に向かっていると

俺たちの移動用バスが入っている車庫の中から音が聞こえた。
俺は中を確認してそこに居た人物に声を掛けた。

「先生！」

俺がその先生に声を掛けると驚いたように一瞬だけビクツとした。
「何だ君でしたか…………脅かさないでください」

その男は冬海だ。安心したようになめ息をついている。

「こんな所で何やつてたんですか？」

俺は单刀直入に冬海先生に聞いた。

「さあ？ 何でしようね？」

とシラを切る様にこちらに向かつて歩いて歩いてくる。

「ああ一つだけ忠告しておきますよ、このバスには乗らない事です」

冬海が不敵な笑みを浮かべながら話した。

俺はその言葉を聞いて悪い予感しか働くなかつた。

俺がどういう事だと聞こうとした時には

シャツジャーを潜り外に歩いて行つていた。

「…………これも総帥の命令か！」

俺は怒りに震え上がつたがバスのタイヤを蹴る事しか出来なかつた。

「どうすりや良いんだよ…………！」

サッカーの練習の最中もその事で頭がいっぱいだつた。

俺は全員でグラウンドで走つてゐる最中に途中で足を止め一人違う場所に向かつた。

俺は校舎から少し離れた倉庫に

背中をもたれかかつてある男と話を始めた。

「イナビカリ修練所でのデータは？」

その男が俺に話しかける。

「まだ、まだ手に入つていません」

俺はその男、鬼道を横目で見ながら話した。

「なら何故呼び出した？」

鬼道が声のトーンを落として話す。

「鬼道さん本気なんですか？ 総理何でもやり過ぎですよ、移動用のバ

スに細工するなんて……」

俺が拳を強く握り締めながら話すと

「……何だつて……？」

鬼道は本当に知らない様な口振りで答えた。

「やつぱり……鬼道さんも知らなかつたんですね……これが帝国のやり方なんですか!? 総帥は何を考えているんです?」

俺が思つた事を全部鬼道に話すと

「……くつ

と口をこぼし無言になつた。

「なんか俺総帥のやり方について行けなくなりました! あの人は強引すぎる、そんなにしてまで勝ちたいんですか!?」

俺が叫ぶと鬼道は

「それ以上言うな……俺たちに総帥の批判は許されない」と呟き俺が

「でもつ!」

と言つた時だつた。

「お兄ちゃん」

鬼道が焦つた様に後ろを振り向いた。

その鬼道の後ろにいたのはマネージャーの音無だつた。

裏切り

♪土門 side ♪

音無？鬼道さんをお兄ちゃんと呼んだよな？
俺はとつさに身を隠す。

「雷門中の偵察にでも来たの？」

音無は少し言葉を強くして鬼道に話す。

「……………」

しかし鬼道は音無の言葉を無視して歩き始めた。
「待つてっ！」

音無は鬼道の腕を握り止めようとするが
「離せっ！」

鬼道は音無の手を振り払った。

「俺とお前は会っちゃいけないんだよ」

鬼道は音無にそう言い残しその場を去つていった。

「音無と鬼道さんが兄妹？」

俺はその疑問を小さく呟いた。

♪鬼道 side ♪

俺はいつもの様に長テーブルの奥に座り
父さんと食事をしていた。

カチヤカチヤ音が響くだけで言葉は無い。

その時父さんが口を開いた。

「テストの結果はどうだつた？」

俺は少しだけこの質問が來るのではないかと思つていたんで
スムーズに言葉が出た。

「数学と英語は100点でした」

俺の2つの100点には興味もなさそうに

「国語は？」

と聞いてくる。

「97点です……」

俺が少しだけ顔を伏せながら話すと父さんの表情が曇つた。

「…………」

俺が少し息を呑んだ時

「……………はあ…」

と父さんがため息をついた。

「鬼道財閥の人間は常にトップで無ければならない。わかってるな」と父さんの言葉が俺に刺さる。

「はい…父さん、鬼道家の人にとしての義務は果たします。でもフトボールフロンティアで僕が三年間連勝し続けた時は…」

俺がそう話すと父さんは

「わかつてている、妹の春奈の事だな？」

少し間を空けて話を始めた。

「安心しなさい約束は守る、それに三年連續優勝など容易い事だ。影山さんに任せておけばな」

父さんはそう笑いながら話した。

「……………つ」

俺は言葉が出ず、何故か躊躇いの念が生まれていた。

「君も偉くなつたもんだねえ、この私に意見する様になつたのだから。ん？鬼道」

俺は影山総帥の所に一人で来ていた。

「いえ、意見という訳ではなく」

俺がそう話すと総帥は

「では批判かね？冬海にやらせた事が気に入らないのかね？安心したまえ私はバスに小細工をしろなどの命令はしていない。雷門中が決勝戦に出る事を阻止しろと言つたがな…フツフツフツ…」

総帥が予想外の事を語つたので

「そんな事をしなくとも…」

俺が呟くと総帥が

「勝てるというのかね？」

と質問をして来たので俺が頷いた時だつた。

「100%絶対に勝てると言い切れるのか！」

と凄い剣幕で聞いて来たので俺は少しだけ後退りをしてしまつた。

「一つ教えてやろう、優れた司令塔がいるチームは試合の前に勝つて
いるという事だ！君は私の言う通りに動いていれば良い、何も考えず
にな」

俺は総帥の言葉を黙つて聞くしかなかつた。

「雷藤 s i d e 」

「おらよ宍戸！」

俺が宍戸にバスを出す。

「それっ！」

宍戸が蹴つたボールが青い光を纏つてゴールに向かう。
しかしボールはゴールポストに当たり跳ね返つた。

「惜しかつたな」

俺が宍戸に話しかけると染岡が宍戸の所に行つて
「俺のドラゴンクラッシュには遠く及ばないなあ」
ここだけ聞くと嫌味にしか聞こえないが

「だが筋は良いぞ!!」

と宍戸の髪をぐしゃぐしゃ撫でながら笑う。

ここで目金が人差し指を立て話した。

「今の技、グレネードショットっていうのはどうですか？」

それを聞いた宍戸が

「グレネードショットか……カツケエ!!」

と叫んだ。

「ああ、カツケエよカツケエ」

染岡もそう喜んでいた。

「ローリングキック！」

今度は半田の新必殺シユートみたいだ。

ローリングキックは見事にゴールに突き刺さり試合でも使えると
感じた。

「みんな気合入つてんな！」

と円堂が俺に話しかけて來た。

「次は地区大会決勝戦だからな、そりや気合が入るぜ」

俺も帝国と戦える喜びを噛み締めながら話すと

「勝てば全国、負けても全国、何が何でも全国だあ！」

と円堂が叫んだ。

「いやいや負けちや駄目だからね」

俺がツツコミを入れるも無視されて

「もうじつとしちゃいられない！」

円堂は叫びグラウンドに向かう、俺も円堂に続きグラウンドに戻った。

♪土門 sides♪

夏未が俺が書いたアレを見つけたみたいだ。

夏未が真剣に内容を確認している。

「…つーこれは…！」

俺は夏未が呟いている姿を階段から見ていた。

俺は携帯をポケットから取り出し

「鬼道さんすみません……！」

俺はそう呟いて鬼道さんのデータを全て消去した。

パタンと俺は携帯を閉じて

「これで良いんだ……」

と呟いた。

♪冬海 sides♪

「はい、はい勿論です…間違いなく雷門中は出場出来ません…ええ、これから最後の練習を見に行つてやります」

私は笑いながらあの方との電話を切つた。

♪雷藤 sides♪

「ほらー！パスバス！」

いつもより元気そうな土門が叫んでいる。

土門は影野からボールを受け取つた。

そして楽しそうにドリブルをしている。

「ん？珍しく監督が来てるな……」

俺が冬海監督に気付き呟くと

「珍しいなあの監督が来てるなんて」

と染岡も呟く。

「一応監督だからねー」

とマックスは話す。

「そりやそうだけど

と俺が苦笑いしていると

「冬海先生」

と夏未嬢が冬海監督に話し掛けた。

「ん? はいなんですか?」

と落ち着いた対応で夏未嬢に返事を返す。

「お願いがあるんですけど宜しいかしら」

夏未嬢が冬海監督に話すと冬海監督は前で手を合わせて

「お嬢様の願いを断る理由が御座いませんよ」

と頭を低くして話す。

「遠征に使用するバスの様子が見たいので動かして頂けません?」

夏未嬢がそう話すと

「バ、バスをですか!?

と何やら冷や汗をかきながら叫ぶ。

その叫び声が響くと何やら焦った様に土門が振り向いた。

その声に反応してメンバー全員が冬海監督と夏未嬢の方に向く。

「い、いきなりそんな事を言われましても私は大型免許を持つてませんし……」

冬海監督が何故か焦った様に夏未嬢に話すと

「それは問題ありません、校内は私有地ですから免許など要りませんわ。それにちょっと動かして下されば良いだけですし」

と夏未嬢がうすら笑みを浮かべながら冬海監督に話す。

「…………しかし」

冬海監督が大粒の汗を額に浮かべながら呟く。

「あら、断る理由は無かつたんじやなくて?」

夏未嬢がさらに問う。

「冬海監督……!」

夏未嬢が額の汗を拭いていた冬海監督に名前を呼んだ途端
「は、はいつ!」

と叫び俺たちは夏未嬢に連れられ

冬海監督と一緒に移動用バスが入っている車庫に向かつた。
冬海監督が移動用バスに乗り込み運転席に座つた。

「発進させて止まるだけでいいんです」

夏未嬢がそう冬海監督に話すが監督は何故か何もしない。
流石に俺たちも只事じやない事に気付いて来た。

「どうなさつたんですか？冬海監督？」

夏未嬢がさらに冬海監督を追い詰める。

「……い、いやあ」

冬海監督が口を開いた瞬間

「早くエンジンを掛けてください」

と夏未嬢が冬海監督に話す。

「は、はい……」

と冬海監督はエンジンを掛ける真似をした。

「あ、あれ？おかしいですね？バッテリーが上がっているのかな？」

とシラを切るように話した冬海監督に夏未嬢が
「ふざけないでください！」

と凄い剣幕で冬海監督に叫んだ。

「…………つは、はいいいっ！」

と冬海監督は震えた手でエンジンを掛けた。

ブロロロロロロとエンジンが掛かつた音が響く。

「さあーバスを出して！」

夏未嬢が叫ぶ。

しかし冬海監督は震えた手でハンドルを握るだけで何もしない。

「どうしたんです！冬海監督…？」

と冷たい言葉を冬海監督に夏未嬢が投げ掛ける。

「…………つー出来ません!!」

と冬海監督は顔を埋め叫んだ。

「どうして？」

夏未嬢がさらに聞く。

「どうしてもです！」

冬海監督の声が響く。

その時夏未嬢はポケットから手紙のようなものを取り出した。

「（）に手紙があります、これから起きようとしたであらう恐ろしい犯罪を告発する内容です」

夏未嬢は少しだけ合間を空けて言葉を続けた。

「冬海監督、バスを動かせないのは貴方自身がバスに細工したからではありませんか？この手紙にあるように！」

夏未嬢が少し言葉を強くして話す。

「……………くつ！」

と冬海監督が観念した様に顔を埋めた。

「本当かよ…………」

円堂が呟いた。

「嘘だろ…………」

俺も口から言葉がこぼれる。

「答えてください！冬海監督！」

夏未嬢が冬海監督……いや冬海に叫ぶと

「くつくつくつくつ……あつはつはつはつ」

と笑いながらシートベルトを外し外に出てきた。

「そうですよ、私がブレーキオイルを抜きました」

冬海が笑みを浮かべながら話す。

「何のためにっ！」

俺が冬海に叫ぶと

「貴方方をフットボールフロンティアの決勝戦に参加させないためです」

冬海がそう言い切ると

「なんだつて…………？」

と円堂が呟く。

「貴方方が決勝戦に出ると困る人が居るんです。その人の為に私はやつたんだ」

冬海がそう話すと豪炎寺が口を開いた。

「帝国の学園長か!?」

と冬海にたいして叫ぶ。

冬海は軽くこちらを振り向いた。

「帝国のためなら生徒がどうなつてもいいと思っているのか！」

豪炎寺が冬海にさらに叫んだ。

「君達は知らないんだ！ あの方が……どんなに恐ろしいかを……」

冬海のその言葉を聞いた豪炎寺は叫んだ。

「ああ！ 知りたくもない!!」

豪炎寺は怒りを言葉に込めた。

「あなたの様な教師は学校を去りなさい！ これは理事長の言葉と思って貰つて結構です！」

と夏未嬢が冬海に指を指して叫んだ。

「クビですか？ そりやいい、いい加減こんなところ教師やつているのも飽きてきたとこです。しかしこの雷門中に入り込んだスパイが私だけと思わない事だ」

冬海はニヤリと笑いながら言葉を続けた。

「ねえ土門くん」

俺たちはその言葉に戸惑いつつ土門の方を向いた。

「えつ……土門が帝国のスパイだつて……？ 嘘だろ……」

俺が呟くと冬海が

「では失礼しますよ、くつくつくつくつ……」
と去つていった。

裏切りの先に

「俺は……っ！すまねえ！」

「土門!!」

土門はそう叫ぶと俺たちの前から走り去った。

「私、土門くんを追いかけるね！」

「ああ、頼む木野！」

俺が木野に返事を返すと領いて走つて行つた。

「まさか土門さんが…………信じられないでやんす……」

「土門さん俺たちを裏切つてたんスね…………」

「…………」

「円堂……？」

「俺も土門を追いかけて来る！」

「俺も行くぜ」

そう話した後、俺と円堂は土門を追いかけた。

「…………土門くん！やつと見つけた」

「秋か…………。裏切り者に関わるとお前まで疑われるぞ」

木野が土門を見つけたところは河川敷だつた。

木野は土門の横に座ると口を開いた。

「皆、心配してたよ」

「俺は……、俺は大事な仲間を裏切つたんだ、帰る場所なんてない」

「あるじやない雷門サツカーハー部が！」

「雷門サツカーハー部かあ……、楽しかつたな」

「雷門サツカーハー部は円堂くんと雷藤くんが作つたんだからね」

「聞いたよ俺がまだ帝国サツカーハー部の時に……」

「何で土門くんは雷門に？」

「もうわかつていると思うが俺は、帝国のスパイとして雷門に転校した、最初は呑氣そうな奴等だなつて思つた時もあつた。だけど日が進むにつれて雷門中サツカーハー部が好きになつていつた。帝国では俺は鬼道さんの背中を追うだけだつた。でも雷門……ここは違つたんだ！」

円堂や雷藤、皆が一緒に隣を走ってくれる……なんか……すげえ落ち着くんだ！でも俺はそんな仲間を裏切った……もう戻れない」「戻れるやー！」

「えつ……」

土門の視界に映ったのは雷藤と円堂だった。

「円堂……雷藤……」

「それだけ聞ければ許す許さないなんて無いさ。これからも一緒にサツカーやろうぜ！」

「……円堂」

「俺からも一言、一緒にイナズマイレブンになろうぜ！」

「雷藤……、本当に良いのか？」

「何言つてんだよ、お前は雷門中サツカーハイの土門だろ？」

「…………ああっ!!」

翌日

「6時間目に数学つて俺を殺す氣かあ！」

「Z z z … Z z z … Z z z」

「…………ん？」

「Z z z … Z z z … Z z z」

「円堂寝てやがる……だから俺より点数低くなるんだよ」

俺は呆れたように咳き部活に向けて勉強を頑張った。

放課後練習

「行くぞ円堂！サンダーキヤノン！」

俺の渾身のシユートが円堂に向かう。

「止めてみせる！ゴッドハンド！」

キュイーンと音が響き円堂が少し押し込まれる。

「負けねえぞおお！」

キュイーン バシン と円堂の手に収まる音が響いた。

「くつそお！止められたあ！」

「くうう…手が痺れる…相変わらず良いシユートだな！」

「覚えてろよー！」

「いつでも相手になるぜ！」

（俺もそろそろ新技作るとするかな…………）

「ちょっと皆、夏未さんが呼んでるわよ」

「木野が夏未嬢が呼んでるって言つてるぞ」

「なんだろうな」

「とにかく行こうぜ！」

「で、話は？」

「貴方達、探す気あるの？」

「…? 何を？」

そう話すと夏未嬢は大きなため息をついて話した。

「…はあ貴方達何も知らないのね、このフットボールフロンティアは監督が居ないと参加出来ないの…。一応今まで冬海先生が監督として登録されていた訳だけど、今は冬海先生がいない…。つまり今この状態だと……出れないわよ」

「…………え？」

「出れないって言つたのよ」

俺たちが驚きで声が出ないなか、夏美嬢は一言残し去つていった。

「早く代わりの監督を探しなさい、これは理事長の言葉と思つてくれて結構よ」

俺たちは夏美嬢の背中を見ながら叫んだ。

「「いやああああああつっ!!」」

雷門紅白戦！

響木監督が監督に就任して数日が過ぎ
ついに明日、帝國との試合前日になつた。

「よし集まつたな……」

俺たちは響木監督に練習を止められ
監督のもとに集まつていた。

「部員全員集まりました！」

円堂が全員居るかを確認し監督に伝える。

「今日の練習は終わりだ」

「えっ！まだ一時間しか練習してないんですよ!?明日は帝國との決勝
戦なのに！」

「あくまで練習が終了だ」

「？どういう事ですか……？」

俺はわからず監督に問う。

「お前ら！今から紅白戦を行う！」

「紅白戦!?」

「今からチーム分けを行う、各自言われたチームに入れ！」

雷門Aチーム

F W 豪炎寺 マツクス

M F 少林寺 半田

D F 栗松 影野

G K 雷藤

雷門Bチーム

F W 染岡 穴戸

M F 目金 土門

D F 壁山 風丸

G K 円堂

というチーム分けになつた。

「お、おい！雷藤お前、GKも出来んのか!?」

染岡が俺に話しつけてきた

「まあそこそこねー応全ボシシニン経験してるから」

「それ程でもないけどな…、そういえば響木監督。

ことあるつて知っていたんですか?」

前に野生中と試合をしただろう?」

は
はいしましたが、

「俺はその試合を見ていたんだ。その時の試合でお前は円堂が弾いたボールの行き先を瞬時に判断し、円堂のカバーに向かいクリアした。そのボールの行き先を瞬時に判断するスピード、危険を察知する力……。その力はGKの基本の動作……躊躇いない判断の速さを見たことで判断した」

「何言つてゐるかわからぬけれど……わかりました」

「「「はー！」」

「うわっ！ここからの眺め懐かしいなあ」

俺はゴールエリアからの眺めを堪能していた。

響木監督の声が響きホイツスルを握つた。

モリヤマ・ヒロシ

「行くぞ、松野」

オツケー!

「通さないぜ！」

土門が豪炎寺のブロックに入る。

……！松野！

「ナイス！」

マックスがボールを受けて上がつて行く。

「半田！」

マックスが上がつて来た半田にバスを出す。

「やらせないぜ！」

風のように速い風丸がマックスのバスをカットした。

「よし！」

風丸がドリブルでそのまま上がつて行く。

「目金！」

風丸が目金にバスを出し、チャンスを広げる。

「わわつ！ど、土門くん！」

「ナイスパス！目金！」

目金はワンツーで土門にバスを出し俺に近づいて来る。

「行けつ！宍戸！」

「はい！」

土門が出したバスが宍戸に渡り、宍戸がゴールを狙う。

「手加減しませんよ！雷藤さん！」

「来い宍戸！」

宍戸が大きく足を上げボールに光が集まつて行く。

「いつけえ！グレネードショット！」

グオオオオ！と音を立て俺に迫る。

「この技も久し振りだな……！」

俺は両手を前に出し、力を集中する。

「はああああ！サンダーウォール!!」

俺の前に雷の壁が現れボールの威力を奪つていく。

シュー　パシ　俺の手にボールが収まつた。

「よし！」

俺は久し振りのG K技を見事に成功した。

「えええ……、嘘でしょおお……」

宍戸が髪をぐしゃぐしゃしながら叫ぶ。

「良いシユートだつたな！」

「次は決めますよ！」

俺は取ったボールを足元に置きドリブルを始めた。

「う、嘘!!」

宍戸が驚いたように俺を見た。

「行かせるかよ!!」

染岡がディフェンスに入るが俺はターンで染岡を抜いた。

「うおおお!! キラースライド!!」

土門が必殺技で俺を止めに入る。

「半田!!」

「雷藤!!」

雷藤——半田——雷藤 とワンツーで土門を追い抜く。

「豪炎寺!! アレやるぞ!!」

「ああ!!」

「はあああ!!」

俺と豪炎寺はボールを同時に蹴り、叫んだ。

「イナズマ2号!!」

青と紫の電気を纏つたボールが円堂を襲う。

「ゴッドハ……っ!! 間に合わない!! 热血パンチ!!」

グググツ とどんどん円堂が押し込まれそして。

「ぐわああ!!

ピ——!!

雷門Aチームが先取点を奪つた。

「よし!!」

パシーン!! と俺と豪炎寺はハイタッチを交わした。

「くつそお!! やるなあ雷藤、豪炎寺!!」

「次も決めてやるぜ!!」

「サンダーイヤノン!!」

俺が放ったボールは円堂一直線に向かう。

「ゴッドハンド!!」

キュイーン バシン!!

……。この前の再現みたいだ。

「だああああー！くつそおおおー！」

「やられたらやり返す。倍返しだー！」

円堂はニカツと笑い、何処かで聞いた事のある言葉を放った。

「ドラゴンクラッシュ！」

染岡のシユートがゴールを襲う。

「やらせるか！サンダーウォール！」

雷の壁が威力を奪うが完璧には止められず弾いてしまった。

「くつ……！」

体勢を崩し立て直そうとしていると。

「もらつたああ！」

弾いたボールの先にはゴールから上がつてきていた円堂が来ていた。

「おおおおー！」

バン！ と溢れたボールを円堂が押し込み試合は振り出しに戻つた。

「よし！これで振り出しだぜ！」

「やるな円堂！だけどこれ以上点はやらないぜー！」

その後、お互い互角の勝負を繰り広げ勝負は引き分けに終わつた。

「良い勝負だつたなー！」

円堂が俺に手を差し出す。

俺はその手を握り明日に向けて意気込んだ。

「明日は俺らが勝あつ!!待つてろ帝国！」

それを聞いた他のメンバーも明日に備え最後の調整をするのだった。

影山の罠!!

「着いた……ついに帝国学園との決勝戦か……」

俺は巨大な帝国学園のホームグラウンドを見ながら呟く。

「相手は影山だ！何を企んでいるか解らん！辺りに気をつけろよ！」

響木監督が俺達に声を掛け気を張り歩く。

「此処が部室……更衣室かよ、でけえ…」

染岡が呟きロツカーハンドshakeに手をかけようとしたとき

ガチャガチャ

更衣室で音が聞こえた。

そこから現れたのは帝国学園キヤプテンの鬼道だった。

「き、鬼道！」

円堂が鬼道に対し叫んだ。

鬼道を見た染岡は叫ぶ。

「お前俺らの場所で何してやがった！まさか妙な仕掛けでもしたんじやねえだろうな！」

鬼道は叫ぶ染岡を見て呟いた。

「そんな事はしない。俺もお前らとは楽しいサツカーハンドshakeしたいからな」

「鬼道……お前…」

予想外の言葉に俺は言葉が漏れた。

「ここは大丈夫だ安心してくれ」

鬼道はそう言い放つと、辺りをキヨロキヨロ見渡しながら部屋を後にした。

「円堂、鬼道は何してたと思う？」

俺は円堂にそう問うと円堂は

「悪いことをしようとしていたとは思えない。鬼道は何か探しているように見えたな…」

「俺もそう思っていたところだ。でも何を探していたんだろうな…」

俺と円堂は少し考えていたが

試合に集中するため

考えを打ち消した。

『さあ、間もなくFF地区大会予選の決勝戦が始まろうとしています！解説は雷門中の角馬圭太がお送りします！』

一両校整列！」

審判の声が響き俺達は並んだ。

すると俺達の前にいた鬼道が俺に呟いた。

鬼道はコクリと頷くとポジションに付いた。

同記卷之二

MF半田 少林寺 風丸

壁山栗松土門景野

卷之三

帝國學園イレブン

後山房文集

○
戊申
万丈
大静
五条

GK 源田

以上のヌタリティイングメンバード。

俺は全員に鬼道から聞いたことを伝えた。

—それは本當なののか!』

「わかつた鬼道を信じよう」

俺はFWの位置に付き
鬼道の言葉を信じる。

そしてついにホイツスルが響いた。

そしてその瞬間、別の音が俺達を襲つた。

ガラガラ… ドガ——ン!!

俺達の場所に天井から鉄骨が降り注いだのだ。

『なんということでしょう！ 雷門中の所に鉄骨が落ちてきました！ これでは雷門中の選手達は……。?! や無事です！ なんて奇跡！ 雷門中の選手は全員無事です！』

「……あつ……あ、 あ……」

俺は目の前で起きたことをあまり理解出来ていなかつた。

「鬼道の言うとおりだ……」

そう俺達が助かつたのは鬼道のお陰だ。

あの時、鬼道が俺に言つたのは

「笛がなつても絶対動くな」

という言葉だつた。

まさかここまでのものとは思わなかつたが。

勿論、試合は一時中断。

俺達は鬼道の後を追いかけた。

「総帥、これは一体どういう事ですか…!!」

俺達が聞いた第一声は鬼道の影山に対する怒声だつた。

「ふふつ、何のことかな？」

影山はしらを切るように笑う。

「あなたがこれを仕組んだんでしょう！」

「私がしたという証拠がどこにある？」

ここで聞き覚えのある声が響いた。

「証拠ならここにあるぞ影山！」

俺達が振り向くとそこには、あの鬼瓦刑事が立つていた。

「お前が工事の男性にネジを緩めさせたことは、もう確認済みだ、もう言い逃れは出来ないぞ！」

「ふん、流石は鬼瓦… 一応刑事だけのことはある」

「お前の話はじっくり刑務所で聞いてやる！ おい！ 捕えろ！」

そう鬼瓦刑事は部下に命令すると影山に手錠を掛けた。

「鬼道… お前たちは私抜きでは絶対に勝てん、絶対にな……。くつ

卷之三

そう影山が呟くと鬼瓦刑事は

「お前は知らないのか、本当のサッカーをな」

と影山に呟き、パトカーに乗り込んだ。

—それじやお前ら最高のサツカー、楽しめよ!』

その言い残しハトガリは走り去つた

「鬼道、奄達は絶対この雷門中を倒す。」全国へ行き、憂勞するんだ!!」

「源田、そうだな……！絶対にこの試合、俺達帝国学園が勝つんだ！！」

「ニヒリオガタ」

「皆、俺達は最高の相手と今から戦うんだ！絶対勝つて全国に行くぞ！」

『さあ！一時は中断を余儀なくされましたが、ついに決勝戦が幕を開けます！確実に実力をつけ今や注目の雷門中か！それとも王者の帝國学園か!?審判ホイツスルを握り、そして！』

『笛が吹かれました!!』

最強帝國学園！前編！

笛が響いた途端に俺と染岡、豪炎寺は三人でパス回しをしながら帝國に攻めていく。

「行かせるか……！」

帝國学園のFW佐久間と寺門の強力なスライディングが俺を襲うが、体勢を崩しつつなんとか染岡にパスを出せた。

「頼む！ 染岡！」

「任せられたぜ！ 雷藤！」

そう叫ぶと染岡は前線にどんどん上がりDFエリアまで到達した。

「通さん！ アースクウェイク!!」

帝國のDF大野の強力なディフェンス技が炸裂し染岡が体勢を崩した。

「くつ…………」うなりや！ 豪炎寺行くぞ！」

染岡が叫ぶと豪炎寺はコクリと頷いた。

「決めてやるぜ！ ドラゴン——！」

「トルネードオオ！！」

『ここ』で雷門中、豪炎寺と染岡の合体シユート、ドラゴントルネードが炸裂!! キーパー源田止められるか!?』

「点はやらない！」

源田はそう叫ぶと足下にパンチを放つた。

「パワーシールド!!」

源田のパワーシールドと言う技がゴールの周りを衝撃波で覆い完全にドラゴントルネードを止めた。

キィイインン!!

染岡と豪炎寺の合体シユートのドラゴントルネードが完全に止められ、俺は帝國学園の強さを改めて実感した。

「あのシユートを完璧にシャットアウトかよ……」

「いいシユートだつたが、俺のパワーシールドは破れない！」

源田はそうニヤリと笑うと前線にボールを蹴った。

「鬼道!!」

源田が蹴ったボールは寸分違わず鬼道に渡った。

「ヤバい！ 戻るぞ！」

前線に上がっていた、俺と豪炎寺、染岡は帝國学園のカウンターにやられないように急いで戻る。

「佐久間！ 洞面！ 寺門！」

鬼道はそう叫ぶとボールを高々と蹴り上げた。

「ヤバい！ デスゾーンだ！」

俺は叫ぶと円堂は領いて闘志を全面に出している。
佐久間、洞面、寺門は飛び上がりボールを軸に回転し始め、そしてボールを蹴り落とした。

「デスゾーン改!!」

ゴオオオオオオ!!

と凄まじい音を放ちながらデスゾーンが円堂を襲う。

「以前の時より段違いにパワーアップしてやがる！」

「やらせるかあ！」

円堂は右手に集中し、巨大な手を出現させデスゾーンを止めにいく。

「ゴッドハンド!!」

円堂のゴッドハンドも以前に比べパワーアップしているが、進化したデスゾーンを前に少しずつ押されている。

「円堂お！ 負けんなあ！」

円堂はその叫びに応えるように、叫ぶ。

「負けるかああ!!」

一度は押されていたゴッドハンドは更に輝きを放ち、今度はデスゾーンに押し勝っている。そして円堂の手にボールが収まった。

キュイーン バシン！

「よし！ 止めたぜ！」

「流石だ円堂！」

俺達が円堂に対し喜んでいる中で、ベンチの日金が叫んだ。

「今のはゴッドハンドが進化し輝きを増した……、ゴッドハンド改と呼ぶべきでしょう!!」

「進化したゴッドハンドがあれば何にも怖くないっス！」

壁山が叫ぶと豪炎寺が呟いた。

「壁山もチャンスがあれば前線に上がつてくれ。イナズマ落とも出来るし陽動にもなるからな」

「はいっス！」

「行け風丸！」

円堂は風丸にボールを渡し一声かける。

「どんどん頼んだぜ！風丸！ゴールは任せとけ！」

「ああ！」

風丸は風のように前線に上がつていき、俺はその後ろから前線に上がつていく。

「はあああ！キラースライド！」

帝国のD.F成神のキラースライドが風丸を襲うが、風丸の後ろにいた俺が成神が弾いたボールを拾い上げていく。

「行くぞ源田！」

「来い雷藤！」

俺は加速をしつつ、クルツと回転し回し蹴りを放つ。

「サンダーイヤノン！」

バリバリと音を立て、ゴールを襲うが源田がまたパワーシールドを発生させた。

「パワーシールド!!」

「キイーン！」

俺のサンダーイヤノンは完璧に止められ、俺は苦笑いを浮かべる。

「残念だつたな、パワーシールドは何回でも連続で出せる」

（どうか、パワーシールドは衝撃波なのか……、ん？衝撃波……？）

源田は止めたボールを前線に蹴った。

（どうか衝撃波なら……突破出来るはず！）

「鬼道！」

M.F辺見から鬼道がボールを受け上がるがつていく。

「行くぞ、佐久間、寺門！ゴッドハンドを破るために編み出した必殺技

……!!

「ああ!!」

佐久間と寺門は鬼道に近付き三人で走つてくる。

「ゴッドハンドを破るために編み出した必殺技だと!?」

俺と豪炎寺は嫌な予感がして、急いで戻る。

「これが帝国の最強シユートだ！」

「ピイイイイイ！」

鬼道が指笛を吹くと、地面からペンギンが現れ、鬼道がボールを思いつきり前に蹴る。

「はあああ！皇帝ペンギン——！」

佐久間と寺門が更にその鬼道の渾身のシユートをツインシユートで合わせた。

「2号おおおお！」

今までに見たことのない、途轍もないシユートが円堂が守る、ゴールを襲う。

「絶対に止めてみせる！ゴッドハンド改！」

円堂が進化したゴッドハンドで迎え撃つ。

帝国が放った皇帝ペンギン2号は円堂のゴッドハンド改の指一本一本にペンギンが直撃しており、かなりの威力が出ているみたいだ。

「ぐつ……点はやらない！」

どんどん押されていく円堂だったが、ゴッドハンド改が耐えきれなかつた…。

バリーン!!

進化したゴッドハンドが皇帝ペンギン2号の強力なシユートによつて粉々に粉碎され、そしてボールはゴールに突き刺さつた。

ピ――――!!

『ゴオオオール!!先制点は帝国が円堂のゴッドハンドを破つて先制しましたあ!!』

俺は決められたらゴールを見ながら呟いた。

「なんだよあのシユート……、今まであんな凄いシユートみたことねえ…」

「円堂のゴッドハンドが負けるなんて初めてみたぜ……」

染岡も俺の隣で呟いた。

そして前半終了のホイツスルが鳴り響いた。

「くつそおおー！皇帝ベンギン2号止められなかつた!!」

「大丈夫だ、円堂。パワーシールドの弱点はわかつたから後半に逆転してやるよ！」

俺がそう話しかけると、染岡達は気付いていなかつたらしく聞いてきた。豪炎寺は今回ももう気付いていたみたいだが。

「とにかくだ！後半はDFは徹底的に鬼道、佐久間、寺門のマークに付いてくれ！FW、MFはチャンスがあれば上がるぞ！」

俺がそう指示すると皆、頷き後半への意欲を感じた。

〔雷藤〕

突然、豪炎寺が声を掛けてきて俺は少し反応が遅れたが、豪炎寺から話しがけて来るときは大抵大事な話なので耳を傾けた。

「どうした…？」

「もしチャンスがあつたら、アレやるぞ」

「アレやるのか!?でも成功する割合は五分五分だぞ？」

「大丈夫だ、雷藤は本番に強いからな」

「なんだよそれ……」

俺は少し笑いながら、ベンチに置いている少し焦げたボールを見た。

〔絶対勝とうな、豪炎寺！〕

「もちろんだ、夕香のためにも、雷門のためにも絶対に勝つ！」

「皆、行くぞ!!」

「「「おおおお!!」」

俺達は最高のモチベーションで後半を迎へ、ポジションに付いた。

激戦の末！ 帝国学園後編！

後半は帝国学園からのボールだ。

「行くぞ佐久間、寺門！」

鬼道の声と共に佐久間、寺門、鬼道が前線を駆け上がつてくる。

「止めるぞ！」

俺の言葉で豪炎寺は佐久間のマーク、染岡は寺門のディフェンスについた。

「鬼道！」

ボールを持つていた寺門が鬼道にバスを出した。

「読めてたぜ！」

俺は寺門から鬼道にバスが来ることはある程度読んでいたので、すぐに戻す。鬼道のブロックに入ることが出来た。

「ふつ、甘いな」

鬼道はそう呟くと、クルツと空中を回転し、ボールを地面に叩きつけた。

「イリュージョンボール！」

鬼道が叩きつけたボールは無数にも分身し、混乱した俺は抜かれてしまった。

「くつ…！あんな技を隠してたのか！」

鬼道は俺を抜いた後も、MF、DFを華麗なドリブルで抜き去り、ゴールの間近まで迫つた。

「来い鬼道！」

「行くぞ円堂！」

円堂の声に応えるように、鬼道は叫んだ。

「佐久間！」

「ああ！」

鬼道と佐久間は短く声を掛けると、鬼道は上に向かつてボールを蹴り上げた。

「ふつ！」

佐久間は鬼道が上げたボールをヘディングで鬼道に返し、そのボ

ルを鬼道がダイレクトで蹴り込む。

「ツインブースト！」

鬼道と佐久間の新必殺技が円堂に向かい炸裂する。威力は俺と豪炎寺のイナズマ2号に劣らない程の威力だ。

「絶対に止めるんだあ！」

円堂は叫びながら強烈なパンチを放つた。だがただの熱血パンチではない。円堂は熱血パンチをボールに対し連発で打ち込んでいるのだ。

「うおおおお！爆裂パンチ!!」

バシイイイイーン!!

と円堂の爆裂パンチで鬼道と佐久間のツインブーストを打ち返した。

「流石円堂！目には目を新必殺技には新必殺技だな！」

「やるな円堂…」

「流石だぜ鬼道！すげえシュートだ！」

円堂と鬼道はお互いに心からサッカーを楽しんでいるように見えた。

円堂が爆裂パンチで止めたボールは壁山のもとに飛んで壁山は半田にパスを出した。

「半田さん！」

「ナイスだ壁山！」

半田はボールを受け取ると豪炎寺にロングパスを出した。

「頼む豪炎寺！」

ボールを受け取った豪炎寺は前線を駆け上がり、炎の渦を巻きながら上昇しシユートを放つた。

「ファイアトルネード!!」

豪炎寺が放つた炎のシユートは帝国のGK源田に一直線に向かう。「無駄だ！パワーシールドは破れない！」

源田は叫ぶとパワーシールドを発動させた。

「パワーシールド！」

源田が発動させたパワーシールドはファイアトルネードの威力を

奪つていき止めようとした時だった。

「まだ終わってねえ!!」

俺は止まりかけたファイアトルネードにかかと落としをして、ボールに縦回転を加えさらにボールに思いつきり蹴りを放った。

「パワーシールドは衝撃波で出来た壁……弱点は薄さだ！遠くからの飛んできた物は跳ね返せても、近距離から押し込めば……ぶち抜ける！」

鉄壁のパワーシールドに亀裂が入つていき、そして。

「決まれええ！ライトニングアロー！！」

バリイイーン!!

「ぐわあああ!!」

ピ―――――!!

『決まったああ！雷門中の雷藤の新必殺技ライトニングアローで、ついについに帝国学園に追い付きましたああ！』

「よつしやあああ!!同点だああ！」

俺が叫ぶと、皆が笑顔で集まつてくる。俺はこの光景が好きだ。この一瞬の為に俺はサツカーチをやつっているかもしれないし、この光景が好きだからサツカーチが好きなのもしれない。

「くそつ！」

「まさかこの短時間でパワーシールドの弱点を見つけるとはな……、流

石は雷門だ」

「今度はパワーシールドを超える、あの技で絶対止めてやる……！」

「頼んだぞ源田」

俺達雷門中が点を奪つたので、またボールは帝國学園からだ。

「絶対に俺達帝國学園が勝つんだ！」

「「おおつつ!!」」

ピ―――！

帝國学園の掛け声と共に笛が鳴り響き、寺門――佐久間――鬼道とボーリーが渡つていく。

「次は止める！」

俺が鬼道のデイフェンスに入ると鬼道はクルツと空中を回転し、あの技を発動させた。

「イリュージョンボール！」

「くつ……！」

俺は鬼道の華麗なドリブルに手も足も出ず、さつきと同じように突破された。

「やれ！寺門、佐久間、洞面！」

3人は領き、鬼道が空中に上げたボールに向かい黒い渦を巻きながら上昇していく。

「「真デスゾーン!!」

「ゴオオオオオ!!

とさらに進化したデスゾーンが円堂が守るゴールに襲いかかる。

「これはヤバい！皆止めるぞ！」

俺が叫ぶと、皆が領き体を張つてボールを止めにいく。

初めに俺、豪炎寺、染岡が止めに掛かつたが、もの凄い威力に俺達は吹き飛ばされた。そして、半田達、風丸達も吹き飛ばされ、ついに円堂だけとなつた。

「止めてくれえ！円堂！」

俺達の叫びに領くと円堂は闘志を剥き出しにして、思いつきりパンチを放つた。

「だああああ！爆裂パンチ！」

円堂の新必殺技が炸裂し、デスゾーンを迎撃つ。しかしさらに進化したデスゾーンのパワーは衰えを知らずどんどん円堂がゴールに押し込まれていく。

「ぐつ、ぐ…！ぐわああ!!」

円堂の新必殺技、爆裂パンチは進化したデスゾーンの前に敗れ、誰もが決められたと思った時だつた。

「バシン!!

突然鈍い音がフィールドに響いた。俺が鈍い音が響いた方を見る
と、そこには顔面でデスゾーンを止めにいつた土門の姿があつた。

「……土門！」

俺は急いで土門のもとに駆け寄ると声を掛けた。幾ら俺達と円堂が少しほはパワーを落としていたとはいえ、もろにシユートを受けた土門が無事な訳がない。

「なんて無茶を……！」

「こうでもしなくちゃ、あのデスゾーンは止められないだろ……？」

「土門……」

「なあ雷藤……、俺も雷門イレブンになれたかな……？」

「当たり前だろ！お前は最初から俺達の大事な仲間だ！」

「……へへつ、そうか……、ありがとうよ」

土門はそう言い残すとタンカに運ばれていった。

「土門……、お前の分も絶対に勝つからな！」

out 土門 in 宍戸

土門と代わった宍戸がMFに入り、MFに入っていた風丸がDFに入つた。

土門のガツツ溢れるプレイで何とかクリアしたので、帝國学園のコーナーキックから開始だ。

「せいつ！」

コーナーキックを放つた寺門は、そのままカーブのかかったシュートでゴールを狙つてきた。

「絶対に止める！熱血パンチ！」

円堂のダイビングしながらのパンチで何とかボールを弾き返し、弾き返したボールが風丸に渡る。

「皆が繋いだこのボールだけは、絶対に途切れさせない！」

ブロックしに来た佐久間に對し、風丸は今までにない動きを見せた。

「はあああ！疾風ダッショ!!」

まさに疾風。

風丸の新必殺技は名前に相応しい速さで佐久間を抜き去った。

「少林寺！」

風丸の新必殺技に続き、少林寺も邊見に対し新必殺技を披露した。

「竜巻旋風！」

辺見は少林寺が起こした竜巻旋風に近付けず、少林寺は辺見を抜き去つた。

「豪炎寺さん！」

豪炎寺がボールを受け取ると、後ろから上がつてきた壁山を使い、イナズマ落としの体勢を取つた。

「だあああ！」

なんと、壁山の背後から、ゴールから上がつてきていた円堂が壁山に豪炎寺と共に乗り、イナズマ1号の体勢を作つた。

「絶対に決める！」

「これがイナズマ1号とイナズマ落としの合体技…！」

「イナズマ1号落としいい!!」

金色と青色の雷が空中で輝き、もの凄い威力のシュートが源田に襲いかかる。

「やらせるかあ！」

源田は叫び、両手に力を蓄え、地面上に両手を叩きつけた。

「フルパワー・シールドオオオ！」

源田のパワー・シールドを超えるフルパワー・シールドがイナズマ1号落としを迎撃つ。

「この腕が碎けようと絶対に…！絶対に止める！」

バリバリバリイイーン！

フルパワー・シールドが碎け、イナズマ1号落としがゴールに突き刺さろうとした時だった。

「ピィイイイイ！」

指笛が聞こえた方をみると鬼道がいた。

「バシュ!!

「ぐ…ぐう！」

なんとあの途轍もないシュートを鬼道が蹴り返そうとしているのだ。

「俺達は絶対に負けない！おおおおおつづ！」

「バシイイン！」

ともの凄い音を立て、なんと鬼道はあるのイナズマ1号落としを弾き返した。

「皇帝ペンギン————!!」

鬼道が弾き返したボールに佐久間と寺門が合わせた。

「2号おおおお!!」

円堂がゴールから離れている今、このシユートは絶望的だつた。俺はこの状況を開拓するため、ある方法を思いついた。

「壁山!イナズマ落とし行くぞ!」

「は、はいっス!」

「豪炎寺!イナズマ2号行くぞ!」

「……わかった!」

このまま皇帝ペンギン2号が俺達を通過すれば、負けは確定だ。だから一か八か!、俺達も弾き返すしかない!

「はああああ!」

俺と豪炎寺はお互に声を上げ、腹を上に向けた壁山を踏み台にして、イナズマ2号を放つた。

「地面に叩きつけるぞ、豪炎寺!」

「ああ!」

「イナズマ2号落としいい!!」

ガガガガツ!

「おおおおおつ!」

バシュ!!

俺と豪炎寺の蹴りが何とか、皇帝ペンギン2号を打ち返し、地面にボールを叩きつけた。

「よし!行くぞ豪炎寺!」

「これで決めるぞ!」

打ち返したボールは、地面にぶつかり、高々と空中に浮き上がった。着地した俺と豪炎寺は、最近特訓していた例の技のモーションを起こした。

俺が右回転、豪炎寺が左回転で炎の渦を纏い上昇し、2人でツインシュートを放つた。

「はああー！ファイアトルネードDD!!」

「絶対に止める！フルパワーシールドV2!!」

俺と豪炎寺の新必殺技【ファイアトルネードDD（ダブルドライブ）】は進化したフルパワーシールドを粉碎し、ゴールに突き刺さつた。

——ピ。
!!

『ゴオオオオオオル！雷門イレブンの新必殺技の連続責めでついに、逆転だあああ！』

豪炎寺！

「ああ！決まつたな！」

ノシン

俺と豪炎寺はハイタッチを交わし、拳を合わせた。
俺と豪炎寺は最高のタッグだと俺は思う。豪炎寺となら何でもや
れそうな気がする。

「まだ試合は終わっていない！」

鬼道の一言で帝国学園が動いた

試合終了まであと一分程かも知れない。俺達にとつて楽しくもあ
り、長いようで短い気がする。

佐久間！寺門！

2人は鬼道の言葉にコクリと頷くと皇帝ペンギン2号の体勢を作った。

一ピイイイイイ!

鬼道の周りにベンギンが現れ エリルにベンギンの口が向く

—皇帝ペンギン—

皇帝ペンギンを放つた鬼道は打つた後、少し足を引きずるようにして落としを弾き返した時に痛めたのかかもしれない。だが威力はさつきの皇帝ペンギン2号より強くなつているようにも見える。

鬼道の渾身のシユートに佐久間と寺門が完璧に合わせ、皇帝ペンギン2号が円堂に向かっていく。

「円堂おおおおおお!!」

鬼道が叫び、円堂もスイッチが入ったようにあの構えを起こした。
「絶対に…！絶対に止めるんだあ！」

金色の巨大な手が出現し、皇帝ペンギン2号を迎撃つ。

「ゴッドハンド改!!

ズガガガガガガッ!!

さつきと同じ様に五体のペンギンがゴッドハンドの五本の指を攻撃し、ゴッドハンドがどんどん押され、円堂がゴールに押し込まれていく。

「ぐぐぐっ…！負けるかあああ!!」

円堂は叫ぶとゴッドハンドを放つて、いる右手とは別に左手に力を込めてゴッドハンドに左手を合わせた。

「おおおおおつっ！人も技も1人（1つ）で駄目でも2人（2つ）なら！絶対に止めてみせる…これがゴッドハンドWだああ！」

円堂が発動させたゴッドハンドWはゴッドハンドに2個分の力を加えることで、ゴッドハンドが二倍の大きさになつた。ゴッドハンドWは五本の指を攻撃して、いたペンギン達を吹き飛ばし、そして円堂の両手に皇帝ペンギン2号が収まつた。

バシン!!

円堂の手にボールが収まる音と共に、勝利のホイッスルが鳴り響いた。

ピ　ピ　ピ——!!

『試合終了おおお！お互いに力を出し合い、この激戦を制したのは雷門中だああ！』

「円堂おお！やつたぜえ！ついに全国だあ！」

俺が円堂に叫びながら近付くと、円堂も叫んだ。

「雷藤！ああ！俺達が全国に行けるんだぜ！最高だよな！」

すると俺達のもとに鬼道が歩いてきた。

「いい試合だった。今までのサッカーで最高に楽しかつた」

「俺達もだ鬼道、お前達の分まで全国で勝つてくるからな！」

円堂がそう鬼道に話すと、鬼道は少し首を傾げて話した。

「…円堂もしかしてお前知らないのか？」

「ん？」と円堂が何のことと言ふような顔で鬼道を見ると鬼道が話を続けた。

「前年の全国優勝チームは勝敗関係なく、全国出場権を持っているんだ」

「え？そ、 そうなの？」

円堂が少し驚いたように呟く。

「と言うことは、全国でも帝国学園と戦えるってことだな？」

俺がそう鬼道に話すと、鬼道は笑いながら頷いた。

「次に会うときは、全国大会の優勝を決める決勝戦で会おう」

「ああ！」

円堂が鬼道に手を伸ばし、鬼道もそれを握り返している時、俺は鬼道に質問をした。

「そいいや鬼道、音無とは仲直りしたのか？」

「ああ、無事にな」

「そいかそれは良かつた。ついでに聞きたいんだが、妹の機嫌を良くする方法とか知らないか？うちの妹は怒ると超おつかないんだよ…」俺が妹の怒る姿を想像し、ブルブル震えていると、鬼道は少し後退りしながら呟いた。

「あんな優しそうな妹が、おつかない訳ないだろう？なあ、円堂」

「あ、ああ本当だぜ鬼道」

「そういうと2人して走つて何処かへ行つてしまつた。

「どうしたんだ、あいつら…？」

俺が呟きながら、後ろを向くと、円堂と鬼道が逃げた理由がわかつた。

「誰がおつかないのかな？お兄いちゃん…？」

「え、何の話ですか？心美さん？」

「惚けない！」

「…はい」

「言い訳はたっぷり家で聞いてあげるわ！」

「……はい」

それを見ていた雷門中と帝国学園の選手達は同じことを思つてい
た。

((おつかねええ……))

F F 予選決勝戦 対 帝国学園

激戦の末 雷門中の勝利

2—1 全国出場権獲得

打ち上げ！

俺達はバスの中で、話し合つて雷電軒で打ち上げをする事になった。

——ガラガラガラガラ

「ちよつと待つてろ。すぐ用意する」

響木監督はそう告げると厨房に入った。

「響木監督」

「どうした？」

俺は一番、気にかかつてていた事を話す。

「監督…、今俺の財布はカラ何ですけど…、どうすれば良いですか…」

俺が咳くと、周囲も俺も俺もと騒ぎ始めた。

「ふははは！そんなことを気にしていたのか！今日は特別にタダで食わせてやる！腹一杯食つていけ！」

「本当ですか！響木監督！」

俺達は本当、響木監督に感謝しながら、容赦ない鬼畜な注文を言いまくる。

「すみません、俺、角煮とチャーシューと餃子、炒飯下さい！」

と俺。

我ながらスマーズに言えた。俺はこそとばかりにセレブの食べ物であるチャーシューを頼む。

「俺はチャーシュー麺と餃子で！」

と風丸。

「俺はラーメン定食と餃子とチャーシューでお願いするつス！」

と壁山。

皆が皆、かなり頬み込み響木監督と手伝っている円堂は忙しそうだ。

というか、響木さん、これ完璧に赤字になりますよ。

俺は大好物の角煮を頬張りながら、横で上品にラーメンを啜つていい心美に話し掛けた。

「本当に雷雷軒の飯は美味しいよなあ、毎日でも食べたいよ」

「そだね、響木監督から調理法教えて貰えないかな…」

「まあ、監督も商売だからな、無理だろ」

「ちょっと残念だけどしようがないね、とりあえずお兄ちゃん、全国出場権獲得おめでと！」

「ああ！ありがとう！」

俺と心美が話していると、隣の豪炎寺が話し掛けてきた。

「今回の勝利は雷藤のおかげかもな」

「そんなことないって！皆が力を出し合つたから勝てたんだよ！」

「ふつ…、雷藤らしい返し方だな」

そして注文の嵐が終わり一段落した円堂が話す。

「お前らの合体シユート格好良かつたぜ！二人で打つファイアトルネード…、思い出しただけで鳥肌が立つぜ！」

「まあ、かなり奇跡に近かつたけどな…」

「どういうことだ？」

円堂が俺に聞いてくると俺は本当の事を話す。

「実際あれはまぐれに等しいんだ。練習じや十回打つたら五回成功するかどうか…、なかなかのプレッシャーだったよ」

「あれは本当に掛けだつたな、もつと練習して制度を上げなくてはな」と豪炎寺も言葉を付け足す。

「そうだつたのか…、でもお前らのお陰で勝てたんだ！ありがとう！」

「なあ豪炎寺？」

俺が豪炎寺に話しかけると、豪炎寺も少し苦笑いしながら頷く。

「…」

「…」

豪炎寺も軽く頷く。

円堂は本当にわかつていならしく首を傾げている。

（勝てたのは円堂のお陰なんだよ）

俺は心でそう呟くと何でもないと会話を切った。

「それじゃとにかく今日は皆お疲れ様！各自今度は全国に向けて頑張

ろうぜ！」

最後に俺が打ち上げを締めると、土門たちも「お疲れ」と言い残し解散した。

最後に俺と円堂が残り、俺達も帰ろうとしたとき、戸が開いた。

「すみませんね、今日はもう…うん…？ 浮島…！」

響木監督が浮島と呼んだ人は、前髪が長く目が隠れていて、髭を生やした男性だった。

「忘れられてなかつたか…雷門中が帝国学園を倒したって聞いてな、何だかお前の顔が見たくなつたんだ」

「そうか…」いつがそのサッカー部のキヤップテン、円堂守と副キヤップテンと言つても過言ではない、雷藤真紅だ

「この人まさか…！」

俺が呟くと響木監督が頷き話した。

「ああ、元イナズマイレブンの一人だ」「や、やつぱり！」

と円堂も興奮気味に浮島さんに近付く。

「ずっと憧れてたんです！伝説のイナズマイレブンに！物凄く強くて無敵だつたって！俺ももつともっと強くなりたいんです！」

「…あんまり英雄視するな。やつぱり来るんじやなかつたな」

「え？」

「イナズマイレブンはお前達が言うほど大したものじやない。イナズマイレブンは諦めちまつたんだ。サッカーを」

俺達は何故か、浮島さんに煙たがられているみたいだ。

もしかしたら原因は、鬼瓦刑事から聞いた、40年前のあの事件…、あのバス事故以来の自分達を卑下してしまつてはいるからかもしけない。

「俺たちは、誰一人もう一度立ち上がるとはしなかつた…みんなサッカーを捨てちまつた。表舞台はダメでも、草サッカーでだつて続けることは出来たはずだ。それなのに俺たちは…」

「おじさん…」

俺たちは、浮島さんの言葉に返す言葉がなく、言葉が詰まつた。

「これが伝説の正体だよ、イナズマイレブンはサッカーを捨てた負け犬というわけだ」

俺は喉まで出て来た言葉を、そのまま浮島さんに叫んだ。

「だつたら何でここまで来たんだ？ 浮島さん、あんたまだサッカーが好きなんだろ！？だから響木監督のここに来たんだろ！？だつたらもう一度サッカーを…、捨てちまつたサッカーを取り戻そうとしないのか！？」

「…！ 何を言つて…」

浮島さんの言葉を、響木監督の言葉が遮つた。

「やるぞ浮島、日曜の朝イナズマイレブンは河川敷に集合だ」

「響木…！ 集合つて…」

「雷門中イレブンと試合だ。見せてやろうぜ、伝説を！」

（サッカーを捨てたと言つていたけど、浮島さんはサッカーを捨て切れていない。まだ浮島さんからはサッカーへの情熱を感じるんだ）

響木監督が半ば強引に試合を決定させ、日曜日に元イナズマイレブンとの試合ということになつた。

そして本当に日曜日、伝説のイナズマイレブンが全員揃う事になる。

イナズマイレブン

——日曜日 試合当日

伝説のイナズマイレブンの人たちを見ている俺達は、驚きが隠せないでいた。

「おいおい、生活指導の菅田先生がイナズマイレブンって……、マジかよ……」

俺が呟くと風丸も

「理髪店の髪村さんまで……」

心美が俺に話し掛ける。

「お兄ちゃん、みんな雷門町で見たことのある人たち、ばっかりだよ」「ああ……、流石に驚いたな……」

夏未嬢の執事である、場寅さんが呟いた。

「お嬢様、今日は休暇をいただきます」

流石の夏未嬢も驚きの声を漏らす。

「え……ば、場寅、あなたまで!?」

「夏未嬢の執事の場寅さんまでもがイナズマイレブンだつたとは……」

そんなイナズマイレブンの姿を見た俺たちは、すぐ近くにイナズマイレブンがいた事に驚いた。

そして俺達はポジションに着いた。

F W 雷藤 豪炎寺 染岡

M F 半田 少林寺 宍戸

D F 風丸 壁山 土門 栗松

G K 円堂

F W はお決まりのスリートップだ。

「イナズマイレブンと試合出来るなんて夢みたいだ！」

円堂が興奮気味に話す。

「響木監督とも勝負出来る！くうくう!! 楽しみ！」

俺も興奮が抑えられず、手を握り締めながら叫ぶ。

「みんな！イナズマイレブンの胸を借りるつもりで、この試合全力で挑むぞ！」

「「おおおつつっ！」」

円堂の掛け声に合わせ、俺達も気合いを入れ直した。

ピ―――――!!

そしてついに笛が吹かれた。

「行くぞ！！」

何といナズマイレブンのFWの一人がボールを貰うと共に、豪快なシュートフォームを作った。

「い、いきなりシュート!?」

円堂が驚き、急いで構える。

「おおつっ!!」

(すかつ)

「うごこつ!?だつはつは、参つたなこりや」

FWのおじさんは見事にすつ転び、俺は少し苦笑いを浮かべてしまった。

そして、その後もこういった、珍プレー(?)は幾度も起こつた。俺がボールをもつて駆け上がり、豪炎寺にバスを上げた時の事だった。

「豪炎寺！」

「やらせんぞ！」

場寅さんがインターセプトしようとヘディングした時だった。

(ぼっこつ)

ピ―――――!!

「えつ……？」

俺は思わず、言葉が漏れてしまつた。いや、多分みんなそうだろう。

だつて、場寅さんがクリアしようとしたボールを自分達のゴールに入れてしまつた。つまりはオウンゴールをしたのだから。

「おや…?すまん響木、クリアしようとしたんだが。ははは」

すると、イナズマイレブンの一人が呟いた。

「やつぱしダメかあー、まあこんなもんだよな」

響木監督もその衰えたメンバーの姿を見て呟く。

「……これじゃあ練習にもならんな」

その姿を見た夏末嬢が、思わず本音を呟く。

「何も得るものはないわね……この試合……」

浮島さんも俺達を見ながら話す。

「これで分かつただろう？伝説のイナズマイレブンは、もう存在しないんだ」

俺は納得がいかなかつた。

全力でプレーして、この結果ならまだしも、だけど失敗してもヘラヘラ笑うだけで、必死さが全く伝わつて来ない。俺は思わず叫んだ。「伝説なんて関係ないだろ!? どうしていい加減なプレーばっかりするんだよ！こんな魂の抜けたような試合をして、おじさん達が大好きだつたサッカーに対して、恥ずかしくないのかよ!!」

俺が叫び終わると一時、沈黙が訪れた。

「「…………」」

俺は思わず舌打ちをして、ゴールに向かい走り出した。

「ちつ……！俺が目を覚まさせてやる!!」

俺がドリブルで上がつて行くと、浮島さんがブロックに入つた。

「サッカーを真剣にやらない奴なんかに、俺は止められない!!」

俺は加速すると技を発動させた。

「はあああ！電光石火改!!」

「な、何!?」

俺は一瞬のうちに浮島さんを抜き去るとゴールに向けて更に、走り出した。

「行くぞおおお!!」

「来い雷藤！」

響木監督も構えを起こそうとした。

「構える暇も与えない!!」

俺はボールにかかと落としをし、ボールに強烈な回転を加え、本気の蹴りを放つた。

「おおつつつ!! ライトニングアロオオオー!!」

「…！速い…！？」

ビ

響木監督は俺の渾身のシユートに反応出来ず、ボールはゴールネットを揺らした。

一せーたあ
目を覚ませあんただせ！】

それを聞いた浮島さんは嘆いた

「金で仕事して、いい話が田舎に紹介される」ハハハ
俺のサツカーハ…ははは…」

俺が金丸のアフレードを覚ませようと奮闘したが、逆に余計やる気をなくさせてしまった。だが、その時、響木監督が叫んだ。

「…お前達ッ!!なんだそのザマは!!俺達は伝説のイナズマイレブンなんだ！そしてここにその伝説を夢に描いた子供達がいる！その思いに応えてやろうじやないか、本当のイナズマイレブンとして！」

それを聞いて浮島さんは思うところがあつたのか呟く。

ほ、
本当のイナズマイレブン……？

（やつと目を覚ましたかな？本当のイナズマイレブンがそうじやないことは俺でも解る。サッカーが大好きで、サッカーに全てを注いだ男たち…それがイナズマイレブンな筈だから…！）

俺達はサッカーへの想いを見失っていた…
浮島さんが呟くと響木監督が声を掛ける。

「おお！見せてやるシセ
伝説のイナフマインのサツナードを！」

「凄い気迫だ…、これがイナズマイレブン…！」

俺が呟くと笛が響いた

イナズマイレブンは見違えるような動きで雷門中のパスクワーケを

読み、インターセプトしたボールを前線に送っていく。それを受けたFWは必殺シュートの体勢に入った。

「ふつ！クロスドライブ！」

十字のシユートが円堂を襲い、円堂は熱血パンチで迎え撃つ。

「熱血パンチ!!」

「バシュウウウ!!

「なつ……!!」

さつきの音は熱血パンチで止めた音ではない。ゴールが決まった音だ。

「嘘だろ…、あの熱血パンチが全く通用しなかつたのか…」

俺が驚くのも無理はない。熱血パンチがここまで通用しなかつたのは初めてだ。流石に伝説のFWの選手だけはある。だが、俺たちも黙っちゃいない。

「行け！染岡！」

半田からボールを受け取った、染岡は必殺シユートの体勢に入つた。

「ドラゴンクラツシユ!!」

響木監督は俺たちがよく知っている、あの必殺技の体勢を取る。

「見せてやろう、これが…、元祖ゴッドハンドだッ…!!」

バシーン！

響木監督も本来の力を見せつけ、染岡のドラゴンクラツシユを意図もたやすく止めた。

流石、元祖…。

円堂のゴッドハンド以上じやないか？俺にそう思わせるほど、凄い迫力と威力だった。

その後もイナズマイレブンのパスが繋がっていき、浮島さんにボールが渡つた。

「備流田アアアア!!」

「おおおつつつつ!!」

備流田と呼ばれる、引き締まつた体つきのおじさんがオーバーヘッドの構えを取り、浮島さんがジャンプしつインシユートを放つた。

「炎のオオツ!!」

「風見鶏イイイツ!!」

ズガアアアン!!

浮島さんと備流田さんの強烈な合体シユートが円堂を襲うが、円堂は反応出来ず、あつさりとゴールを奪われた。

「す、すげえ…、なんだ今の技…!?タ、タイム！タイムお願ひします！」

俺たちも集まり、円堂のタイムの理由を伺つた。

「どうした？」

「今日はお手本が目の前にある！あの浮島さんと備流田さんの合体シユート…、【炎の風見鶏】を習得しよう！」

ガヤガヤガヤガヤ

「なんで話に加わらない？」

浮島は影野に話し掛けた。

「俺は控えだし…必殺技には絡めないから。影も薄いから…」

「俺も最初は控えだつた」

「えつ…そなんですか？」

「サッカーはピッチに11人だけで戦っているんじやない、いつでも出られるように準備しておくんだ。体も心もな、いつか必ず存在を示す時が来る」

「…はい！」

「炎の風見鶏はスピードとジャンプ力を考えたら、風丸と豪炎寺かな？」

俺がそう話すと、皆も賛成してくれた。

「決まれば、練習だ！」

そう言つて風丸と豪炎寺は練習を開始した。

「うわっ！」

「くつ…！」

やはり見よう見まねでは、なかなか難しいらしく、あの豪炎寺と風丸ですら苦戦している。

「浮島、もう一度見せてやるか！」

「ああ…！しつかりとな！」

「行くぞ円堂！」

「お願ひします！」

「はあああ！」

二人は完璧なタイミングでツインシュートを放つた。

「炎の風見鶏イイイツ!!」

改めてみても凄い威力だ。

「おおおつつつつ!!ゴッドハンド改イツ！ぐつ！…くつ!?」

グワーシャアアアン!!

「ぐああああーっ!!」

円堂のゴッドハンドは碎け、シユートはゴールに突き刺さった。
「マジかよ…、ゴッドハンドすら完璧に碎くなんて、皇帝ペンギン2号並みの威力…、いやそれ以上かもしれないな…、炎の風見鶏…途轍もないな」

俺が呟くとベンチに座っていた影野が叫んだ。

「そうか…！この技の鍵は2人の距離だよ！2人がボールの中心に、同じ距離・同じスピードで合わせないとダメなんだ！」

「なるほど！」

「そういうことか！」

「よく気づいたな！」

風丸、豪炎寺、円堂は納得したように頷き、影野に笑顔を向けた。

「ほう、気付いたか…」

浮島さんも少し微笑みを浮かべながら呟く。

「今だ！」

「行くぞ！」

豪炎寺がオーバーヘッド、風丸がジャンプをして同時にシユートを放つ。

「炎のオオ！」

「風見鶏イイイツ!!」

バアアアーン!!

風丸と豪炎寺の炎の風見鶏はゴールネットを大きく揺らし、炎の風見鶏を完成させた。

「や、やつたああ！」

円堂が笑顔で風丸たちに向かうと俺たちも笑顔で駆け寄った。

「あの子達なら…伝説なんかじやない、本当のイナズマイレブンになつてくれるかもしねいな」

浮島が響木に話すと

「ああ…！」

響木を頷き、雷藤達を見つめた。

「さあ…次は全国大会だ！・気合い入れて行くぞお!!」

「「おおおつつつ!!」」

円堂の掛け声と共に、今日の貴重な練習試合は終了し、俺たちは次の全国大会に向けて闘志を燃やすのだった。

気持ち

イナズマイレブンとの練習試合の翌日、俺たちはいつも通り練習に励んでいた。

「いくぞ豪炎寺！」

「ああ！」

俺と豪炎寺は炎の渦を巻き、天高く上昇し、ツインシュートを放つ。

「ファイアトルネードDD!!」

ギュオオオン!!

俺たちが放つたシユートは凄まじい音を立て、ゴールに突き刺さった。

「よし！やつたな雷藤！」

「ああ！これで10本中10本ゴールだ！これなら試合でも十分に使えるな！」

「それに炎の風見鶏も今日は百発百中だ！だいぶ攻撃に幅が出来たな！」

風丸も手応えを感じているらしく、今まさに皆、波に乗ってる感じだ。

そこに見知らぬ金髪長髪の少し肌黒の少年が駆けてきた。

「あっ！風丸さまーん！」

「宮坂！久しぶりだなあ、練習頑張ってるか？」

「ん？誰？」

俺が風丸に聞くと

「ああ、陸上部の後輩の宮坂だ」

と答えると、それを見ていた宮坂が

「はい！風丸さんの陸上部の後輩、宮坂って言います。で、ところで風

丸さん、ウチにはいつ戻るんですか？」

「えつ…？」

「やだなあ、サッカー部は助つ人だつて言つてたじやないですか」

「あ…助つ人か、そうだな…」

そういえば風丸は助つ人として、サッカー部にいるんだよな…。最

初からサッカー部にいたのは俺、円堂、染岡、半田、壁山、宍戸、栗松、少林寺で、帝国学園の練習試合の為に、風丸は入つていてくれてたんだ。すつかりサッカー部にいるのが当たり前になつてきて、忘れてたな。

「風丸さん、僕と勝負しませんか？僕も特訓して少しば足が速くなつたんです！」

「いいぜ受けて立とう」

「よしー・ランニング終わり！」

俺がランニングを終え、グラウンドに戻ると、違うところから風丸が走ってきた。

「遅いぞ風丸ー！」

円堂が風丸に叫ぶと

「遅れですよー！」

と軽く手を前に出しながら言つた。

「あの一年に何を言われたんだ？」

豪炎寺が何を思つたのか、不意に風丸に問うが

「大したことじやないさ」

と一言話し、豪炎寺と炎の風見鶏の練習に入つた。

「くつ…はあ…はあ…」

「どうしたんだ？ 風丸、さつきまでは百発百中だつたのに？」

俺が息を切らした、風丸に声を掛けたのは他でもない。中断するまでは百発百中だつた炎の風見鶏が、再び始めると何発試しても、ゴールを遥かに逸れたメチャクチャな方向に飛んでいつていたからだ。

「意外とわかりやすい奴なんだな：陸上部に戻つてきてくれとでも言われたんじやないのか？」

豪炎寺が鋭いことを聞くと、風丸は苦笑いを浮かべるだけで、それを答えようとはしなかつた。

一方その頃、雷門理事長と鬼瓦刑事は影山について話していた。

「イナズマイレブンのデータが消えていた件ですがね…影山の仕業ですよ」

「やはりそうですか…」

「奴はイナズマイレブンのメンバーです、そしてそれを証明するものを全てこの世から消している」

「でもどうしてメンバーのこと？」

「そちらの執事さんを初めとするメンバーが、こつちの質問に応じてくれるようになつたからですよ」

「そうでしたか…」

「影山は中学サッカー協会の副会長だつたそうですね」

「ええ、サッカーに強い思いを抱いていることは知っていました」

「強すぎますよ…サッカーの話をするときの奴の目はゾツとします、なんと言うか：憎しみがこもつていると言うか…」

影山はサッカーそのものを激しい憎悪に抱いている…、40年前、イナズマイレブンを陥れたバスの事故も影山の仕業だろうが、そこまでサッカーを憎んでいる理由は何なんだ…。

知つていく度に、鬼瓦刑事の頭には疑問がよぎるのだつた。

風丸の葛藤

「宮坂：昨日お前にいつ戻るのか聞かれた時、自分がサッカーに夢中になっていたんだって気づかされたよ」

「えっ…」

俺は学校が終わり、帰宅していると川岸で風丸が陸上部の後輩の宮坂と話しているのを見つけた。

「あれからずつと考えてたんだ、俺はどうしてサッカー部にいるんだろうって」

「もういいじゃないですか！サッカー部は部員も増えたんでしょう!? 風丸さんはもう役目を終えましたよ、陸上部に戻ってきてください！」

「戻らなきやいけないとは思っている。でも…まだ戻れない！」

「何を迷ってるんです⁈」

「サッカーには陸上とは違う面白さがあるんだ、俺は一流のプレイヤーと戦つて自分を強くしたい」

「一流のプレイヤーなら陸上だつて！」

「まだまだサッカーには、俺の知らない凄い奴が大勢いるんだよ」

「…陸上はもうどうでもいいみたいだ、風丸さんからそんな言葉を聞くなんて思つてもみませんでしたよ！お願ひします、戻つて来てください！また一緒に走りましょうよ！…どうしてそんなにサッカーに拘るんですか⁈」

「…宮坂、明日から全国大会が始まる。試合を見に来てくれないか？ サッカーをやる俺を見てくれ、それから陸上部に戻るかどうか話をう」

俺は遠目で見ていると、宮坂はしぶしぶ風丸の提案を受け入れたらしく、足早で風丸の下を去つていった。

「…風丸、すまん聞いてしまった」

俺がそう呟きながら、風丸に近付くと

「気にするな、悪いのは俺だ」

と特に俺が聞いていたのを、驚く様子もなく呟いた。

「俺さ、風丸はもうサッカー部のメンバーのつもりでいたんだけど、そういうや助つ人で来てくれてたんだよな」

「円堂や雷藤のメチャクチャな練習と熱さが気に入つてな」

「ははっ、あの時は必死だつたからな」

「初めは本当に助つ人のつもりだつたけど…気がついたらいつもサッカーのことを考えてて、この感じ、陸上を始めた頃みたいで…なんていうか楽しいんだよ」

「…戻るのか？」

「分からぬ…陸上の仲間もお前達も、俺には大事な仲間だ。どつちを選んでも、どつちかを裏切るような気がして…」

「俺は風丸が出した答えがベストだと信じてる。後悔だけはしないよう納得が行くまでいっぱい悩め！例え陸上を選んだとしても、裏切つたとは思わない、それがお前の道だからな」

最後に風丸は少し笑みを浮かべると、そうさせて貰うよと咳き、その場で風丸と別れた。

「ほんとに風丸さん、どうするのかなあ…」

「気にも仕方ないよ、今はとにかく全国一回戦を突破すること！」マネージャーが、少し不安な気持ちを抑えつつ、選手たちを見ているときだつた。

ピリリリリ ピリリリリ

突然、お嬢の携帯が鳴り響いた。

「どうしたの？ 場寅…えつ…!?」

俺たちもその様子を見ていると、どんどんお嬢の顔が蒼白になつていつた。

事情を聞いた俺たちは、お嬢と共に病院に向かつた。

「場寅！ お父様は、お父様は！」

「…あれだけの傷を負いながら、気を失うまでずっとフットボールフロンティアの成功を気にかけておられました…」

「何があつたんですか!?」

俺が場寅さんに聞くと、場寅さんは顔を下に向けたまま話した。
「全国大会の会場となる、フロンティアスタジアムを下見した帰りに事故に遭われたのです…、同乗していた関係者の皆様も傷を負われましたが、最も重いのが旦那様でした…！」

「なつ…!？」

俺は言葉が出ず、お嬢の顔も見ることが出来なかつた。

「う…う…うう…」

俺は泣いているお嬢に対し、一声掛けた。

「お前はお父さんについててやれ、その方がいい氣がするんだ」

「お父さんも目覚めた時、一番最初に夏未さんの顔を見せてあげて」

木野も俺の言葉に続き、お嬢に声をかける。

「そういうことだ。俺たちのことは心配すんな！一回戦は絶対に勝つからな！」

俺がそう叫ぶと、後ろから声が聞こえた。

「威勢がいいな、あんちゃん」

「お、鬼瓦刑事！」

俺が振り向くと、そこには鬼瓦刑事の姿があつた。

「理事長が事故だと聞いてな、気になつて来てみたんだ。だが今のヤツに、手を出せるワケがない…」

確かに今は、影山は刑務所の中…、こんな工作出来ないはず…。

その後、俺たちはその場で解散し、明日の全国大会一回戦に向けて、身体を休めた。

全国大会開始！

『全国サッカーファンの皆さん！ついにこの日を迎えました！熱い激戦を勝ち抜いてきた強豪チームが、日本一の座を賭けてさらなる激闘に挑みます！』

外からは割れんばかりの歓声が聞こえる。今日はついに待ちに待つた全国大会一回戦当日だ。俺たちは入場する前に円陣を組み気合いを入れていた。

「どうどう來たぞ！今日まで色んなことがあつたけど、ここまで來たら思いつきり暴れてやろうぜ！」

円堂がそう叫ぶと、俺に目線を向けた、締めを俺が言えってことらしい。

「フットボールフロンティア予選で戦った奴らの為にも、全力で相手にぶつかって、今日来れなかつたお嬢の為にも、今日の試合…絶対勝つぞ！！」

「「おおっっ！」」

俺たちは皆で声を出した後、入場行進し、俺たちは帝国学園の横に並んだ。そして勿論、その先頭は鬼道だ。

「もう足のケガは大丈夫なのか？」

円堂が鬼道に聞くと

「人のことより自分の心配をしろ、全国は今までとは違うぞ？」

鬼道は少し笑みを浮かべながら俺たちに呴く。それを聞いた俺は「へっ…だから燃えるんだろ？」

と鬼道に言い返した。

「ふふ、俺たちに勝つておきながら、このスタジアムで無様に負けたら許さんからな」

「ああー！帝国こそ負けんなよ！」

その頃…。

ピリリリリ ピリリリリ

鬼瓦刑事の携帯に電話がかかってきていた。

「ん？…ああ俺だ、何だ？…!?誰が許可したツ!!本当に影山は釈放されたのか!?証拠不十分つてどういう事だ!?証拠なら確かにツ!!く…!分かつたもういい!!」

ピツ……

鬼瓦刑事は拳を握り締め咳いた。

「どうなつてやがる…！」

『残る最後の一校！推薦招待校として世宇子（ゼウス）中学の入場になります！』

「世宇子？聞いたことのない中学だな…」

あの鬼道すら、聞いたことのないチームどんなチームなんだ？と俺が思いながら入場を見ていると

「だ：誰もいない!?」

アナウンスで説明した限りだと、現在調整中のことらしい。

その後も開会式は順調に進み、開会式は無事終了した。

「みんな、一回戦の対戦相手は戦国伊賀島中だ！」

円堂が一回戦の対戦相手を俺たちに伝える。

すると音無がパソコンを開き、カタカタと打ち始め、俺たちに伝えた。

「戦国伊賀島中の監督は、忍者の末裔と言われています。秘伝の忍術を使って、選手を鍛えてるという噂です」

「に、忍者つて…、なんでもありだな…」

俺が呟くと豪炎寺も

「忍術で鍛えてる？どういう攻撃をするんだ？」

豪炎寺が音無に聞くが

「それがよく分からなくつて…」

少し不安そうになつた俺たちだが、円堂の一聲で目を覚ました。

「いいさー・どんなチームだつて、サッカーをすることには変わりない、いつも通り真正面からぶつかつていこう！」

「「おお!!」」

俺はその円から離れ、一人静かに押し黙っている風丸のところに向かつた。

「……」

「風丸…、陸上の後輩のことなんだが」

「宮坂のことか…あいつは多分、言葉じや納得しないだろう。だからサッカーで答えを見せてやるつもりなんだ」

「そうか…そう決めたんだな」

「なぜサッカーをやるのか…俺自身が答えを探しているのかもな」

「それじや、その答えを見つけようぜ！思いつきりボールを追いかけ

てさ！」

「ああ！」

俺たちは少し立ち話をしたあと、グラウンドに入りウォーミングアップを始めた。

「豪炎寺こつちだ！」

「雷藤！」

豪炎寺のパスが俺に飛んできて捕ろうとしたときだつた。

「スペアン！」

「えつ…!?」

相手チームの選手が、パスを突然かすめ取り、ボールを奪つた。

「誰だ！」

「お前に名乗る名前はない！」

「んだと?!」

「雷藤真紅、俺と勝負しろ！・噂には聞いてるぞ、閃光の雷藤つて言われるほどの、シユートのスピードと足の速さを持つてるらしいな！」

「せ、閃光の雷藤つて…、初耳なんですけど…」

「俺は戦国伊賀島の霧隠才次だ！」

「お、思いつきり名乗つてるじゃねえか…」

「俺は足には自信があるんだ、どつちが上か決めようじやないか？こ

「からドリブルで往復して速さを競うんだ！」

「断る、目障りだ」

俺は聞くやいなや即答で、返答した。

「な、なに!?逃げるのか腰抜けめ！」

「なんでわざわざ今から対戦する相手に、個人能力のデータを提供しなくちやいけないんだ」

「やはり俺に負けるのが怖いんだな、この腰抜け！」

「なんとでも言え、試合が終わつたら…」

俺が少しここで間を空けて、冷たい言葉で呟く。

「いくらでも遊んでやるからよ…」

実は結構切れてた俺は最後に、怒りの感情を込めつつ霧隠に呟いた。

「ひつ……!?

「冷静になれよ雷藤」

風丸がその後も何か言いかけたが、観客席を見た瞬間、顔が変わった。

「…雷藤と同じくらい足が速いのは俺だ…、俺がやる！」

「おい風丸、相手にすんなつて」

俺がそう話すと風丸は観客席の方に目を移した。俺もそこを見る

とそこには風丸の陸上部の後輩…宮坂の姿があつた。

「そういうことか…」

俺は状況を理解し後ろに下がつた。

「誰だお前は?」

「お前に名乗る名前は無い」

風丸はさつき俺が霧隠に言われた台詞をそつくりそのまま霧隠に返した。

「なつ…面白い、叩きのめしてやるよ！」

「用意はいいな風丸？」

「ああ…」

「それじゃ始めるぞ」

俺がカウントダウンを数える。

「3、2、1、GO！」

ドドドドドドドド!!

両者ほぼ互角のスピードで火花を切ったドリブルレースだが、やはりサツカーの経験の差か、少しづつ風丸は劣勢に陥っていた。

「く…！」

「は、速い！風丸さんを抜き去る奴がいるなんて…これがサツカーのスピードなのか！」

宮坂が声を上げ驚いているが、

風丸も負けていない。

風丸はギアを上げ、そのまま加速していく。

「言うだけのことはあるなあ！だけど足が速いだけじゃダメだぜ、サツカーは！」

バコオツ！

「な!?」

なんと霧隠は風丸のボールを蹴り、そしてそのボールでドリブルしていくというふざけた行為を行つた。それに翻弄された風丸は霧隠に遅れを取つてしまふ。

「ふつ、ふつ、ふつ、ふつ…！」

しかしこのバカげた行為が、風丸のギアをさらに上げさせた。まるで疾風のように加速していく風丸は、霧隠との差を急激に縮め、完全に霧隠を捉えた…、その時。

スパパン!!

「勝手な行為は慎め霧隠」

「サツカーは個人競技にあらず、チーム同士で競うものだ」

二人の対決を遮つたのは、またしても伊賀島中の選手だった。

「ちえ、分かつたよ。名前覚えとくぜ？えーと…藤丸くん？」

「…風丸だ！」

霧隠は風丸を軽く見ていくと、他の仲間と共に戻つていった。

——そして

『雷門中学対戦国伊賀島中学！さあキックオフだ！』
全国大会一回戦が始まった。

戦国伊賀島中の忍術！

雷門中対戦国伊賀島中の試合は

F W 雷藤 豪炎寺 染岡

M F 少林寺 半田 マツクス

D F 風丸 壁山 土門 栗松

G K 円堂

というスタメンだ。

キックオフは俺たちから始ましたが、見たことのない技によつて苦戦していた。

「染岡！」

「おう！」

俺が出したパスが染岡に渡り、ゴールに向かうが相手のD F 技によつて止められる。

「伊賀流忍法・四股踏み！」

ブオオオ！

と俺たちに強烈な風が襲いかかつた。

「くっ…！」

俺たちが怯んだ瞬間

相手がボールを奪い前線に蹴り上げる。

そのボールを受けた選手は

ゴールに一直線に上がってきた。

それを止めるにいった半田も

伊賀島中の忍法によつて交わされてしまった。

「伊賀島流忍法・残像の術！」

「なつ!?」

半田がブロックしに行つた選手は、残像を残し半田を抜き去つた。

「行かせるか！」

隙を見た土門がさらにブロックしに行くがまたしても伊賀島流忍

法が炸裂する。

「伊賀島流忍法・分身フェイント！」

土門も相手のフェイントに反応することが出来ず抜かれてしまつた。

—せいツ!

相手が放つたシユートは円堂目掛けて飛んでいく。
「はああ！熱血パンチ改！」

バシイ!

ノシ一

と音を立てて弾き返したボルルは風丸に渡る

窓の外は、試合の流れが完全に

「くそ…、上手く噛み合わないな…」
俺たちだから試合の流れは完全にあっちの流れだ

俺が呟くと風丸は

高達ギリズレで前線に向かって逃げ出す風景そのものが

賀島流忍法が発動される。

伊賀島源忍法・景続いの術！

シニットと影を捕らえ、影を捕らえられたる風呂はボトルを捕らえてしまう。そして戦国伊賀島中に絶好のシュートチャンスを与えてしまう。

雲霧隱

卷之二

ホーリー・ナビエイの霊廟が、アーヴィングの死後、再び開かれた。

戦国伊賀島の必殺シユリトが

「おおつ！熱血パンチ改イイ！」

人二

円堂の進化した熱血パンチも破られ、無情にもゴールにシユートが突き刺さつた。

ビ

『ゴオール！雷門中対戦国伊賀島中の先制点は霧隠のシユートで戦国伊賀島中が先制です！』

俺は倒れた円堂を見て少し不安を抱いた。

(嫌な倒れ方をした気がするな：試合に影響しなければいいんだが
⋮)

その後も戦国伊賀島の攻めに俺たちは苦戦したが、円堂が何とか防
ぎきり、前半は1失点で終えた。

「思つた以上に厄介だな：何をして来るかわからないな」

俺が話すとそれに続きマックスも呟く。

「流石に全国大会の相手は一筋縄じゃいかないってことかな」

「だがここで皆を励ますのは、やはり円堂だ。」

「絶対に突破口はあるさ！一筋縄でダメなら二筋縄、それでもダメな
ら三筋縄だ！」

円堂の言葉は元気になるが、今回は無理をしている気がした。

「…円堂」

俺はそこに置いてあつたドリンクを円堂に軽く投げる。

円堂はドリンクを捕つたものの、すぐにドリンクを落とした。

「う…くつ…！」

「やつぱりな…、円堂お前さつき倒れた時手首痛めただろ？」

「し、心配すんなつて…、左手でも絶対にゴールは許さない！」

「円堂…」

俺はそれ以上、何も円堂には言わなかつた。こんな状態だが雷門の
ゴールを託せるのは円堂しかいないのでから。

そして後半も始まろうとしていた。

閃光の雷藤！疾風の風丸！

七

そして始まつた試合後半
フォーメーションを変えた。
手を痛めた巴堂を大ハートするためには

正義堂

卷之三

國朝詩人集

D F が

そのDFは円堂をカバーするために、風丸や

てシユートを止めまくる。

「御力せが縦文は二ノノは語るだい！」

特に足が速い、俺と風丸は徹底してゴールに相手を近付けない。

官反も興奮氣味を忘ぬる。

そんな奄や風丸こ焼いて土器

その仕事や戦力に續いて二門や戦力がせDE陣も奮起し決戦の守りで戦国伊賀島に決定的なチャンスを与えない。

しかしここで戦国伊賀島は、なんと8人の選手を使つた大技を発

動した。

伊賀島流蹴球戦術・円月の陣！」

工才才才才才才才才才才
!!

な
なんたあれば……！

「「ぐああああああああ!!」

8人が作つた陣形は、強力な砂嵐が周りを覆つて俺たち雷門イレブンをなぎ倒していく。この壮絶なパワーに俺たちは太刀打ち出来ず、ついにゴール前まで霧隠が上がってきた。

「しまつた…!? 壁山！」

そのシュートに壁山が立ちふさがり叫んだ。

「絶対に通さないッスううううつ!!おおおおお!!ザ・ウォール!!」

巨大な壁を発生させて、壁山はシュートを弾き返した。まさに壁山にふさわしい技だ。

「くそっ…まだだ！食らえエツ！つちだるま！」

しかし、こぼれ球を拾ったのはまたも霧隠だつた。今度は伊賀島流忍法・つちだるまでゴールを狙いに来た。

「ゴッドハンド改イイ!!」

円堂もそれをゴッドハンドで迎え撃つ。

ガガガガガガガツ!!

「…つううつ!!」

グワシャーン!!

「う…ぐわあああ!!」

しかし、右手の負傷でゴッドハンドの本来のパワーを出し切れず、つちだるまの威力に耐えかねたゴッドハンドは粉々に碎けた。2点目を取られたと思ったその時…

「うおおおおおーつ!!」

シユートがゴールに突き刺さる前に体で風丸が止めた。

「ナイス風丸！」

風丸は俺を見て頷くと前を向く。

（ひとつボールから俺の気持ちがみんなに伝わる…！俺にもみんなの気持ちが分かる…痛みも、喜びも…だから俺は…サッカーが大好きなんだ!!）

「風丸さんがなぜ試合を見ててくれと言つたのか分かる…ここが、風丸さんの走る場所なんだ…！」

宮坂も試合をする風丸に対し、何故風丸がここにいるのかを理解しているようだ。

風丸の中では「自分がなぜサッカーをやるのか」という探していた答えがはつきりと分かつた。11人の仲間と一心同体になる瞬間…それが風丸にとって何より心地良く、サッカーに惹かれた原因だつたのだろう。一切の迷いを振り切った風丸は、戦国伊賀島を寄せ

付けないスピードで一気に相手ファイールドを切り裂いていく。

「行くぞ！豪炎寺!!」

「おうっ!!」

「炎のオツ!!風見鶏イイツ!!」

炎の風見鶏は相手キーパーを吹き飛ばして、俺たちは念願の同点ゴールを突き刺した。1対1…！試合は振り出しに戻った。

伊賀島流忍法のドリブルで手こずっていた俺たちだが、ついにここで捉えた。

「伊賀島流忍法・分身フェイント！」

俺は冷静だつた。

（分身した瞬間は一瞬動きが止まる…、そこが分身フェイントの…）

「弱点だあ!!サンダーバインドオオ!!」

俺はもの凄い速さでボールを奪い去り、風丸と共に駆け上がる。

「染岡！行くぞオオ！」

「ああ！見せてやろうぜ！俺と雷藤、風丸の合体シユートを！」

ボールを受け取った染岡はドラゴンクラッシュの構えを起こした。その間に俺と風丸はトップスピードで駆け上がっていく。

「うおおおつつ!!ドラゴンズ——!!」

俺と風丸は染岡が放ったドラゴンクラッシュに最高速で勢いを増した蹴りでツインシユートを撃ち込む。

「ウインドオオオオツ!!」

あまりの速さに相手キーパーは反応が遅れ、ゴールに吹き飛ばされた。

ピ―――――!!

『ゴオオオール!!後半終了目前！勝ち越し点を奪つたのは雷門イレブンだああ!!』

「よつしやああ!!」

そしてその後すぐに試合終了のホイッスルが鳴り響き、俺たちは勝利を掴んだ。

「宮坂・俺、サッカーが大好きなんだ」

「はい・・・ボールを追う姿から伝わりました。風丸さんが走る場所は、今はこのフィールドなんだって」

「陸上のトラックを走るのは楽しい・・・でもサッカーには、自分一人では見られない世界がある・・・俺はイレブンの、イレブンは俺の感じるものを感じる・・・今はそれを追いかけてみたいんだ」

「はい・・・フィールドを駆ける風丸さんは格好いいです！僕、応援しますから！」

風丸と宮坂が和解している頃、俺と円堂は病院に来ていた。

「よう！」

「理事長はどうだ？お嬢？」

円堂と俺がお嬢に聞くと

「問題ないわ・・・あつ・・・、それは・・・!」

お嬢は円堂の手に気付き話す。

「あ、これ？今日の試合でちよつとね、だけど勝つたぜ！一回戦突破だ！」

「本当？やつたわね！ならばそれは名譽の負傷ということころかしら」

「でも大したことなくて良かつたよな、2、3日したら動かせるつてさ」

俺も言葉を付け足す。

「良かつたわ、我がチームのキーパーはあなた一人なんですからね。『無事これ名馬』ということわざもあることだし・・・」

これをどういう意味と悟ったのか、円堂が少しムカツとしたように叫ぶ。

「・・・め、名馬？誰が馬だよ!？」

「いやいや円堂、そういう意味じやないからな

「でも馬つて言つただろ!?言つただろ!?」

「いや、馬に喩えてるだけだから」

「ほらやつぱり馬だと思つてゐるじゃん！」

「分からぬ人ね!!」

「分かつてゐるよ!? 馬つてあの走る馬のことだろ!?」

「まつたくあなたは下に鹿の字が付く馬だわね！」

「へつ? 下に鹿:し、しかうま? それなんて読むんだよ!」

「分からなくて結構よ! 馬鹿!」

「円堂:、お前ここまで馬鹿だつたのか:」

俺とお嬢はお互にあきれ笑いを浮かべるのだつた。

F F 全国大会 一回戦

雷門中 対 戦國伊賀島中

2対1で雷門中の勝利

帝国学園の敗北

俺達は迫つてくる二回戦の戦いに向けてイナビカリ修練場で特訓に励んでいた。

すると、音無が何か慌てたように走ってきた。その場に居た俺、円堂、豪炎寺は音無に顔を向けた。そして音無は息を切らしながら、俺達の前に止まると話を始めた。

「てつ、帝国学園が…！」

「初戦突破か？ よし！」

円堂はそう叫ぶと俺と豪炎寺にハイタッチをした。

「10対0で…」

「相変わらず強いな帝国は…！ こりやまた決勝戦で戦うのが楽しみだぜ！」

俺も帝国の勝利を確信してガッツポーズを作る。

「世宇子（ゼウス）中に…完敗しました…！」

それを聞いた俺達は、驚きと共に嘘だという考えがよぎった。

「う…嘘だろ音無…！」

最初に口を開いたのは円堂だった。

俺も円堂に続き話す。

「それに10対0だつて…？あの帝国学園が一点も取れない訳がない！ ガセじやないのか？あの帝国学園が初戦で負けるわけねえだろ！」

音無は顔を下に向けると呟いた。

「見たことのない技が次々決まって…帝国が手も足も出なかつたそうです…」

すると円堂が叫んだ。

「あの帝国が…！ そんなわけない！ あいつらの強さは戦つた俺たちがよく知ってる！ あいつら本気で強いんだ…！ 鬼道がいるんだぞ！」

「お兄ちゃん出なかつたんです…」

「えつ…」

「お兄ちゃん、うちとの試合で怪我していたみたいで…相手はノーマークの学校だつたから、大事をとつて控えに回つていたんですけど…そ

したら相手が圧倒的で…傷を押してお兄ちゃんが出ようとした時は、もう…」

「ぐつ…そんなこと絶対ありえねえ！」

ダダダダダダツツ！

（あいつらが負けるなんて…帝国が1点も取れないなんて…！）

円堂はいてもたつてもいられず、帝国学園に向かつて走り出した。

俺も円堂を追いかけ帝国学園に辿り着いた。

そして俺は、ただ一人グラウンドで呆然に立ち尽くす鬼道を捉えた。

「鬼道っ！」

俺と円堂は同じタイミングで鬼道に叫んだ。

「よう、円堂、雷藤…笑いに来たのか…」

俺は絶句してしまった。

もはや絶望のあまり薄ら笑いを浮かべていた。まるでいつもの鬼道とは全く別人ではないかと疑ってしまうほど、その姿は鬼道とは思えないほど、貧弱なものに感じた。

そんな鬼道を見ていられない円堂は、気合いを入れてやろうと鬼道ヘボールを蹴るが…。

ばかっ

「…」

「鬼道…どうした、蹴り返せよ…！」

棒立ちのままボールを食らった鬼道は、よたよたと倒れそのまましりもちをついた。

そしてふらふら立ち上がった鬼道は、ボールを見ているうちにまたあの悔しさがこみ上げて来てしまったのだろう…、鬼道は震えた声で呟く。

「……ぐ…つ…！40年間無敗だった帝国学園…俺たちは、その伝説を終わらせたんだ…ただひたすら勝つことだけを考えて戦い続けてきた…それが、ボールに触れる前に試合が終わっていたんだ…！」

「…」

「今までずっと、寝ても覚めてもサッカーのことしか考えてこなかつ

た……それが、こんな形で終わるなんてな……俺のサッカーは終わつた
んだ』

俺は鬼道も見ると叫んだ。

「俺のサッカーは終わつたんだ？ そんなことはない……！ お前が見捨て
ない限り、サッカーはお前のものだ！ 鬼道ツ!!」

俺はフワツとボールを浮かせ、回し蹴りを放つ。

「サンダーイヤノンツ！」

「……つ？」

バコオオオオオン！

鬼道はシユートを足で止めにいつた。俺が力を抑えていたことも
あり、鬼道は見事俺に蹴り返した。

「なつ？ 鬼道、サッカーはお前から離れなれないってさ！」

「……俺にはサッカーしかないんだな」

そして俺たちは鬼道に誘われ

鬼道の家にお邪魔することになつた。

鬼道の過去

「うおーすっげえすっげえ！こんな広い部屋に一人かよ！」

俺は騒いでいる円堂を軽く流し、気になつたあるものを手に取る。

「ん？ すぐ古いサッカー雑誌だな…」

すると鬼道は俺に振り向き話す。

「まあな…俺がなんでサッカーをやり始めたか知つていてるか？」

俺と円堂が首を横に振ると、鬼道は真剣な顔でそして、少し寂しそうな顔で話を始めた。

「俺の両親、飛行機事故で死んだんだ…父さんも母さんも海外勤務が多くてさ：俺と春奈は2人つきりだつた。そしてあの事故で本当に2人つきりになつちまつた、家族の写真一枚も残つていない：小さかつたから父さんや母さんの記憶もほとんどない…残つたのはこれだけ、これだけが父さんと俺を繋ぐ絆なんだ。だからサッカーを始めた…ボールを蹴れば父さんと一緒にいるような気がした」

「お前も同じだつたんだなあ…俺もさ、死んだじいちゃんがすつごい選手で…そのじいちゃんの特訓ノートなんかを読んで、俺もボールを蹴り始めたんだよ」

円堂が呟くと俺も口を開く。

「俺も両親が死んで、俺は心に深い穴が空いていた時期があつた。その穴を塞いでくれたのが、サッカー、そして心美なんだ。本当に感謝しているよ」

俺たちの話を聞くと鬼道は呟く。

「…お前たちと同じか…」

「なんだよ、嫌なのかな？」

円堂が鬼道に話すと鬼道は

「いや…そうじゃない」

と呟き、俺たちは軽い食事もご馳走になり、鬼道の家を後にした。

そしてその頃。

「お父様の容態はどう?」

「はい、安定しております。ああ：それから旦那様からのご伝言です」
その頃、夏未は入院中の理事長に変わり学校で仕事に励んでいた。
そんな夏美に理事長からなにやら手紙が届けられ、目を通した夏未は驚いた。

「な、何よこれ…」

その文章とは

『——というわけでバスは横転した。しかしイナズマイレブンの選手達は這つてでも試合に出ようとした…だがその事態を見透かしていたように、大会会場には一本の電話がかかってきた：「試合には参加しません」と…それは影山からの電話だつた。他にもある、御影専農中学を覚えているだろうか？あの中学のバックにも彼がいたことが確認されている。夏未、影山は中学サッカー協会副会長とはいえ、何を考えているか分からない…表舞台から消えても十分注意して欲しい』

そこに書かれていたのは、理事長が知っている限りの影山の悪事をまとめたものであつた：

そしてそういうしているうちに、雷門中が二回戦に戦う日は間近に迫つてきていた。おなじみの光景になつてきた音無が集めた相手校の情報をもとに、俺たちは部室で対策を練つていた。

「みんな、全国大会二回戦の相手は千羽山中だ！」

「千羽山中は山々に囲まれ、大自然に鍛えられた選手達がいます。彼らは無限の壁と呼ばれる鉄壁のデイフェンスを誇つていて、未だかつて得点を許していません」

俺は驚き質問する。

「それは全国大会まで1点も許していないと言ふことか？」

「ええ、1点たりとも…シユート力には難点がありますが、この鉄壁のデイフェンスでここまで勝ち抜いて來たんです」

鉄壁か…俺たちFW陣が頑張らないとな…、俺がそんなことを思つ

ていると、円堂が叫ぶ。

「その無限の壁とかいう鉄壁のディフェンスを破ればいいんだな？
だったらこつちはダイヤモンドの攻めをすればいいんだよ！」

俺たち全員が頭に？を浮かばせながら呟く。

「「は、はあ…？」」

それでも勢いが止まらない円堂は、訳の分からぬ演説を続ける。
「鉄壁のディフェンスが崩れるまで攻める！それがダイヤモンドの攻
めだ！そのためには特訓だああ！」

「「お、おお…？」」

俺たちは円堂の勢いに釣られ少し、気の抜けた返事を返した。

「宍戸！パス！」

（1…2…3…）

宍戸はいつものタイミングで風丸にパスを出す。

バシッ

「うわっ！」

「す、すいません！いつもみたいにパスしたつもり何ですけど」

しかし、風丸は宍戸のパスを置き去りにしてしまう。

「栗松っ！」

俺は栗松にいつもと同じようにパスを出す。

グオオオ！

「どわーーーっ！」

「あ、あれ？もしかして俺のボール、スピード違反だつた？」

しかし俺が放ったパスは威力が強すぎて栗松は驚きのあまり涙目
になつてている。

「ドラゴンツ――！」

「トルネードオオ!!」

染岡と豪炎寺の合体ショート、ドラゴントルネードが円堂が守る

ゴールに向かう。

ギュユーン！　スウウ：

しかしドラゴントルネードは途中で威力を失い、円堂の手に簡単に
収まる。

「何よ、みんなたるんでるわね」

お嬢が俺たちの練習を見ながら呟く。

「みんな変だわ…それにドラゴントルネードが決まらないなんて」

木野が心配そうに呟くが、お嬢は

「体がなまつてるんだわ」

言葉を一言呟くだけだ。

「そんなことないですよ、みんな動きは格段に速くなっています」

音無がお嬢に意見を述べるが、終いにはお嬢はまた呟く。

「じゃあ気持ちがなまつてるんだわ。イナビカリ修練場で特訓かし
ら」

お嬢が呟いていると、それを横で見ていた響木監督が呟いた。

「修練場のせいだ」

「え…？どういう意味です？」

監督の予想外の言葉に驚いた木野は監督に意味を聞く。

「個人的な技術や体力は格段に上がったが、身体能力が向上してもそ
れを感じとして捉えていない。相手の身体能力がどれくらい上がっ
たかが感覚的に分からぬから、タイミングが合わせられない」

「そんな…能力の向上が裏目に出るなんて…」

監督は雷藤たちの異変の原因に気付いていた。全員がイナビカリ
修練場で身体能力が向上し、動きが良くなりすぎた為に、今までの連
携が出来なくなっていると言うことに…

「はーい、ちょっと休憩！」

疲れていた俺たちに木野の声が響きわたる。

「スポーツドリンクで水分補給！」

「レモンのハチミツ漬けもあるわ」

音無がドリンクを持ってきて、お嬢がレモンのハチミツ漬けを持つてくる。しかも手作りとのことだ。

俺たちは手作りのレモンのハチミツ漬けを食べながら、ドリンクで喉を潤す。

「夏末さん、いつの間にハチミツ漬けなんて作ったの？」

「ヒマだつたのよ」

「やつぱりみんなのことが気になる？」

「…負けてうちの評判を落とされると困るだけよ」

何か話をしていたお嬢たちのところに俺は近付きお嬢に話しかける。

「お嬢、レモンのハチミツ漬け美味かつたぜ！またよろしくな！」

「ほ、本当？ん、んん！ヒマだつたらまた作つてあげるわ」

お嬢は一瞬嬉しそうな顔をしたあと、少し照れたようにそっぽを向いて話す。

「ああ、楽しみにしてるぜ」

俺はその場を離れ、練習に向かった。

「夏末さん、私たちも次の準備しましようか」

「そうね、そうしましょう」

木野とお嬢、音無はマネージャーの仕事をテキパキこなすのだった。

気持ちのぶつけ合い

「円堂、本気で無限の壁を突き崩す氣か？」

俺が円堂に聞くと、円堂は

「ああ！正面からズバーンとな！」

と俺に向かい話す。

「今俺たちに出来たらだけどな」

と豪炎寺も呟く。

「…大丈夫さ、俺たちにはファイアトルネードDDも炎の風見鶏だつてある！」

俺はドラゴントルネードやイナズマ2号すら決めれない状態の為、不安な気持ちが隠せなかつた。そんな時、木野が土門に向かい話し掛けた。

「土門君、トライペガサスだつたら？」

「おお！トライペガサスか、あれなら！」

話についていけない俺たちだが、円堂が土門に質問する。

「なに？それどんな技？」

すると土門は口を開く。

「一之瀬と俺と、もう一人の奴の技だつたんだ」

そしてそのトライペガサスという技を木野は俺たちに習得を勧める。だが二回戦までに習得出来るのだろうか：

「3人技かあ…！なあ、その一之瀬つてどんな奴？」

円堂は俺たちの知らない一之瀬について木野たちに聞く。

「私と土門君がアメリカに留学してた時の友達。サッカーすつごく上手かつたんだ」

「ああ、俺たちのチームをアメリカ少年リーグ優勝に導いた立役者だつたんだ。天才だつたよ！フィールドの魔術師つて呼ばれてた」

土門が天才と言い切るほどの才能か…。俺は土門に聞いてみる。

「フィールドの魔術師か…会つてみたいな。なあ、その一之瀬はどこにいるんだ？」

俺がそう土門に聞くと、土門は空に指を指した。

「あ…」

俺は聞いちやいけないことを聞いたみたいだ。

「死んじまつた」

淡々と答える土門だったが、その表情はどこか寂しげだ。
「ねえ土門君、あなたならあの技をみんなに教えること出来るんじゃ
ない？」

そして木野がトライペガサスを俺たちに教えることが出来るん
じゃないのかと土門に聞くが
「かもなあ…うーん」

と曖昧な返事が返ってくる。

「……」

「うーーーん」

「……」

「うーーーん」

「早く教えろよ!?」

ついに我慢できなくなつた円堂が叫ぶ。

「言葉にするのムズいんだよお」

土門の口から説明するには難しいらしく、土門はうーんと呟くだけ
だ。これは短期間じや無理そうだな…

「ふむふむ、ふむふむ、ふむふ…ん？あつ！」

その時グラウンドを見回しメモを取つていた音無が何かに気がつ
き、駆け出して校門の外へ出て行く。

「お兄ちゃん！何よコソコソして、もうそんなことしなくたつていい
じやない」

そこにいたのは鬼道だった。

「今俺には、あいつらが眩しすぎるんだよ
「あ…お兄ちゃん」

音無と鬼道はそのまま河川敷に向かつた。

「聞いたよ、世宇子（ゼウス）中のこと……残念だつたね」

「残念……残念なんてものじゃない……俺の目の前で仲間があんなことに……こんな悔しいことがあるか……！」

そんな時2人に向けて凄まじいシュートが飛んできた。

グオオオオ！

「？」

鬼道は突如として飛んできたボールを反射的に足で止めにいく。

「く……っ!!」

「こんなボールを蹴ることが出来る奴は……雷藤か!!」

そのシュートとは俺のサンダーイヤノンだった。俺は密かに2人のあとを付けて来ていたのだ。

「雷藤先輩!! お兄ちゃんは別にスペイをしていたわけじゃないんです！ 本當です！」

「……お兄ちゃんか……来い!!」

俺は鬼道を誘い、河川敷の中央に立つと鬼道との本氣のボールの蹴り合いを始めた。

「鬼道ッ！ そんなに悔しいか!!」

「悔しいさ……世宇子（ゼウス）中を俺は倒したいッ!!」

「だつたらやれよ!!」

「無理だ!! 帝国は……フットボールフロンティアから……敗北したつ……！」

夕日の河川敷でボールを蹴り合いお互いの気持ちをぶつける俺たちだった。鬼道は、なんとしても世宇子（ゼウス）と戦つて、仲間の仇を取りたいと訴える。

「自分から負けを認めるのか！ 鬼道オオオーッ!!」

俺はボールに凄まじい縦回転を加え蹴る。

「ライトニングアロオオー!!」

ボールは鬼道の横を通りすぎ、ぶつかった土手にはクレータを作り上げ、ボールを破裂させる。

俺は一呼吸おいた後、鬼道に話し掛けた。

「ひとつだけ方法がある…鬼道は円堂を正面からしか見たことがないだろう？あいつに背中を任せた氣はないか」

「なつ…」

俺は世宇子（ゼウス）と戦う方法を鬼道に言い終わった後、その場をあとにした。

どよどよどよ

「そろそろ始めませんか？」

審判が響木監督に向かい話す。

「いいや、まだだ。もう一人来る」

しかし響木監督は試合を始めようとせず、じつと誰かを待つている。

「監督、いい加減にしてください！」

「もう一人もう一人つて、全員揃つてるじゃないですか！」

流石の風丸と半田も響木監督に抗議をする。

「いいですか？大会規定により、あと3分以内にフィールドに出ないと試合放棄とみなされます」

「えええっ！」

審判の言葉に心美が戸惑う。

「監督どうしたんです、誰を待つてるっていうんです！」

風丸が叫ぶ。

「お兄ちゃん副キヤプテンみたいなものでしょ、監督に何か言つてよお！」

「良いから待つてろ…」

「もおつ！試合放棄になっちゃうよ…！」

そしてあと一分になつた。

「試合放棄なんて勘弁してください！」

「来る来るつて誰が来るんですか⁈」

「もう誰も来ませんよ、全員揃つてるんですよ⁈」

「なんで試合を始めないんですか監督うつ！」

チームからいろんな声が響きわたる。

そんななか何か音が響いた。

スタ…スタ…スタ…スタ…

「来たか…」

俺はそう呟き、音がする方に振り向く。

そこに現れたのは赤いマントから青いマントに変え雷門中のユニ
フォームを身にまとつた鬼道の姿だつた…。

鬼道の実力！千羽山戦前編！

『き、鬼道!?間違いありません！帝国学園のキャプテン鬼道です！』
解説が驚いたように実況すると、観客達がざわめき始めた。

「どうぞよどよどよ

「どうなつてんだ!?」

「そんなのあり!?」

「出来るのかそんなこと!?」

観客はまさかの帝国学園の鬼道の登場で大揺れに揺れるスタジアム。そんなとき解説の声が響いた。

『えー、しばしお待ちを…あ、ありました！大会規定第64条第2項！プレイヤーは試合開始前に転入手続きを完了していれば、大会中でのチーム移籍は…可能である!!』

「俺は信じていた、絶対に来てくれるってな！」

俺が鬼道に向かい話すと、皆も寄ってくる。

「鬼道…！俺には分かつてたぜ、お前があのまま諦めるような奴じやないってことは！」

円堂が鬼道に話すと、鬼道は

「あのままでは引き下がれない…！世宇子（ゼウス）には必ずリベンジする!!」

「な、なんて執念だ…！」

その鬼道の言葉を聞いて、染岡も呟いた。

「鬼道さんがいれば、必殺技がなくても千羽山の守りを崩せるかも…！よおおおし！頑張るぞおおおつ！」

宍戸に今まで以上に気合いが入つて、宍戸が叫ぶと響木監督が宍戸に声をかけた。

「宍戸、お前はベンチだ」

「え…？」

「代わりに鬼道に入る」

「え…あ…お、俺です、か…」

俺もまさか宍戸が下ろされることは思っていなかつた。俺が宍戸を

見るとガツクリしたように肩を落としている。

「……」

そんななか、半田が複雑そうに宍戸を見ていたのが気になつたが、時間だ。

『さあ雷門ボールでキックオフだ!』

今回のスタメンは以上だ。

F W	雷藤	染岡	豪炎寺
M F	鬼道	マックス	半田
D F	壁山	風丸	栗松
G K	円堂		

鬼道が加わったことで、宍戸が抜けていまつたが、確かにこのメンバーが今の時点では最高メンバーだろう。

ピ――!!

しかし、俺たちの試合(ゲーム)の出だしは最悪だつた。

「染岡あつ!」

半田が出したパスは弱く、染岡が上手く取ることが出来ない。
「ぐつ：弱い!半田、もつと強くだ!」

その後も

「栗松!」

「ひい!? 大きすぎるのでヤンス!」

「わつと…!」

「うわつ!?

『どうした雷門!まつたくバスが通らないぞ!?』

俺たちは勝手に自滅しまくり、攻撃が成り立たない。ボールを持たない守備は今まで通り出来るが、攻撃が成り立つていなけりや意味がない。

「……」

流石の鬼道も無言で見つめる。

しかし鬼道には考えがあつた。

「勝負は後半…前半はゆつくり円堂達の力を見極めてくれ」

前日の夜、雷雷軒に招かれた鬼道は監督から今日の試合、千羽山戦の試合方針を聞かされていた。

「前半…？ふん、10分で充分だ！」

監督の言葉とは裏腹に鬼道は、10分で充分と断言していた。

「栗松うつ！」

壁山が栗松に出したパスは大きくそれ、相手の選手に渡ってしまった。そして一気に円堂と1対1になり、相手選手は必殺シユートを放つた。

「シャイニングドライブウツ!!」

このシャイニングドライブは強い光を発しながら、円堂を襲う。

ピカアアアアアアッ!!

「う、うわっ!?」

ピ――!!

円堂は目くらましてボールを認識する事が出来ず、ゴールにシユートを叩き込まれてしまつた。

相手は今まで1点たりとも失点を許していない…。この先取点は痛いかもな…。

しかし、俺がそんなことを思つているとき鬼道はニヤリと笑つた。
(ふ…これで全て揃つた…!)

監督が時計を確認すると試合開始からジャスト10分、宣言通りの時間で鬼道はすべてを把握していた。

「栗松、お前はいつもより2歩後ろに守れ」

「えつ？」

「それから松野、豪炎寺と雷藤にバスを出す時は3歩、染岡には2歩半いつもより前に出せ」

「ええ…？」

鬼道は今の実力に合わせたプレーをさせるため、仲間に細かく指示

を出し始めた。そしてこの作戦は大成功する。

『ああつとこれは!?雷門のバスが繋がり出した!?』

「栗松、土門へバスだ！3歩先！」

「さ、3歩先でヤンスか…通つたでヤンス!？」

「よし…マックス！」

「待て土門！（1…2…）行け！」

「は、はい！」

「ドンピシャだ！」

鬼道がタイミングの調整をすることにより、ようやくまともにバスが繋がり始めた。俺たちはそのまま怒涛の勢いでゴール前まで攻め上がった。

「松野！染岡にバスだ！」

マックスが出したバスも、綺麗に染岡に渡りそのまま染岡はシュート体勢に入つた。

「うおおお！ドラゴンクラッシュ!!」

「まき割りチョップ!!」

「バーン！」

とドラゴンクラッシュは相手キーパーに弾かれ、クリアされてしまつた。

『これはナイスセーブだ！だが雷門中、この試合初めて雷門らしい攻撃を見せた！』

「すっげえぜ鬼道！さすがお前は天才ゲームメーカーだぜ！」

円堂が興奮気味に鬼道に話す。

「ふふ…今のがゲームメイクと言えるならな」「どういうことだ？」

俺が鬼道に聞くと、鬼道は俺たちを見た後、話し始めた。

「お前たちは自分の力に気づいていない。走力、キック力…どれを取つてもお前たちの実力は格段にアップした。だがそれには個人差があり、当然今までの感覚でやっていればズレが生じる…俺はそのズレを修正しただけだ」

鬼道のこの並外れた観察能力…、鬼道が居ればこの千羽山からの得

点も可能かも知れないな。

「へつ、ちよつとバスが繋がつたくらいで調子に乗つてるペ」

だから都会の子は甘いべ

そんななか千羽山のメンバーはこつちを見ながら笑っていた。

「「かこめかこめかこめかこめかこめかこめかこめ

千羽山のDF陣が誇る必殺技・かごめかごめの3人同時に飛びかかつてボールを奪い取る技によつて、マックスがボールを奪われてしまうが、すぐに鬼道がスライディングで奪い返す。

【さすが鬼道だ】初見の技を冷静に対応してゐる

「雷藤おーつ！」

一〇七

俺は鬼道のハスを受け取り シニード
「決めるつー・ライトニングアロオオー!!」

俺の渾身のシュー

「はあああつづ!!」

「「「無限の壁!!」」」

ギュンンンンン
シユウ：

な、
何!
】

俺の渾身のライトニングアローは、千羽山中最強のデイフェンス技・無限の壁にあえなく阻まれていまつた。

全に殺し切るなんてな…」

ピ。

そして、ここで前半終了のホイッスルがグラウンドに鳴り響いた。